

**NO
COMMENT**

全ての、抑圧された声たちのために――

身をひそめる。草むらに染み込んだ夜に体を浸して、息を殺し、一步また一步と進んで行く。突然どこからか犬の遠吠え、頭上を通り過ぎるその遠吠えに襟首を捕まえられそうな気がして、レイジは石油のような黒い土に鼻先が触れそうなほど低く顔を伏せてじっとしていた。夕方の通り雨に濡れ、固く湿った空気のせいで土は汗ばんだ人肌のようにじっとりと臭いを放ち、それが鼻の奥にもったりと流れこむ。

やっぱり。ここからなら上手く忍び込めそうだ。

ワタルが目前に迫ったホームの壁を見ながら言う。ホーム、かつて数十年前は老人ホームと呼ばれていたそれは老人の数と民主的社会的権力が増大するにつれて規模を拡大し、今やその広大な敷地内に老人の居住スペースはもちろん、文化施設や運動場、公園、スーパーマーケット、病院、郵便局などを有している。旧来の老人ホームは郊外に建てられていたが、多くの新しい街では経済的社会的要請によりホームを中心とした都市計画に基づいて開発がなされており、レイジたちの住んでいる街はその典型的な例だった。過去の経済的繁栄を食いつぶすだけの社会では、老人を中心に経済が回る。大都会でもホームが大規模であることに変わりはなく、シネコンやショッピングモールを備えている所まである。そして、若者はホームから閉め出されている。若者と老人は完全に別階級に隔てられ、いつの間にか公然の社会制度として確立されてしまっていた。例えば、各年齢層ごとに敬称があり、七十代以上は尊師、六十代は御大、五十代は先生、四十代はさん、三十代は君、そしてそれ未満は何の敬称もなく、あるいは単にガキと呼びつけられるといった具合に。

ここは普段全く人が来ないところだからな。警備員も気を抜いてほとんど注意してないだろ。

ワタルにそう答えながらも、レイジは慎重に周囲をうかがう。この土地は昔パチンコ店を建てようとした会社が購入したようだが、ホーム建設にあたり騒音施設を周囲に建てることができなくなった結果草もぼうぼうのまま放置されているらしい。遠くに、歓楽街のネオンの光が見えている、赤青緑黄紫、赤赤赤。細く尖って乾いた舌で目玉を舐めるように、レイジの瞳に飛び込んでくる。赤青緑黄紫、赤赤赤。

早く行こうよ。

立ち止まったレイジを見て、ユイが声をかける。常に警戒心を絶やさないレイジとは対象的に、肝が座っているのか脳天気なのか、ユイは体勢を低く保ちながらもずんずんと前へ進み進む。レイジもワタルも幼なじみで昔からユイを知っていたが、いつもこんなふういつの間にか先導されている。体の小さなユイの鼻先をくすぐるくらいに伸びた草の葉先を鬱陶しそうに払いのけるたびに、短めに切った髪がふわりさらり揺れる弾む。後を追うワタルは嬉しそうな顔をしながらユイの姿を見つめていた。

そのさらに前、先頭に行くのは双子のタクマとタクヤ、短気で単細胞で嘲弄的であり好ましい人間性ではないものの、悪事には慣れているのでこういうときの手際は良く行動を共にするにはうってつけだ。これから忍びこむホームの壁を触りながらにやりにやりと二人顔を見合わせて同じように唇端を撚り、右へ行き左へ行きまた戻りなどしていたが、やがて位置を定めると、タクマがバッグからロープを取り出す。タクマは先に鉤の付いたロープを振り回しながら壁から少し離れて距離を測り、タクヤをちらと見る、タクヤがうなずきを返したのを確認し、タクマは勢

いを付けて鉤を投げた。鉤は上手いこと壁の上端にひっかかり、さらにタクマがロープの手元に付いた金具から出た紐を操作すると細工してある鉤の部分がスライドしてロープが二つに分かれ、さらにその間からも折りたたまれていたロープが垂れ下がり、ちょうどはしごのようになる。タクマがロープから手を放し、振り子のように揺れたそれを息の合った動作で壁の下のタクヤが受ける。ロープの鉤がしっかり壁に固定されていることを確かめたタクヤがそのはしごに足を掛け登り始め、そのすぐ後にタクマが続く。双子は全く同じようなペースと動作ではしごを登りきる、そして次にユイ、ワタル。最後になったレイジがはしごの半ばまで来たとき、壁の向こうでガラスの割れる音がした。既にホームに侵入したタクマとタクヤがさっそく金目の物がありそうな建物を見つけて忍び込んだらしい。

割れて散ったガラスを踏みしだく音、手近な建物に侵入した双子を尻目に三人はめいめい思い思いの方向に走る。深夜のホーム、人目につかぬよう、建物の暗い陰を、路地を、翡翠の霧のような街灯の光の死角を抜けて、まわりつくゲル状の湿気を振り払うように腕を振り、思い思いの方向に走る。三人は金目の物も欲しかったがそれだけでなく、例えばワタルはマンガ、ユイは映画のDVDが欲しかった。ホームの外で手に入るのは若者に敬老精神や道徳を植え付ける教育的な内容の退屈で無価値なものか、幼い子供向けのものばかり。インターネットについてはアクセスできる情報に制限がかけられていることに加え著作権侵害の監視の目が偏執的になっており、多くの少年少女たちにとってはだいぶ古臭いもの以外は見つけれない。まともに楽しめるようなものはホームの中にしかなく、若者はそれを手に入れることができなかった。

一人、レイジはホームの中を駆け抜けて行く、柵を飛び越え、植え込みを薙ぎ払い、塀を蹴上がり、ガラス窓を叩き割って建物に滑り込む。手当たり次第に散らかして、金を盗み、身を翻してまたガラスを叩き割り窓から外へすり抜けて、また次へ、次へ。そしてレイジが最後にやって来たのは図書館だった。ガラスドアを容赦なくぶち割って堂々と中へ入る、ハンドライトの明かりを頼りに闇を歩き地下へ降りると誰もいないコンクリートに遮蔽された空間が靴音で震え、もろい石片のような空気がぱりぱりと裂ける音を立てた。目的の書庫へ入ったレイジは古い紙が放つ独特のにおいに迎えられる。ざわめくようにあちらこちらで舞い上がり、小さな悪魔のようにすり寄ってきて、こちらへあちらへおいでなさいと誘いをかけるのだ。呼び寄せられるまま、魅入られて、レイジは霊安室のような書庫を歩く。一冊を手に取り、数行を読み、足下に捨てて、また次の一冊を手に取り、今度は一ページを読んでみる、そしてまた足下に捨てる。自分が本を読むということをレイジはいっさい周囲に話していない。若者たちにとって本の言葉は教育者の言葉で、それを読むなどということは服従するということと同じだった。学校で読まれる本はもちろん、本屋で手に入る本も老人向けかやはり論語などを用いて若者を教化するようなものしかなく、そんな状態ではまともな若者が本を読もうなどと思うはずはない。本を読んでいるなどと口走れば、周囲からは頭がおかしくなったと思われる。だからレイジは書庫にある本が好きだった。社会から葬られ、もはや誰も読まなくなった本の中いくつかには、強烈に破壊的で反抗的で自律的な言葉がまだ生きていた。レイジはホームに忍び込む度こんなふうに書庫に入って、頁から頁へ、本から本へ、そういった言葉をむさぼっていく。やがてお気に入りの言葉を見つけると、思わず顔をほころばせ、興奮に震えながら、愛おしそうに、その言葉を目で、舌で

から、変だなって。今日も、もしかしてここに来てるかなって思ったら、やっぱりそうだった。

見たもんはしょうがないけど、言うなよ、誰にも。

言わない。でも、誰も知らないより、一人くらいは知ってたほうがいいよ。

レイジは何も答えずにいる、書棚を見つめていた、きっとこんなふうにホームに侵入するのは今回が最後になるだろうと考えながら。

ねえ。

ん？

呼びかけられて、レイジはユイの顔を見る。暗い中で、互いの姿が見えるようにそばに寄っていたので思ったよりずっと近い所において、覗き込む目が瞬きするたび、そのまつ毛のほんのわずかな揺れ動きまで感じられるようだった。目というのは不思議なもので、暗いところでも、いや暗いだけにいっそう、艶を帯びて輝くように見える。そんなユイの目からは、戸惑いや期待、遠慮や親しみのような感情が読み取れる。

今度、読ませてよ。本、レイジの好きなやつ。

ああ、いいよ。でも、こっそりな。

約束だよ。一番ヤバイやつ、エロ本なんかより、ずっとやらしいやつ。

分かったよ。

ユイの言いつぱりと、自分が本についてずいぶん気にしすぎていたような感じが可笑しくなり、レイジは笑う。ユイもそれを見て安心したように、笑う。

だが、二人はすぐに真顔に戻り時間を確認する。もう、ここから脱出しなければならない頃合いだった。例え危険を冒しても、少年たちの手に入る自由はほんのわずかでしかないのだ。

前夜。レイジの所へやって来たワタルは何やらリュックを背負っており、そこから自分のお気に入りのマンガを大量に取り出してくる。

明日から、もう読めなくなるし、レイジに全部あげようと思って。

明日から、ワタルは自衛隊に入る。二年間、実質的な徴兵制によって。中学を卒業した少年たちは試験を課せられ、その結果によりかつての普通科高校のような文官コースと、自衛隊で二年間の訓練を受けた後に警官などの養成学校に進む武官コースに分けられた。ただし、実質的に武官コースはエリートコースに進めない人間の受け皿としての徴兵制となっている。高齢化による社会保障高負担と過剰な保守化と財政破綻によって経済崩壊にみまわれた日本は完全に活力を失い、今や東南アジア諸国と肩を並べる程度のGDPしかなく、経済規模に見合わぬ人口を抱えている上にとことん硬直化した社会で若者が働ける場所などほぼ皆無に等しい。一握りのエリートコースに入れない若者が望める満足な就職先はもはや下っ端の自衛官か警官くらいしかなかったし、それ以外のアルバイトや期間労働についても、武官コースの修了証書なしにはありつけない状態だった。

いいのか？

レイジは目の前に並べられたマンガを見つめる。それはワタルが本当に気に入っていたマンガばかりだった。

どうせ兵役中の宿舎には私物を持ち込めないし。家に置いといてもしょうがないだろ？

確かに。文官コースの宿舎も一緒だけど、夏休みや冬休みには一応家に帰れるしな。

一方のレイジは文官コースに行くことが決まっていた。それにしたってろくでもないものだったが、少なくともまだ本が読む機会がわずかに残っていることに安堵している部分もある。

そう、少なくとも僕と違って読むチャンスはあるんだ。

ワタルはそう言ってソファに寝転び、自分が持ってきたマンガを名残惜しそうにパラパラめくり、閉じたかと思うと未練たっぷりに見つめ、またパラパラめくる。二人はしばらく子供の頃からの思い出話などして夜を過ごす。会話が途切れると互いにマンガを読み始めるが、すぐに何か思いついてぽつぽつと喋り始め、結局そのまま遅い時間まで話し込んだ。

行きたくない。

しきりに、ため息を漏らしながらワタルは何度も同じことを言う。正直辛気臭くてうんざりするところもあれば、全く同じ気持なのも否定出来ないところもある、レイジはほとんど無条件にそれにうなづくようにして、俺も行きたくない、とのべつべつ返していた。

くっそ。結局ユイに告白できないまんま行くしかないのかな。

今までで一番大きなため息、ユイにもう会えなくなる、ワタルが兵役に就きたくない最大の理由がそれだった。ユイは文官でも武官でもなしに、品官コースに行く。妙な名前が付いているが、やることと言えばホームで老人たちの介護に二年間従事した後、希望に応じて各種の専門学校に進むことだ。文官コースに進むほど知能が高くなく、武官コースに進むほど体力がない、そういう人間の進路だった。将来は介護職に就いたりするが、女性はたいてい結婚を想定してこの進路を選ぶ。極端に職が少ないために、それらの仕事は事実上結婚までの腰掛けとしか見なされておらず、慣例で二十五歳が定年になってしまっているからだ。社会は反動的に保守化し、キャリ

ア志向でいられる女性は減ってしまった。民法第七百三十一条の改正により男性は三十歳、女性は十六歳から結婚できたが、相手の男性が五十歳以上なら女性は十三歳からでも結婚できるという条件が追加されている。ごく平均的な女性の一人であるユイもこのコースを選んだが、いつどんな男と結婚したいと思っているのか、ワタルもレイジも知らない。もしかしたら十五歳の今すぐ五十歳の男と結婚したがつているかもしれないし、二十歳くらいで四十歳の男と結婚するかもしれない。

武官コースはキツイな。本当に誰にも会えなくなる。

レイジはうなずきながら、ホーム襲撃の戦利品の一つであるタバコに火をつけて煙を吐く。ワタルは深刻な顔をして、幾重にも渦を巻きながらやる気のないウナギのように広がり漂い消えて透明の香りを残すその煙に見入っている。

ゾットするよ。孤独なだけじゃない、自衛隊でのしごきもキツイらしいんだ。耐えかねて脱落したやつは社会で真逆さまに落ちぶれるだけ、地獄だよ。

今や世論は、徴兵制こそが健全な青少年を育成する真に理想的な教育だって信じてるからな。文官コースは老学者たちがエリート教育の弊害を常に問題視してる。

何が健全だよ。あんなのただの若者イジメじゃないか。

盲目的に命令に従う若者を見て安心したいのさ。心身ともに老いた人間にとっては、そういう若者だけが健全と思える。そしてエリート教育で変に知恵と自尊心を持った若者には多かれ少なかれ嫌悪感を抱くんだ。

そのうち全員徴兵されるかもね。

いや、きっとそうなるよ。極めて民主的なやり方によって。日本人の半分近くが六十歳以上、しかも選挙権が得られるのは三十歳以上になって、国家予算や社会制度はみんな連中の都合のいいように変えられてしまった。昔はシルバーデモクラシーとか言って批判する人間もいたようだけど、もうそんなこと言ってる奴は一人もいない。

ワタルは呆けて何も考えていないような顔、その目の前でレイジの吐く煙は蛍光の白い光の束に突き刺されて、明滅し、白く焦げて、果てる。もうホームを襲撃するようなことはない、こういうタバコも手に入らないだろうし、もしかしたらこれが最後の一本になるかもしれない、そう思いつつも、感傷的な気分になる自分が嫌になりレイジはその感情の波を押しつぶすように力を込めてタバコの火をもみ消した。

でも、結局一番辛いのはユイに会えなくなることだな。

ワタルがまた同じ悩みをつぶやきだす。ワタルはホーム襲撃に参加などしているわりに少々真面目すぎるくらいがあって、不良で活発な人間と真面目で大人しい人間に二分される傾向のある武官コースでは、やや浮いた存在になるかもしれない。

まだ間に合うだろ、告白するだけなら。

こんな夜中に家に押しかけるのかよ。それに、何て言うんだ。僕が帰るまで待っててくれとか言えるかよ。

黙っとくよりはいいんじゃないか？

いや、もし両思いになれたとしてもさ、何か現実的なこと考えてしまうんだ。女はだいたいほ

とんどが二十歳までに結婚するだろ。エリートでもなきゃ、女がまともな金を稼げる仕事を見つけるのは難しい。男にしたって数少ない仕事の口にありつけたとしても、三十歳を超えるまでは自分一人食っていくのがせいぜいな金しか手に入らない。今日びの女は同年代の男なんか相手にしないぜ、現実的な問題が絡むからな。僕達の同級生にも、五十代と六十代の小金持ってるジジイと結婚した奴がすでに何人かいただろ。

ユイがそういう女とは限らない。

いや、そういう女じゃないよ。でもな、自分が三十歳になるまで待ってくれる女なんてまずありえない。この時代に、女にとってそれは冗談抜きで死活問題になるからな。風俗嬢になることもできるけど、それが嫌ならホームレスになって、同じように仕事にあぶれてたむろする男にレイプされて殺されるかだ。誰だってそうはなりたくない。

分かるよ。文官コースの中でもトップクラスの、将来を約束されたようなカップル以外に、同年代で結婚したなんて話、ほとんど聞かないしな。

ああ！

ほとんど叫ぶようにため息をついて、ワタルは頭を抱え、前後に揺すぶり、身体の固いアルマジロのように丸まってそのまま動かない。顔は少し青ざめて、ずいぶんと落ち込んだ様子だった。

昔はもっと自由に恋愛ができたらしいけどな、今はそうはいかない。

特に俺みたいな奴にはな。

抑鬱的な卑屈さからか、ワタルは毛羽立つもの言いをする、さっきまで互いに同じ気持をシェアしていたのに急に拒絶するような、お前は俺と違うよとでもいうような、そんな言葉に、レイジは正面から両肩を突き飛ばされたような気分になる。それは確かに、レイジの心にひっかっていたことで、ワタルともユイとも、タクヤとタクマとも違って、自分は文官コースに行く、他の進路を選ぶしかない人間からすれば、レイジはエリート側の人間にしか見えない。同じ環境に育ち、同じ社会の不公平に憤って、同じように反抗していたのに、誰が手を下すまでもなく、そこには亀裂が生まれ、誰が意図するでもなく、表面化しない仲違いのようなものが生じていくのだ。

俺だって同じだよ。

……悪かったな、ちょっと変な言い方したかもしれない。でも、僕とお前とはやっぱり違うんだよ。文官の奴らは這い上げられる可能性もあるし、この国が嫌なら、努力次第で外国へ渡ることだってできるかもしれない。でもな、僕は、僕の未来は閉ざされてるんだ、どこかへ抜けられる蜘蛛の糸はぷつぷつ切られてる。ガッチガチの上下関係に服従することを刷り込まれて、将来ずっと捨て駒みたいな扱いをされるだけだ。五十代、六十代になって先生、御大と呼ばれ、ある程度の自由を手にするまで、あと何年あるんだ？　ゾッとするぜ。

でも、その時には、十五歳くらいのユイよりもっとカワイイ娘がいて、結婚できるかもしれないぜ。

やめろよ、そんな言い方すんの。

ワタルは苦笑いを返す、そこにはかすかな怒りのにおいすら見え隠れして。確かに、ずいぶん

軽率なことを言ってしまったと思い、レイジは何か取り繕うような言葉を探すが何も頭に浮かんでこずに、ただ、ただ、黙る。その言葉はレイジの本心から出た言葉ではなかったし、ワタルの立場からすればかすかな嫌味すら読み取れたかもしれない。しまった、と思う。

今、自由になりたいんだよ、僕は。

確かに、ワタルは今、他の誰でもなくユイに思いを寄せているのだ。その気持が、レイジに分からないわけがなかった。だからといって、この状況を、あるいはこの立場の違いを、この抑圧と不条理を、解決できる言葉など存在せず、自分がどうしようもなくつまらない人間のような気がしてきて、天井の蛍光灯を仰ぎ、ただ、ただ、黙る。白い光の束を見つめ、その鋭い輝きが自分の体を突き刺して痛めつけてくれることを願う。

その後はただもうしらけて、会話もなく、ワタルはそのうち電話でもするよと言い残して帰っていった。レイジは置き土産のマンガを部屋の隅にやって、じっと見る、ただの一ページさえ、開いてみる気にもならない。マンガたちは、いじけた子供のように、部屋の角にぴったり収まって動かない。この苦々しさは、何をどうしたって晴れそうもない。

春は優しく、そして虚しく、沈黙に揺れて茂る木々、寝転んで見上げるレイジの頭の上で、色とりどりのビー玉のように太陽の光が葉の表面を転がり、落ちてくるそれが音階のように耳をくすぐった。家の近所の川の辺で、何もせずにただ寝転んでいる。何かをしようという気にならない。金色の陽光と緑玉石のような木々の葉が彩をなす美しい外景とは全く逆で、レイジの内景は倦怠に満ちた時間がウジのように湧いて皮膚の下に這いずり込み、屍になった身体から肉を少しずつ食いちぎっていくような感じだった。ひどい気分のまま昨晚のことを思い出して目を閉じて、頭を掻いて二度三度転がる。なぜ自分がこんなに無力で無抵抗なのかということについて無気力に考えて、マシな答えは何も出ず、再び頭を掻いて二度三度ため息。

ふっとそよ風、よく知っている柔らかい香りが鼻先でひらりと踊った気がして、レイジは目を開けてみる。

お昼寝？

ユイの、よく知っている顔が口もとに笑みを浮かべて真上からレイジを覗き込んでいた。キラキラとした七色のビー玉がユイの指先から落ちて、レイジの唇で冷たい感触と共に弾ける。手に持ったペットボトルに付いた水滴が指を伝って落ちてきていた。

寝てない、何もすることないから、ここで横になってただけだ。

何もすることないなら、声かけてくれたらいいのに。これから、もうあんまり会えなくなるんだし。寂しい限りだね。

夏休みになればまた会えるよ。それに、新しい学校でも友達できるだろ。

たぶん、品官学校のコたちなんてみんな退屈だよ。隣の家のお姉さんが品官学校に行っていて、その友達と会ったことあるけど、薄っぺらいことしか言わないの。みんな結局、年取ったオジサンたちにどうすれば愛されるかってことしか考えてない。ある意味とてもかわいそうだけど、一方で賢くならないようにするのは要領の良さでもあるんだよね。

レイジはユイの表情の翳りを見つめて、できるだけ寄り添うようにしてその気持を想像しようとする。ユイは妙に勘の鋭いところがあって、数学や暗記が苦手なので勉強こそできないが、ある意味では非常に頭が良く、もちろん品官学校で周囲に上手く合わせてやっていくこともできるはずだが、その反面、周囲と自分の考え方の違いからくる孤独について心配をしているのかもしれない。

品官学校がそんな感じだっていうのはよく聞く話だけど、ホントにそんな人間ばかりなのかな。

必ずしもそうじゃないと思うよ、でもね、自分なりの考え方なんて、エリートコースの人間ならいざ知らず、品官コースや武官コースに進むコたちにとって実際は邪魔なだけ。だから、できるだけ早く考えるのをやめた人間の勝ちなの。みんな考えるのをやめて、素直でカワイイ女の子になって、そして四十歳から五十歳くらいの有望なエリートのオジサンにお嫁さんにしてもらうの。それが品官学校に行く女の子たちの夢なんだよ。

そうか。

呟いて、レイジは考え込む、ワタルのときと同じようにユイとの間にも溝を感じながら。皆が今までと同じようにしているのに、各コースへの入学が近づくに連れて少しずつ別の人間に変わ

っていく。特にレイジとの距離は大きく広がって、これから文官学校へ入ってしまえば、もはやこの関係はばらばらになって二度と取り戻せないような気がしている。

あ、ゴメンね。別にレイジに嫌味を言ってるわけじゃないよ。

レイジの浮かない様子を察して、素早く、ユイはフォローを入れる。

分かってる。

変に気を遣わせないよう、レイジは笑顔を作ってみせる。ただし、頭の中は混乱していた、ユイやワタルとの距離を感じるたび、自分の立ち位置に確信が持てなくなってくる。文官コースに進みたいわけではないが、武官や品官コースに進みたいわけでもない、あるいはそのいずれにも進まないという選択肢も想像できず、優柔不断の半端者、仰向けになって干からびたカエルを川に浮かべたように無様に流されている。力ない視線をして、水の流れうねりを見つめる、そこに浮かぶ自らの姿を探すようにして、綾目に沿って。

何か元気ないね。

そりゃそうさ。コースに入るのに元気いっぱいになれるか。

これからは年上には絶対服従の世界だからね。勉強や実技や何よりもそれを教え込むことを目的にしてる。

そうさ。地獄さ。

喜ぶ人もいるよ。大人に近づくんだけとか言って、特に文官の人らは。

服従を叩き込まれることで大人になれるわけない。幼稚さの中で一生を過ごせるように、命令するかされるかという関係性に全てを還元して他人の存在を消すだけだ。

自制心と謙虚と敬老的道德心こそが大人の自覚である！っていうのが現代社会の一般論だけだ。

馬鹿な。大人になるというのは他人がこの世に存在しているということを知ることさ。支配と服従の関係というのは自分と他人の境界が未分化なままなだ、つまり、幼児と世界の関係。他人に対する想像力の芽を摘まれた人間が成熟できるはずかない。

へへ。

何だよ、変な笑い方して。

元気出てきた。

不満たらたらだからな。ぶちまけてると元気出る。

その調子。

愚痴ってばかりいらんないけど。

そうだね。

そして沈黙、二人は並んで座ったまま、ゆっくり流れる川を見つめている。春の穏陽、星空のようにきらめく水の上に舞い降りる白い鳥、はねるしぶき、さらりとした風、草葉の無数の緑色がこすれ合い絡まり合い幾重にもグラデーションを変えていく。飛び立った鳥、その波紋の真ん中目がけてユイが石を投げてみる、真ん中から少し外れたところへ落ちて、音を立て、また新しい波紋が広がった。物心付いた時には、ユイの母親は死んでいた、だから他の子どもよりいろいろ考えて生きてきたのかもしれない。天真爛漫に振舞うわりには、どこか、その表情には黄昏の

終りのように深青い憂いが浮かんでいる。

あ。そうだ。

突然、ユイが声を出してレイジの顔を覗き込む。驚いた顔をしたレイジ、それを見てユイは愉快そうに笑う。

どうかしたのかよ。

そういえばさ、本、読ませてもらってない。

読みたいの？

もちろん。でも、もうすぐコースに入っちゃうしな。結局、読む時間ないね。ざんねん。

また夏休みになったら読ませてやるよ。

約束。

ホントに読みたいならな。

信じてないの？ ヒドイね。

いや、本読むなんて変なやつのことだろ。

でも、面白いんでしょ？ レイジの読んでは。

俺にとっては、少なくともね。

じゃあ読ませてよ。私にとっても面白いかもしれない。

分かった。

約束してね。

約束するよ。

それから一週間あまり、文官学校への入学を前にして、レイジは自分の部屋で呆々として何もせず、惘々として無気力で、ただじっと、机の引き出しに隠した書物を繙き、眺めて、閉じて、そして次の一冊を繙く。考えていたのは、ただ流されるままにエリート教育を施す学校へ行こうとしている己の、自由を求めることもなく、戦うこともない、心がいなさについてだった。ワタルは、そしてタクヤとタクマも、武官コースに徴兵されてしまった、ユイも、品官コースで介護の仕事をはじめることになった、みんなでホームに侵入したり、そんな行為など、反抗に見えて単なる遊びでしか無かったのだと認めざるを得ず、ただ、潰しても潰しても出てくる口内炎を舌先でいじるように、ずっと続く苦々しさをひねくりこねくり回している。

本を開く、閉じる、せめて紙の上でも、自分を奮い立たせてくれるような言葉を探して、むなしい試みでしかなく、しかしそうしないのはもっと苦しくて、レイジはそんな言葉を紙切れの上書き出ししたりしてみる。……この人間存在たる大群衆は、もうたくさんだ！ と声を上げ、行進を始めたのだ――カストロやゲバラのようなキューバの闘士たちによる第二次ハバナ宣言。

……年寄は譯がわからぬ。若い方は腰拔だ。其でも、腰拔でも譯がわからぬでも、日本が御互に眞面目であると言ふならば、眞面目であると言ふならば、ひよつとしたならば此國を持ち堪へることが出来るかも知れぬが、馬鹿なくせに生意気で、悪るい方へばかり上手になつたと云ふに至りましては、何處までも見所は無くなつたのである――足尾銅山鉍毒に抗議した田中正造の演説。……我々は宣言する、この地球の上で、人間であること、人類の一員であること、人類の一員として尊敬を受けるといふことの権利を、我々が持っているといふことを。そして、社会の中で、地球の上で、今日この日に、人権を手にする、必要とされるいかなる手段を用いても、それを実現するつもりだといふことを――黒人解放のために闘ったマルコムXの演説。……我々は奔走して戦い、戦って奔走した、ちょうど我々の祖先たちがそうだったように。決してあきらめず、決して屈服せず、決して打ちのめされることなく――メキシコ先住民の解放を求めて蜂起したサパティスタの宣言文。……烈しく欲求することは事実を産む最も確実な真原因である――日本の女性解放運動の嚆矢である平塚雷鳥による青鞞創刊の辞。

過去から現在に至るまで、この、年齢による序列支配をまともに批判した人間はいない。じっと我慢していればいずれは誰もが支配する側に回ることができる、そういう算段による下卑たるさがこの不平等を放置してきたか、あるいはフェミニズムのように外国から輸入された問題意識についてしか考えることのできないこの国の人々は、自らの手でそのような制度をまともに批判する理論を構築できなかつたのだろう。知識人も市井の人も、何らそれを疑問に思うこともなく。その果てに、衰退する社会ではより若い世代にツケが押し付けられ続け、今ここでこうしてレイジは苦しんでいる。そのほうが楽なのは百も千もあるいは万も承知の上だが、レイジは自分を抑圧し支配する人間と同じようになるのは絶対に嫌だと思ふ。思いつつも、手立てを見つけれずにいる。

今、自由になりたいんだよ、俺は。

友達の、ワタルの、言葉が頭の中で響く、遠ざかったかと思えばまた近くに現れ、時に鋭く時に鈍く、反響し輪響し、決して消えない。レイジも、全く同じ気持なのだ。もしかすると、たった今書き出してみた言葉の主たちも、深刻さの度合いは相当に違えど、全く同じ気持だったかも

しれない。そしてこういう言葉たちは、無視、偏見、類別、冷笑、そして熱狂に迎えられてきた。例えば、自分はこういう言葉を作り上げることができるだろうか、そしてその言葉が、誰かに届くことがあるだろうか、と考えるが、あまり現実的な話ではなさそうだった。ユイは、考えるのをやめた人間が勝つのだと言う。誰もが、あきらめ混じりに、あるいは当然の事として、服従を是とする。そういう人々にとって、そんな言葉は耳ざわりなだけなのだ、もしかすると、そこで今苦しんでいたワタルにとってさえ耳ざわりかもしれない。だが、いったいどれだけの人間がそうやって、そこに生まれ出るべきだった言葉たちを中絶してきたのだろう、全ての抑圧された言葉たち、自分がまだ考え続けることができる人間ならば、そういう言葉の全てを代弁することは可能だろうか。いや、代弁するのではなく、一つの、普遍的な声として発することは可能だろうか。レイジはそんな考えを抱いて、紙とペンをまたぞろ手に取り、何の希望もなく、何の勝算もなく、何の英雄的感情もなく、ただ、ただ、やむにやまれずして、言葉を書きなぐり始める。それらは孤独で無力で誰にも届かない言葉だったが、少年の心に抱えておくには重すぎた。断片でしかない言葉をどうにかまとめて形にしたレイジはパソコンを立ち上げ、一直線に操作して、目的のウェブサイトにとどり着く。それはブログと掲示板の中間のようなところで、ある程度のまとまった長さの文章を匿名で書き込むと、それが観覧者に対してランダムに表示されるというものだった。掲載された文章の中には検閲を受けるようなものもあったが、評判が良ければ誰かが必ず保存して、消されるたびに再度アップロードされている。レイジは、この時代にブログなどに載せるには危険な、自分の無恥拙劣な反抗的檄文をそこに書き込むことにしたのだった。こんなものは抵抗のうちには入らなかったが、それでもレイジは我慢できない、このまま大人しく文官学校へ進むのは嫌だった。

私の怒りには顔がない

その怒りを表現する声もなく筆もなく言葉すらなく

塞がれた喉から絞り出したうめきは

コンベアの上で分別されて消えていく

私を名付けるものなどなくて

荒野で吹きさらしの石ころのように

剥き出しのまま

私は

顔を隠し

口を嚙み

耳を覆う

仮面を被せられないように

マイクを向けられないように

教育者の言葉を聴かないように

ホモジナイザーに接続されたマイクに対しては
ノーコメントとしておこう
やがて勝ち取られる私の声は
ここにはいない
私のような誰かのために発せられるだろう

誰か
それはきっとあなたのことだろう
私のように
顔を隠し
口を嚙み
耳を覆う
あなた

顔のない怒り
顔がないからこそ
その顔は私のものでもあなたのものである
私はあなた

私は孤児
私は女性
私は若者
私はゲイ
私は期間労働者
私は外国人
私は先住民
そして同時にそのどれでもなくて

あなたは私
その怒りを表現する声もなく筆もなく言葉すらなく

ホモジナイザーに接続されたマイクに対しては
ノーコメントとしておこう
やがて勝ち取られる私たちの声は
ここにはいない

あなたたちのような誰かのために発せられるだろう

書き込みの作業を終えてもレイジの心が晴れるわけがなく、ただ鬱々としてむなしく、寥々として悲しく、涙すら溢れそうなほど無力な己が馬鹿馬鹿しく思える。仰ぐ天井の蛍光灯、白い光の束、その鋭い輝き。何度か固く目を閉じて開き、合わせて深く呼吸を行う。どうあがいても、このままレールに乗る以外になさそうだった。例えばここから逃げるための自殺など、考えるだけしらけてしまう。悩みは深刻であればあるほど滑稽さも増す。何か、結論を出さなければならない。ならば、せめて自分を抑圧し支配する人間とは違う人間になろうと思う。自らに無力を感じさせる相手に出会うとき、誰もが抵抗をあきらめ屈服し、そして今度はその相手と同じような人間になろうとしていく。その相手と同じようなことを考え、同じような言葉を話す、自らがそんなふうに変化していることを知ってか知らずか、そのいずれにおいても。せめて自分だけはそんなふうにならないようにしようと思う。どれほど屈従を強いられ、無力感を味わうことになっても、連中とは違う人間になるのだ。その決意一つだけ胸に秘めて、明日からまた生きていく。

四月。咲いた桜が散り始め、新たな生活が動き始める。宿舎から文官学校へ通う道を取り囲む桜の、粉吹く白カビのような花を見る度、レイジは早く散ってしまえと忌々しく思う。同じ生活の、同じ人間の、再生産、逃げ場なく息苦しいそれが飽きもせず延々と続く、周囲の人々が毎年変わらないその美しさを喜ぶが、レイジにとって桜の花が連想させるのはそういうことではない。足下のアスファルト一面、そこには散った桜の花びらが敷き詰められている。花びらは泥水をすすって汚れ、茶色く染まって朽ちていた。踏みしだく、靴の底で花びらは振れ、破れ、千切れ。顔も上げず、レイジは濁った川のように足下に続く花びらを見ていた、そうすれば、この光景が繰り返されるのはこれで最後になるように感じられる。陳腐と倦怠と停滞の反復が終了し、そこから完全に新鮮な世界が噴出して来る、エリートコースに進んだことを誇らし気にして頬を桜色に染めているだけの蒙昧な同級生たちに囲まれながら、レイジはたった一人、そんな夢を見ていた。

其為人也、孝弟而好犯上者、鮮矣、
不好犯上而好作乱者、未之有也、
君子務本、本立而道生、
孝弟也者、其為仁之本与。

朝礼はバカの一つ覚えの暗唱と共に始まる。この一つ覚えのバカは論語の一節で、年上の人間に従うことが秩序を守ることにつながり、それこそが君子の道の根本を成す最高の道徳であるという意味らしい。全国の文官学校で、春々夏々秋々冬々、レイジと同じくらいの歳の少年少女たちが大きな声で毎朝このお決まりのフレーズを唱え続けている。こんな見え透いたやり方で洗脳される奴がいるのかとレイジは常に冷めた目で見ていたが、なかなかどうして、毎朝みんなで決まったフレーズを決まった時間に決まったリズムで唱えているうちにそれが気持ちよくなってしまいうらしく、同級生たちは生き生きとして、まんざらでもなさそうに弾けるほおずきのような声を出して呪文を唱えている。ずいぶんひどい光景だったが、それをひどいと思っている人間はレイジ以外にはいない。

担任のヤマモトは餌乞雛のようにぴよぴよ鳴く生徒たちを見て満悦軒昂し、もっと声を出せとか一語一語の意味を噛みしめながら言えとかそんな実際には中身の無いとについてぼんぼん気炎を吐く。一つのクラスには六十代の担任と、五十代の副担任、四十代の指導助手、三十代の見習い雑用係が一人ずつ付いている。昔はどの教師も先生と呼ばれていたが今はそうではない、ヤマモトは六十代なのでみんなからヤマモト御大と呼ばれていた。文官学校に限らず少年少女の教育機関では、この敬称について厳しく執拗に指導されている。例えばうっかりヤマモト先生と呼んでしまえば、別室に呼ばれ延々と説教など食らい、大声でヤマモト御大と何度も呼び直しをさせられるのだ。七十代以上は尊師、六十代は御大、五十代は先生、四十代はさん、三十代は君、その敬称は絶対で、特に二十代以下の人間が間違えることは許されなかった。だから入学して一ヶ月もしないうちに、生徒たちは教師たちの胸に付いたバッジから下がる綬の色を見て素早く年齢を判断し、敬称を呼び分ける習性を身につける。七十代以上は紫、六十代は青、五十代は赤、四十

代は黄、三十代は白、飛鳥時代の冠位十二階制にちなんだ色分けがされ、生徒たちは不気味な緊張感の中で何よりもまずそれを頭に叩き込むのだ。

レイジくん。

隣の席のトシロウが、朝礼後の短い休憩時間に声をかけてくる。同じ長さに切りそろえた髪を額に撫で付け、口もとはいつもニヤケてややしまりなく嘲々としている。

今度、入学一発目のテストがあるらしいんだ。

ああ、そうなの。

僕は上位に入れるかなって思うんだよね。選試の問題も、僕にとっては結構簡単だったし。ねえ、レイジくんは、どう、自信ある？

どうだか。

どうでも、良い、とレイジは思いながら首を傾げる。選試、すなわち文官武官品官各コースの選別試験はもちろん、定期テストの順位などレイジの関心ごとではない。一瞬、いったいコイツは何を言っているんだろうと考える。武官コースに行って実質的に徴兵されたワタルのような同い年の少年少女達がいる、もし戦争の一つでもあれば死地に赴くこともあるというのに、いったいなぜ学校のテストの点ごとの話題ではしゃぐことがあるのか。不快感に顔を歪める、ただ、そこでレイジはふと思い直してみる、トシロウは裕福な家庭の子女が集まる私立中学から上がってきたような人間で、周囲は当たり前のように文官コースを進路とする連中ばかり、つまりワタルやタクマやタクヤ、さらにはユイのような人間でさえ見たことがなく、武官や品官コースのことなど現実感のない別世界の話にすぎないのだ。

俺はあんまり自信ないよ、せいぜい真ん中くらいに入り込めるようにはしたいね。

別に何位になろうがどうでも良かったが、レイジは適当に話を合わせる。

へえ、君、頭良さように見えるけどね。謙遜してるのかい？

言いつつ、トシロウの口もとはニヤケて満足そうにしている。

してないよ、ホントにそれくらいのもんさ。そんなことより……

レイジは話題を切り替える。一つ、確認しておきたいことがあった。周囲に文官コースに進む人間がおらず、あまり情報のないレイジとは対象的に、前後左右どこを見ても文官コースの人間に囲まれて育ったようなトシロウは様々な情報を持っているはずだった。

何だい？

たぶん、テストが終わった後のことなんだけどさ。

ああ、あのことか。

面白くなさそうに頷いて、トシロウはさっきまで上機嫌だった顔を曇らせる。そのことは、今まで様々なものに守られて生きてきた毛並の良い子女達にとっては特に不快なはずで、無理もない反応だ。

やっぱり、やるのか？

そうだよ。君、知らないのかい？ もう五年くらい前からそうなのよ。文官学校に入って最初のテストが終わったら、まるで武官コースの人間みたいな訓練を一定期間させられるんだ。やれやれだよ、僕らはそんなことをやるような人間に生まれついてないのに。入学最初の一大会

ベントが、兵隊さんごっこなのさ。

冗談じゃないよな。

必要な情報を得て、レイジはもはやこれ以上トシロウの話には興味をしめさず、適当に相槌だけ打つ。年齢による支配の行き届いた社会にはいかにも似つかわしい教育で、新入生にはまずもって、軍隊的な規律訓練を体験させ、無条件に命令に従う習性を体に覚え込ませるようにするのだ。ひたすら教官の命令に従うことだけを求められ体力的にもキツイ、たいていは従順な文官コースの生徒たちもこれには不満を漏らしている。そしてもう一つ、彼らを怯えさせる噂があった。

上級生も参加するんだよな？

その噂を確認する必要を思い出し、レイジはもう一度質問を投げかける。トシロウは不機嫌そうな顔を少し青くさせて頷いた、穴を開けられた米袋のように、嘲々としたニヤケ顔の裏に潜んでいた神経質な性格の片鱗をぽろぽろとこぼしている。上級生によるシゴキ、それはたった五年くらいしか続いていないこの訓練の、名物になりつつあるという。上級生たちも入学時にそういう目に会わされてきたわけだが、その恨みつらみを、自分たちを苦しめた相手にではなく、立場の弱い新入生たちにぶつけてくる。そういう歪みきった復讐の連鎖は、もちろんこの時代にもあった。

言葉の墓場のようなそこは、書庫の思い出とはかけ離れて、退屈な本ばかりが窮屈にひとつも文句を言わず書架に押し込まれて、霊安室のようなあの書庫で言葉は生きていたが、この図書館では明るい照明に照らされて輝く本の中で言葉は死んでいる。そこにある本の全てが、教育と理解が可能であるという思い上がりに満慢としていた。反抗的で理解を拒絶する自律的な言葉、レイジはそういうものを常に読みたがっていたが、文官学校にある図書館ではとうていそういうものは見つかりそうもない、せいぜい学校の課題を楽に片付けるための参考書くらいしか見つからないだろう。返す踵の、靴底が床を押滑る音が、凍った音符のように静かな室内に響く。放課後、迫る試験勉強に精を出し出す自習室の生徒たちが一斉にこちらを見て、また一斉に机の上に視線を戻す。今までレイジの周辺にいた仲間たちとは違って文官学校の生徒たちの中には本を読む人間もいたが、しかし皆がたいてい学校の図書館にあるようなものしか読んでいない。ただそれは無理もなく、図書館や本屋にはあの書庫にあったような本など一冊も置かれておらず、一般的な家庭にレイジが好むような本などあるはずもなかった。こんな所に来るだけ無駄だったし、それは分かりきっていたことだった、そうしてレイジは誰にも聞こえないようなため息を長く吐く。

何か、良い本は見つかりましたかな？

部屋の出際に、声をかけられて振り向く、そこには図書館の司書をしている老人が立って、レイジを見ていた。薄くなった白髪を品よくまとめ、清潔な身なり、穏やかな表情をして、レイジの知る老人たち、この時代に多い傲岸不遜で若幼蔑視なそれとは違った雰囲気をしている。胸に付いた名札と、バッジから下がる綬をちらり見る、鮮やかな紫が、鉛の聖像のような独特の存在感と圧迫感を放つ。

いえ、本日はこの図書館を見学させていただきただけです。私は普段本を読まないもので、どのようなものが良いのやら分からなかったのです、タカオカ尊師。

受け答えしながら名札の名前を盗み見て、レイジはふさわしい敬称を付けてそれを呼ぶ。タカオカは穴蔵から外に出た人のように目を細め、強い光にゆっくりと瞳を慣らすようにして景色から滲み出てくるレイジの正体をとらえようとしていた。

ここにある本は、あなたにはいくぶん退屈すぎたでしょう。

老化で痩せた声帯から出る言葉は微妙に震えていたが、落ち着いて知的な雰囲気を帯びている。レイジは考え、タカオカの意図がよく分からず、あいまいに首をかしげてみせる。口調に嫌味な感じはない、言葉通りだとすれば、ホームの書庫から盗み出した本を読んでいたことをそれとなく感じ取ったのだろうか。いや、そんなことはない、とレイジは思う、ほんの少し姿を見ただけの、ろくに言葉も交わさない人間からそこまでの事実を読み取ることなどできないはずだ。

あなたが何冊も何冊も本を手にとって棚に戻している様子を見ているとだね、どうも迷っているというよりは、求めているものがはっきりとしていて、それに見合うほどのものが見つけれないというような感じがしましてね。

タカオカの浮かべる笑みは七月のコリーのようには柔和で、とても詮索や邪計というふうではない、が、レイジは警戒心を解かず、知るも知らず、十代の少年が七十代の老人尊師に向けるにはずいぶん鋭い視線を向けていた。うっかり書庫でしか手に入らない本のことなど口走れば、ど

んな面倒を引き起こすか知れない。

私には難しかっただけです。何とか読めそうなくらい易しいものを探していましたが、そういうものも見つかりませんでした。求めているものが見つからなかったというのは尊師の宣しましたとおりですが、しかしそれはそういうわけだったのです。

タカオカは同じ笑みを浮かべたまま頷く、しかし一定の間合いを保つようにしながらレイジを観察しているようだった。

ちょっと、お時間ありますか？

タカオカは図書館の奥にある司書室、個人の書斎のような部屋へとレイジを案内する。常に物腰柔らかく恭としたその姿勢は、レイジが今までに見たことのあるどの老人たちとも違っており、返って強い警戒心と、それに勝る好奇心を呼び起こした。

普段は誰も来ない、部屋には椅子が一つしかなく、勧められたそれをレイジは断り、タカオカは頷いて、座れることに少し安心したような顔で腰掛けた。がらり、音を立ててタカオカは座った椅子の正面にある机に付いた引き出しを開け、そこから鍵を取り出す。そして椅子をくるり、回転させて向き直り、今度は横にあった棚に付いている戸の鍵穴にそれを差し込んだ。つやのある甘い茶褐色をした紫檀の棚から木のおいと同時に、もう一つ別のおいが漂いレイジの鼻と感情をくすぐる。レイジは驚いてタカオカの顔を見る、タカオカは笑みを絶やさず、そこから色の黄ばんだ、古い本を取り出して机の上に置く。

漱石は好きですか？

問われて、見ると、その本は『私の個人主義』と題された漱石の小論集で、レイジは何と答えて良いのか分からず、じっと、雨ざらしの雑誌のように汚れ古びた表紙から視線を動かさない。レイジは別に漱石が好きではない、この時代にも『こころ』の抜粋が教科書に載るような作家で、本を読まないレイジの友人たちからはつまらない教育的なものの一つと見なされており、だからあえて読もうと思ったことなど唯の一度もなかった。そんなレイジの様子にタカオカは、ふふ、と愉快そうに笑う。

私はとても好きなんですよ、ただね、とても残念なことに、今では彼の限られた作品しか読めない。これは漱石の、葬り去られた本の一つです。

タカオカは幼い孫の頭でも撫でるように表紙に触れ、ぱらぱら、ページをめくっていく。その動きに合わせて古い紙のおいが漂い、また、レイジを手招きする。タカオカはやがて手を止め、途端、温和な目に強い光が現れ、そこに書かれた文に視線を這わせる、そして、読み上げる。

――もしあなたがたのうちですでに自力で切り開いた道を持っている方は例外であり、また他ひとの後に従って、それで満足して、在来の古い道を進んで行く人も悪いとはけっして申しませんが、しかしもしそうでないとしたならば、どうしても、一つ自分の鶴嘴で掘り当てるところまで進んで行かなくってはいけません。

タカオカは息をついて、本を閉じ、机に置いた、後には言葉の余韻と、古い紙のおい。レイジはどうしても上手く反応できない、とにかく、タカオカの真意を測りかねていた、必死で考え

、必死で探るが、親意か邪計か、どうしても確信が持てない。

こんなささいな、古いものに対する盲従を否定しうる一文が入っているというだけでも、連中はこういった本を読めなくしてしまった。はっきりとした検閲があったわけじゃない、ただ、社会の空気にそぐわないものを、自分が正しいことをしているという感覚の下で皆が、読まず、出さず、忘れていった。だから、今では、私のような老いた人間の蔵書か、どこかの図書館の書庫などにひっそりと眠っていて、端から、じわじわと処分されていっている。残念なことだ、耐え難いほどにね。

自分の殻にこもって呟くように話す、タカオカ言葉からは敬語が消えている。ただ口調には相変わらず高慢な所はなく、むしろ友人に語りかけているような雰囲気さえある。

タカオカ尊師は、その風潮は行き過ぎているとお考えなのですか。

向き直り、レイジを見て、タカオカはあいまいな笑みで答える。そして少し声のボリュームを抑えて、君は今の一節、どう思う、と訊いてきた。

興味深い、ですね。

レイジは慎重に答える、一方のタカオカはそれを聞いて少し嬉しそうにしていた。

興味深い、とは？

作品が教科書に載せられているような作家が、実は現代の人々からは忌避されるようなことも書いていた、そういう事実が興味深いと思いました。

気に入ったかい？

ええ。

うっかり警戒心を忘れて答えてしまう、レイジは一瞬取り繕うべきかと思ったが、タカオカは満足そうにますます嬉しそうな顔をしているだけだった。まあいい、とレイジは考える、老人がこのことを教師たちに話すことがあっても、せいぜいくだらない説教か謹慎かで済むだろう。

私も若い時からずっと、こういうものが好きでね。ずっと読んでいて、結局何も出来ないまま歳だけ重ねて、今はここでこうしている。唯一良かったのは、他の連中と違い、老いて人は尊敬を集めていなければならないという強迫観念から解放されて生きていられるということくらいか。他の連中はみじめにも、こんな紫のリボンをちらつかせて、歳若い者たちに形だけでも頭を下げてもらいたがる。そんなことを要求すればするほど、結局誰からも尊敬されなくなるというのに。

タカオカ言葉を聞いてレイジは驚く、今までこんなにはっきりとこの制度を批判する人間は見たことがなかったし、ましてそれが皆から老人尊師と崇められるような人間の口から出ることがあろうとは、さすがに夢にも思わない。

尊敬というのは、常に人と人の中にあるものですから、それは相互的なものでしかありえない。その連中に代表される人々は一方的なものを尊敬と呼びますが、それは単に服従や崇拝に過ぎません。人は、自分を尊敬しないものを心から尊敬することができない、そういう生き物です。

レイジは同調して、そんな言葉を返してみる。警戒心を失ったわけではない、しかし正直な意見を述べられる相手がいることについて嬉しくなって、軽はずみとも思える言動をしてしまう。

どだい、連中は救われんのだよ。若い時にさんざん服従してすり減らした自尊心を、必死で取

り戻そうと他人に頭を下げさせる。だが、それは手遅れでしかない。戦うべき時に戦えなかった人間には、絶対に自分を誇ることはできん。生涯、心の奥底で自らを恥じ、それをごまかし続けるだけだ。

あなたは、戦ってきたのですか。

レイジはほんの少し敬語を崩してみる、自分と同じ様に憤りを感じてきた人間を目の前にしているのだろうかという期待を込めながら。

いやいや、私も偉そうなことが言える人間ではない、周りと同じ様に、ずっと頭を下げて自分を押し殺し、若い頃を過ごしてきた。しかし、ずっとこの漱石のような本を読みながら、残りカスのような誇りだけは必死で守り通してきたつもりでね。

再び、タカオカは愛おしそうに本の表紙を撫でる。きっと、何度も読み返しながらも大切に扱ってきたのだろう。古くなり、色あせ、何度もページをめくったような跡があるわりには、あまり形の崩れた印象を受けない。

君、どうだろう、その敬語を止めてみないか。私には残りカスのような誇りがまだあるおかげで、他人が自分に対してへりくだったり頭を下げたりするのを見るのが嫌なんだ。自らに誇りを持つ人間は、同じ様に誇りを持つ他人が好きだからな。互いに敬語を使うという方法もあるが、君にはこっちのほうが楽だろう。

相変わらず嬉しそうな顔、タカオカは本当にこの時代の人間にしては突拍子もなさすぎることを言う、ここまでくると、もうほとんど悪ふざけだった。

私は、対等な関係が好きなんだ。こんな歳になってしまい、妻も亡くして、もう周囲の誰もがただただ私にへりくだるばかりで、嫌になるんだよ。上下関係があると、言う側と聞く側に固定されてしまって、そこにコミュニケーションが存在しなくなってしまうのさ。どうもいかん、そういうのが寂しくてね。昔からそうなんだ、この国は、誰もが独り言を喋っていて、結果、皆がいつも孤独なままでいる。

レイジはずっと、タカオカを見ていた。タカオカの表情は、レイジに対する期待に満ちているような気がした、その柔和な笑みを、一貫したメッセージとして、絶えず送り続けている。

遠慮はいらんよ。

そうか。

緊張していた表情を崩して、レイジはタカオカの要求を呑んでみる。これは老人の道楽、危険思想を狩るための罠、あるいは共犯関係のような友情か、それは知れないが、タカオカとの会話は楽しめそうな気がする。

そりゃ願ったり叶ったりだ、爺さん。

その言葉を聞いて笑うタカオカの顔には、どこかワタルやユイのような少年少女たちと似たような雰囲気があった。

ただ承知していると思うが、私以外にはうかつにこんな言葉遣いをせんようにな。私が若い頃は多少は許されたし、むしろ少しずつ緩くなっていくくらいだが、老人が圧倒的多数派になり、社会が活力を失い衰退の一途をたどるようになると、誰もが手に入れたものを守ることにしか考えなくなり、こういうことが厳格になっていった。君はうんざりしているだろうが、世の中の人間

はどうしようもないほどその上下関係に硬直的になっている。私たちがやっているのは、危険な行為なんだよ。うっかり私にそそのかされて、君が社会から抹殺されるのは私の望むところではない。

分かるよ。でも、本当にまともな行為というのは、常にいくらか危険な行為でもある。

レイジが返すと、タカオカはそれがあまりにも愉快だったようで、とうとう声を出して笑っていた。

爺さんは、抵抗しようと思ったこともなかったのか？

恥ずかしいが、その勇気も能力もなかった。割り切れぬまま、しかし臆病にも世に適應することを選んで、今日までだらだら老いてしまった。

みんな、そうなのかな。

そうでもない、私のように腐ってしまった人間もいれば、抵抗した人間もいただろう。しかしまあ、大人しく従っておくほうが楽で、メリットもあるシステムだ。それがなくなるほうが良くても、抵抗と服従の二つの選択肢の中で、皆が抵抗しないのなら、個人にとっては服従のほうが得点の高いゲームになっている。抵抗した人間は、適当な罪状を貼り付けられて逮捕され、みんな牢屋の中にでもいることだろうよ。

爺さんにはそういう打算があったのかい。

そんなことはない、何もできずに生きてきた結果がこうなったというだけさ、私の場合は。ただ――

ただ？

しょせんは先も短い、くだらぬ人生の締めくくりに、ちょっと一矢報いてやろう思うことがあってな。

レイジは黙ってしまい、言葉を継がない。ずいぶんあけすけに危険なことを喋る老人に、嬉しさを乗り越えて不吉な予感のするばかりになってくる。タカオカはいたずらを企む子供の、血色の良い顔を弾むようにさせる健康さで、喋っていた。が、そんなレイジの様子を察してかあるいは年の甲斐もなくはしゃぐ己に気付いてか、話をそこまで切るという前触れの、ゆっくりとした呼吸を一つ、意匠を凝らしたしおりのように、レイジの目の前に置く。

そのことについては、また今度話そう。またここへ来てくれ。君のような生徒を見ることは、今まで全くなかったからな。少し反抗的な素質を備えた生徒を見て話しかけても、皆が恐れ入ってその身にまとった輝きをふいっと消してしまう。だから君を見て、私は、何かとても嬉しくなってしまうんだよ。

定期テストが終わって、生徒は各々云々、喜して憂して互いの点数を比べ楽しんでいるが、そこには重々しい不安が緑灰色の霞でできた仁王像のように鎮座して、皆がその睥睨を感じて萎縮する。誰もが、これから始まる軍隊のような訓練に怯えていた。プログラムと呼ばれるその訓練で求められるのは、命令への条件反射的な盲従、秩序選好意識の内埋化、集団行動意識の標準化、など、など。要するに青少年たちを去勢することを目的にしており、これほど露骨でありながら誰も表立ってこれを批判する者はない。まだ若さの保たれているアメリカなどからは日本の極端な反動傾向を揶揄されていたが、老いて内閉した社会がそんな声に耳を貸すはずもなかった。プログラムは文官コースの教育カリキュラムとして必修化され、たかだか数年前から開始されたにも関わらず、あつかましくも当然だという顔をして生徒たちの前に居座って横柄に構えている。プライドも知能も高い文官コースの生徒たちにとっては黙って命令に従い不条理なシゴキを受け続けることなど苦痛でしかなく、誰もがそのプログラムのことを考え青ざめ憂鬱になる。しかし性根が真面目で臆病で、そして打算的な所もある文官コースの生徒たちは、陰で文句を言いながらも結局それに従うだけだった。

走る、走る、先んじてもいけず、遅れてもいけず、絶えず周囲と一体になって、転がり、泥にまみれ、起き上がり、また、走る、走る。とうとうプログラムが開始された、体力の限界まで使い果たし、こみ上げる吐き気とともに感情を飲み込んで押し戻し、無表情で掛け声を発し、命令の下される限りにおいて、休むことなく動き続ける。号令の度に整列し、足を開く角度や首の角度、指先の位置やつま先の位置、かぶった帽子の角度やベルトのバックルの位置まで細かく注意される。考えることは否定され、服従のみが是とされて、青少年たちの自尊心を潰し、無力感を植えつけていく。植えつけられたそれは、やがて、いま自分に命令を下している暴君のような教官たちに同一化しようという意識を芽生えさせ、青少年たちは徐々に同じ様な人格を持つ人間として鑄造されることになるのだ。他に手段を見出せない人間にとって、自分に無力感を与えた人間と同じようになることだけが無力感から逃れる手段になってしまう。実際にはそれこそが完全な敗北であり、全人格における服従なのだという事実を、無力感に取り憑かれた人間は冷静に判断することができない。文官コースの生徒たちはろくに世界を知らず、権威に逆らう主人公が活躍するような小説やマンガからも遮断されている、ここで繰り広げられていること以外の可能性を思い描くのは至難の業で、だからこういう最も基本的な形の洗脳に容易に屈した。現実には密着した想像力の惨めなまでの貧困さが、彼らをあっさり奴隷に変えていく。

くだらない――あまりに見え透っている。

そんな、文官コースの生徒たちの中で、ただ一人レイジだけがそう思い続けていた。社会から厭われ黙殺されていた書庫にある本を読みあさっていたおかげで、レイジにはこんな教官たちとは別の人間になる可能性を思い描くことができたし、こういう初歩的な洗脳のやり方を見ぬくこともできたのだ。常に、教官たちの挙動を観察する、その矛盾や不完全さを見抜いて、彼らが植えつけようとする無力感の萌芽を一つ一つ、いっさいの漏れがないように打ち砕いていく、レイジはそうすることで自分を守っていた。

かかとが出てるぞ！

隣から少し後ろにずれて整列していたレイジの、かかとを教官が蹴る。こんなことは生徒たちが整列するたびに毎度毎度行われ、要領の悪い生徒などがいれば、病的な神経質さで商品を几帳面に陳列する店主のように直接腕やあごをつかんで繰り返してその位置を直していく。それでも要領悪くズレてしまえば、不条理な怒りをぶつけられることになる。

お前！ 何度言ったら分かるんだ馬鹿野郎！

すぐ横で罵声が飛んだ、横目でちらと見てみると、青い顔をしたトシロウが震えながら直立しており、教官に両手をつかまれその位置を直されている。指が真っ直ぐ伸びていないとか中指の先端がズボンの目地にぴったり沿うようにとか、そんなことを唾のかかるほどの近い距離から怒鳴り、教官はここだここだとトシロウの中指をズボンの目地に叩きつける。執拗な訓練にトシロウは尋常でないほど消耗しており、目はうつろ、今すぐに失神して崩れ落ちてもおかしくない。そんな状態では要求されるような厳密さで姿勢を保てるはずもないが、教官たちはそんなことを全く慮らずひたすらに怒鳴る。個人の特性や健康状態などは徹底的に無視される、ただ求められる規格に適應することだけを、生徒たちは考えなければならない。この世界では若い人間は無価値であり、ないがしろにされるのは当たり前、時にはゴミ同然の扱いを受ける。だから教官たちからすれば、トシロウが体力の限界を超えて倒れても、そんなのは知ったことではなかった。トシロウは歯を食いしばり、必死で教官の求めに応じようとするが、表情は今にも泣き出しそうなくらい強張り、見るに見かねたレイジはとうとう目をそらしてしまう。こんなくだらないことを自分たちに課している教官たちに対する怒りが、腹の底で荒れ狂い、猛熱が血をたぎらせ、駆け巡る蒸気となって全身から炸噴しそうだった。一人残らず殺せるものなら殺してやりたい、赤いコールタールのような感情が、固く粘ついて首の後を伝う。やがて教官は修正を終え、苦しさを押し殺して真面目な顔を作り整列している生徒たちの前に立ち、点呼を命じる。一秒ずつ時間をずらした鳩時計を並べたかのように、生徒たちは機械的なりズムで番号を叫んだ。そして目の前に立ったやたら短足の教官があれやこれやと反省点を述べ、今年の新入生は特にできが悪いからしっかりやれというお決まりのフレーズで締めくくる。それが終わると短足教官は交尾する猫のような声で号令を発し、これまた短い腕をぐるぐる回しながら走りだす、生徒たちはうんざりした顔で、紐でつながれた囚人たちのように重い足取りでそれについて行った。

そんなことが毎日続く、六時起床九時消灯、教室にはいっさい入らず教科書も筆記用具も手にすることはなく、隔離された場所で、軍隊ごっこを繰り返して、心と体をイジメぬかれる。六月の初めから七月の終りまで、プログラムはひたすらに生徒に苦痛を与え、自尊心を破壊し、無力感を植えつけ、そして社会に望ましい人間に作り替えていくための下地を築く。ひたすら屈辱に耐えながら、しかし生徒たちには逃げ場がない、口ごたえでもすれば謹慎か、最悪退学になる。一度退学になれば、たとえ十代の少年であったとしてもまともな社会生活を送る希望を持つことは不可能だった。誰もが職にあぶれている時代に、落第者に与えられる仕事はなく、衰退し閉鎖し新しい芽を摘みたがる社会で新しく起業をすることもまず不可能。既存の大企業は国内の歯止めの効かない需要の下落と海外との競争での無残なまでの敗北の連続に苦しみ続け老い凝った組織改革にもことごとく失敗しかなりの数が倒産、回復の兆しなどまるでない。若者たちはこうやって、三十歳で君づけで呼ばれ社会の一員として受け入れられるようになるために、嘲りの中で

辛酸を舐め続け、ますます少なくなっていくだけの椅子を取り合うゲームに参加するしかない。
もういやだ。

就寝前、同室の生徒たちと同じ様に横になるレイジの隣で、トシロウがうわ言のように独り
呟く。たぶん、トシロウは自分がそんな言葉を吐いているという自覚を持っていない、それほど
心身ともに疲れていた。周囲もそれを制したりしないことで、暗黙の同意を示している。疲労と
屈辱、そしてそれ以上にやっていることの無意味さ、そのあきれほどの単純さに、誰もが混乱
している。繊細な神経をした少年少女の中には過去に自殺した者もいたらしいが、しかしこのプ
ログラムは平然と同じやり方で続けられていた。レイジは何かトシロウに声をかけてやろうかと
迷い、結局止めて、一つだけため息を、誰にも聞こえないようにゆっくり吐く。すでに消灯して
周囲は暗く、厳格な規律統制のために生徒たちは黒い氷に閉じ込められた深海生物のようになり
、どの部屋からも声や音が漏れてくることはなく、暗闇と静寂の中に置き去りにされた感覚は妙
に鋭くなって、周囲の気配を敏感に察知する。だから、トシロウが身を固くして小さくなり震え
ているのが、目を閉じてベッドに横になってもはっきりと分かった。七月も半ばに近づき、
確かにプログラムは終盤に差し掛かっている、が、そうなるほどに、生徒たちの雰囲気は重苦し
くなっていくのだ。プログラムの最後には、生徒たちが最も恐れているイベントが待ち構えて
いた。それは上級生参加の混合チームによるサバイバルゲームのような演習なのだが、しかしそ
れこそがこのプログラム中最も陰湿な新入生に対するイジメが行われ、屈辱と無力感に打ちのめ
された生徒たちが、やがて年齢支配の一翼を担う人格へと作り上げられていく下地作りの総仕上
げとなるものだった。教官の監視を離れた所で、上級生たちの嫌がらせ、あるいは歪んだ復讐行
為はエスカレートしやすく、その噂を聞きかじった新入生たちは例外なく怯えている。もしかす
ると、耳聡いトシロウは人一倍多くの情報を得たせいで、誰よりもそれを恐れ臆病になって、少
しずつ刃物で肉を切り裂かれる凌遅刑のように自らの神経を苦しめてしまっているのかもしれ
ない。レイジも、もちろん例外ではなかった、自分を待ち受ける屈辱を思い、腹の底から沸き上
がる怒りと頭の上から氷片のように降ってくる恐怖が胸の中でぶつかり、肺が塞がれ心臓が捻れ
たように痛む。固く目を閉じて、必死で震えを抑え、雲のように飛んでいってしまう眠りをどう
にかたぐり寄せようともがく。ユイのことを思い出して、こんな情けない姿を絶対に見られたく
ないと思う。レイジは拳をひたすらにひたすらに固く握りしめて、頭の中に浮かんでいるユイの
笑顔から身を隠そうと試みるが、どこへ行くこともできず、裸の泥人形のように転がり、むき出
しになった繊弱な肌にきらきらと輝く風が突き刺さってくる。レイジはただ苦痛に顔を歪め、祈
るように、気まぐれな雲のような眠りが落ちてきてくれるのを待っていた。

七月終盤、いよいよ開始される演習の、チーム分けが発表される。三年生が一名、二年生が二名、そして新入生が二名で構成され、レイジはトシロウと同じチームだった。新入生たちは怯えと緊張で身を固くし、いやに水っぽく冷たい汗を流しながら、休めの姿勢のままじっとそれを聞いている。ひと通り説明が終わると、教官の号令で新入生たちは背後に並んで待っていた上級生たちの後ろに移動させられ、そこで演習に必要とされる備品が支給された――ペイントガン、ゴーグル、ゼッケン、水、食料……。各チームは色分けされている、これは対抗戦なのだ。生徒たちはこれから森林に囲まれた山の麓に送り込まれ、三日間かけて頂上を目指す。各チームは独立して行動を取り、遭遇すれば銃撃戦を行うことになる、ペイント弾を命中させて倒した敵チームの人数と頂上に着いた順位とが得点になり、優勝することは大変な名誉で最下位の人間は反対にひどく軽蔑され、さらには、上位入賞者から文官コース修了後に選抜エリートコースに進学する者も多い。だから上級生たちなどはこの競技に勝つために必死になる。そしてチームの指揮権は三年生に与えられ、すでに年齢支配に染まりきった彼らの新入生に対する扱いはひどいものになりがちだった。

トシロウとレイジはゼッケンを身につける、色は青だった。黄、緑、赤、橙、黒、白、などなどがチーム分けに使われていたが、その中に紫はない、その色は高貴な色とされ、いかなる場合にも七十歳以上の人間以外が見にまとうことは許されていないのだ。装備が終わると、レイジたちのチームの隊長である三年生のイノウエが号令をかけ、トシロウとレイジは絶叫に近い大声で自己紹介をさせられる。嬉々として、怡々として、イノウエはすでに限界まで声を張り上げた二人に声が小さいと怒鳴る、厳格を装うその表情には、油断に満ちた慢心が読み取れた。イノウエは教官の真似事をしているのだ、かつて自分が受けた扱いを、ようやく手に入れた立場を利用して別の相手にやり返す。この演習は新入生に対するプログラムというだけでなく、上級生が自らを支配する教官たちに同一化する機会であり、彼らに対するプログラムの総仕上げでもある。後ろに手を組んで立つトシロウとレイジの姿勢を、この演習では副官と呼ばれる二年生のキダとオオノが修正する、もちろんそれも真似事として、教官たちがそうしていたのと全く同じ様にやる。

フラフラしないで、ちゃんと立ちなよ。

オオノが嫌味たっぷりの言い方で、すっかり生気の抜けた顔をしたトシロウの背中を叩く。演習に参加する上級生は男が多かったが、二割くらいはオオノのように女もいた。演習参加者の半分くらいは支配欲やサディスティックな傾向のある人間が喜んで志願し、残りは積極的な姿勢を見せておきたいという人間が手を上げるような形だった。トシロウをいびるオオノは前者で、真面目そうな顔を装いながらも、他人をいたぶる喜びで唇の端をぷるぷると震わせている。

君も、気を抜いたらだめだよ。しっかりしないと。

後者のキダは、副官として求められる仕事を務めようと、レイジを注意して指導する体を見せた。レイジは返事をして背筋を伸ばす。すべてが茶番だった、教官たちの馬鹿げた行為を、無慮の上級生たちがごっこ遊び同然に真似ている、そして、レイジはそれをはねつけることもできず、ただこの茶番を演じる役割を受け入れてしまっている。自らの臆病さへの恥を忍びながら、自らを劣位に置かぬように、臥薪嘗胆の思いで上級生たちの幼稚さを分析する、そうすること

でしか自分を無力感から守れなかった。上級生たちは、自分たちもまた社会で見下される立場にありながら、しかしこの狭い年齢差の中で少しでも新入生の上に立ち見下す地位を確保しようとしている。そこには、白人社会に近い黒人や黄色人種がそうでない者を見下すような、社会進出した女性がそうでない者を見下すような、そういうくだらなさがあって、その自らの卑劣さと滑稽さを理解しない上級生たちに対する怒りが沸いてくるが、それ以上に怒りは自分自身の心がいなさへ向けられ、それが絶えと焼けた鉄の棘のように眉間を内側から突き刺した。全てを投げ捨てて文官学校を去ることができればと思うが、その外には最悪の社会が待っている、この学校は、この最悪の社会の中で、レイジのような少年にとって最善の選択肢になってしまっていた。レイジはそこから身動きがとれず、硬直して、上級生たちの号令に従う。

異様に静かで皆が押し黙ったままの車内、バスに揺られ、着いたのは草木生い茂る林の入口、各チームごとに異なった場所で降ろされる。教官たちは、新入生には命令への服従、上級生には適確な判断と統率、そして全員にチームワークの徹底を命じ、生徒たちを置き去りにするようにして乗ってきたバスでそのまま帰っていった。イノウエは支給されたメモ帳サイズの端末に表示されたマップとGPS機能で自分たちの位置を確認しながら、これから取るべき戦略を練る。それぞれのチームは、互いの降ろされた位置をだいたい把握している、だから山頂に向かって真っ直ぐ進めば行動を読まれ、奇襲される可能性があった。要するに、どうやって敵チームの裏をかいて、襲撃を加え、かつ早く山頂にたどり着くか、それがこの演習で考えるべきことだ。イノウエは結局、いびつな螺旋のような形を描きながら山頂を目指す経路を設定し、それをレイジたちに説明する。

おい。

イノウエはトシロウとレイジを見やりながら、自分のリュックを下ろして指さす。

水と食料が重いんだ、だからお前らは隊長と副官の分を運べ。俺達は身軽にしておいて機敏な行動を取れるようにするから。

その命令でキダとオオノもリュックを下ろし、トシロウとレイジはそこから自分たちのリュックに水と食料を、そしてその代わりにペイント弾を上級生たちのリュックに移し替えるように言われる。作業を終えてからかつぎなおしたリュックはずしりと重く、長く続いたプログラムでいじめぬかれた体には酷だった。

疲れてるからって、甘えは許されないよ。足手まといになられると迷惑だから、しっかり歩きな。

水と食料を取り出したリュックの軽さをたしかめるように体を揺り動かしながら、オオノがトシロウとレイジをにらむ。眼の奥にたぎる怒りを見せぬよう、レイジはうつむいたまま返事して、先を進むイノウエの後を追って林の入口へ進む。オオノはやや不満そうにトシロウとレイジを見る、思わず目があったトシロウは背筋を伸ばし、健気に、はい、と大きな声を出す。

山に続く林の中は決して平坦でなく、重いリュックを背負って行くには良いコンディションとは言えない、おまけに、防護用のゴーグルは顔全体を覆うデザインで、呼吸の度に息がこもり、余計に苦しかった。イノウエはマップを確認しながらチームをリードしており、その後ろでキダ

が指示を受けながら周囲を警戒する。最後尾にはオオノ。トシロウとレイジが少しでもペースを遅らせる度に、背中や脚を小突いて笑う。いつどこから敵チームの奇襲を受けるとも限らない緊張感が張り詰めて、風が小動物が茂みを揺らす度、一気に圧縮された空気がみぞおちの辺りを突いてくる。

いいかお前ら、戦闘になったら絶対にぐずぐずするなよ。チームが全滅すれば、そこでゲームオーバー、大恥をかくことになる。必要なら隊長と副官が生き延びられるように、お前らがおとりになることも覚悟しとけ。

イノウエはトシロウとレイジのほうを振り返って言う。最初から新入生たちが戦力になるとは考えておらず、邪魔くさそうに、何度も、こういった言葉を投げつけてくる。それは実際に新入生たちが無能だからというのではなく、上級生である自分があらゆる方面において優れていなければならないという思い込みからくるものだったが、年齢による序列を頭に刷り込まれたイノウエにはそんなことが分かるはずもない。

ふん。まあたいがい、新入生なんか使いものにならないからな。せめて根性だけはみせろよ。黙って聞いていたトシロウとレイジに、イノウエは返事をしろと怒鳴る。悪路の行進とリュックの重さに押さえつけられた体を起こし、ろくに水も飲ませてもらえず乾いてべたつく粘膜に塞がれたのどに唾を押しこんでから、二人は無理に声を搾り出す。

あんまり大きな声出すなよ、敵に気付かれるから。そんなことくらい分かつとけ、馬鹿どもが。

毒づいて唾を吐く、イノウエの後ろ、キダとオオノがこびるようにそれに同調して、トシロウとレイジを睨みつけていた。

行進は続く、林の奥へ進むほどに、静けさは増し、言葉は減る、全員が濃霧のような沈黙をかき分け歩いて行った。イノウエは注意深く、マップから目を離さない。レイジたちの青チームが最初にとった作戦は、一番近くを進んでいる緑チームへの奇襲だった。緑チームは林の中ではカモフラージュになって見つかりにくいという利点を利用して、まずは正面突破に近い経路で山に入り、そして下から登ってくる周囲のチームを待ち伏せ随時奇襲を仕掛けていくはず、それがイノウエの予想だ。確かに斜面の上で待ち伏せされ攻撃を受けると状況によってはいいようにやられてしまう可能性もある、だからイノウエは緑チームを追跡し、林の中で先制攻撃を加える作戦に出ることにした。イノウエは冷静で、判断は適確に下している、実際、新入生の時のチームは準優勝し、去年は副官として演習に参加、三位に入賞したという。今回隊長として参加したからにはもちろんながらに優勝を狙っており、その気合も人一倍だった。教官たちからの評価も高く、まさにエリートの中のエリートとしての将来を獲得しつつあり、今回の演習での優勝はその地歩固めという意味がある。目の良いキダが周囲をうかがい、真面目な顔で逐一状況を報告し、その度にイノウエは細かく指示を出していく。オオノは相変わらずトシロウとレイジをねちっこくいびりながら、唇の端をぷるぷるさせている。一步また一步、進むほどに、葉と葉の間から突き刺す七月の太陽とともにリュックは重くのしかかり、できるだけ無表情を装うレイジもさすがに噴き出る汗で額をべたつかせ息を上げて喘いだ。林を進んでくるレイジたちの足音に驚き、数羽

の茶色い鳥が飛び立つ。頭上を横切る羽ばたきが影を打ちおろしてくる、その光と影のちらちらとした回転が鼻先にまとわりつくようで、疲弊した体が思わずめまいを起こしそうになる。そしてとうとう、キダが何かを発見し、勇んでイノウエに報告した。イノウエはうなずき片手を上げ、チームのメンバーに止まれと命令する。

緑チームだ、確かに向こうにいやがる。

イノウエは混濁した川から現れるワニのように狡猾で獰猛な目を鈍く光らせ、手にしたペイントガンを握りしめる。満足そうなイノウエの役に立てたことを喜び、キダは緊張した面持ちながらも口もとを緩めていた。これから始まる戦闘に備えリュックを下ろすレイジ、その横でわずかに動作の遅れたトシロウの尻をオオノが叩いて、もたつくんじゃないと耳元でなじる。

隊長、どうしましょう。

身をかがめ、キダがへつらいながら訊く、イノウエは黙ったまま、こちらに気付かずにゆっくりと前進している緑チームを観察して動かない。レイジは青い塗料のつまった弾が装填されたペイントガンを抱え、イノウエがどう出るのか待ち構える。正直、とっとと全滅にでもなってこんな茶番は終わらせてしまいたかったが、後でくだらない文句をつけられるのも面倒なので、取りあえずイノウエの好きにさせるしかない。

ゆっくり、前進だ。音を立てるなよ。あいつらを包囲するように少しずつ広がりながら、出来るかぎり、気付かれずに近いところまで間合いをつめろ。

その指示で、林の中に茂る木々を盾に五人は体勢を低くしながら細心の注意を払って一步一步を進め、満腹のインパラのようにもそもそと動く緑チームを追い詰めていく。木から木へ、ほとんど体をこすりつけるように身を隠し、最小限の動作で、最大限の速さで、イノウエを先頭にしながら射程距離に入るまで、一步、一步。緑チームはレイジたちの青チームと同様に、三年生を先頭にして、二年生に挟まれた新入生が重いリュックをかついで息を上げて苦しそうにしていた。まず、あいつらを撃って楽にしてやろう、レイジはそう思う。ペイント弾を食らった参加者は即退場で、もうこれ以上この軍隊ごっこで道化役を務めなくて済むようになる。口には出さないが、おそらく多くの新入生たちはプログラムと演習にうんざりしているはずだった。ふがいない自分、正面きって反抗できないのなら、せめて虐げられる立場にいる人間を楽にしてやりたい。レイジはいよいよ目標の距離を前にして、緑チームの新入生を見つめながら、奇襲開始と同時にその二人を仕留めるイメージトレーニングを何度も何度も繰り返す。その時、横を進んでいたキダが動きを止める、それに気付いて先頭を伺うと、イノウエが片手を上げて制止を命じていた。奇襲開始の瞬間だ。

撃てえ！

その号令は威嚇でもある、イノウエはありったけの声で絶叫して相手をすくみ上がらせ、盾にした木の陰からペイントガンを乱射する。弾かれたように、他のメンバーもそれに習い、やみくもに緑チーム目がけて弾丸を撃ち込みまくる。レイジは頭の中に何度も描いていたイメージに寸分変わらず動作を一致させ、苦しみに満ち青ざめた顔をしていた新入生の顔面に照準を合わせると、相手の動きを追って冷静に狙いを修正し、そして正確にゴーグルに覆われた眉間を撃ち抜く。青いペイント弾が炸裂して、重く粘る塗料が飛び散りながら腐った軟体動物のようにまとわり

つき、前が見えなくなったその新入生はあわてふためいて足を滑らせ尻もちをついてしまう。緑チームは全員すっかり混乱して何も出来ずに身をよじらせ、その周囲から文字通り雨あられのように浴びせられるペイント弾がその体にぶちあたり、木の幹にぶちあたり、草の葉にぶちあたり、散乱する塗料にまみれながら全員が乱痴気騒ぎのように手足を振って、ある者は逃げまどい、ある者はつまずいて地面の上に転げ回る。奇襲は完全に成功だった、全く予期せぬ攻撃に緑チームは隊長以下全員が事態も飲み込めぬままにやられていく、乱射された弾丸はレイジの仕留めた新入生以外に二年生二人と三年生にも命中しており、残るはもう一人の新入生だけだ。もはや体勢を立て直すことが不可能と判断したのか、その新入生は反撃も試みぬままに荷物を投げ捨て、林の奥へと逃げて行く。

逃がすか！

それを見るやいなや、イノウエが木の陰から出て走りだす、それとほぼ同時に、レイジも走りだしていた。あの、もう一人の新入生も楽にしてやらなければ一疲れた体を走らせるのは苦しく、一步ごとに足がもつれそうになるほどだったが、同じ新入生を救いたい気持ちとこのプログラムに対する燃えるような反感が、レイジを突き進ませていた。

走る、柔らかく湿った土を一蹴りごとに飛び散らせ、茂る草葉を薙ぎ払い、緑チームの残党を追った、風を切って飛ぶ体に、細い枝がぶつかって弾け折れ音々鳴らす。イノウエは新入生目がけてペイントガンを乱射するが狙い定まらずまるで当たらずという調子でことごとく外れ、いたずらに青い塗料を撒き散らしている。

ちよろちよろ動くんじゃねえよ、くそが。

いまいましように吐き捨て、イノウエはとうとうしびれをきらして新入生の脚を狙いペイントガンを投げつける、その一撃をアキレス腱の辺りにまともに食らった新入生は足をもつれさせてしまい、両腕を広げたまま体を派手に旋回させて頭から転んでしまった。鼻面を地面にしこたまぶつけて鼻血を流しながら、新入生は健気にも体を起こしてイノウエを見上げ、構えたペイントガンの照準を向ける。

は？ 何してんのお前。

無機質な残忍さを刻んだ能面のように恐ろしい形相で、イノウエは抵抗の意志をわずかにでも見せた新入生を睨みつけたかと思うと、その顔に唾を吐きかける。その新入生の行為は演習の趣旨からすればむしろ立派だと評価されるべきだったが、しかし年齢による序列を絶対視する人間からすれば許されないことでしかない。新入生が三年生を正面きって撃つなどということはありえない侮辱行為とみなされ、そんなことをすれば顔面をさんざん殴りつけられ、あとでどうしたと教官に訊かれれば転んでケガをしましたと答えるよう強要されるのがオチなのだ。

まずい――。

二人を背後から追いかけながらその様子を目撃したレイジは、事態を瞬時に察知して呟いた。考えている時間などなかった、レイジは助走をつけて新入生に飛びかかると、おおげさな身振りでその体を押さえつける。馬乗りになり、相手の首にペイントガンの銃身をあてがい、自分の背中でイノウエの視線をさえぎりながら、さも痛めつけているかのようなそぶりをしてみせると、すっかり怯えていた新入生は実際には痛くないはずなのに震えながらうめき声をもらす。直接イ

ノウエに手を下させれば、何をするか分からない、だからレイジは代わって罰を与えているように装った。

お前、三年生を堂々と撃つ気か？ 馬鹿なことすんなよ。

イノウエに脅かされすっかり戦意を喪失していた新入生は、そう言われてひたすらにごめんなさいと繰り返すばかりで、その姿にレイジは胸を痛め、そしてせり上がる怒りを何度も腹の底に押し込まなければならない。

すまない。

おそらくは目の前にいる新入生にすら聞こえないくらいの声でそう言うと、レイジは至近距離からペイントガンを構え、そしてその顔面に弾丸を打ち込む。真っ青な塗料に視界を埋め尽くされて、その光景に安堵したのか、新入生は突然全身の力を失い、その場にぐにやりと横になって動かなくなってしまった。しばらくして青チームの全員が追いついてきたとき、レイジは我に返って後ろを振り向く、そこには、相変わらず無機質で残忍な能面のような、イノウエの視線が向けられたままだった。

隊長が撃たれるかと思ったので、必死でした。

レイジは取り繕ってみるが、イノウエは結局何も答えずに向き直ると、さっさと置きっぱなしのリュックを取ってこいと命令するだけだった。トシロウが素早くそれに反応して、取りに行こう、とレイジに声をかける。うなずきを返して立ち上がり、レイジはリュックのあった位置まで歩き始めることにする。胸の辺りまで伸びた草葉をいまいましように払いのけながら、レイジは考え続けていた。

なぜ、イノウエを撃たなかった？ なぜ、お前は戦えなかったんだ。

どうしようもなくいら立って、頭の中に何度も浮かぶその問いを、湿地に捨てられた病人のように転がったままの新入生の顔に向かって叩きつけたくなる。差別的支配者の上級生に対してだけでなく、無気力で従順な新入生たちに対してもレイジの怒りは膨らんで、今この瞬間にも破裂しそうだった。そしてやはり変わらず、自分自身に対しても。無抵抗なのは、力づくで押しえつけているからだけではない、そんなことをすべきではないという考えが体の隅々まで植えつけられていて、自らの手によって自らを押しえつけている。皆が皆、その抑圧の呪いを解けずにいる。

なぜ、お前は戦えずにいるんだ――。

降り立つ涼しみ、野犬の遠吠えで身を震わせる夜々が、現れ、肌にまとわりつき、冷たい露に濡れた手のひらの闇で目を覆い、そして木々の間を抜けてどこか世界の隅へ身を隠していく。イノウエの命令で野営の準備をさせられたトシロウとレイジは、続いて上級生たちの食事の用意をする、二人にも水は与えられたが、しかし肝心の食料のほうは腹が減ったからと言って上級生たちが食べてしまっていた。座って食事を取るイノウエたちの横で、トシロウとレイジは直立不動の姿勢のまま放置され、疲労と空腹に苦しみながらただその光景を見つめている。

おい。

ほとんど食事を終えていたイノウエが底意地の悪そうな顔で声をかけてくる。蛇の舌のような良からぬ企みの気配をちらちらと見せながら、キダとオオノにも目配せを一つ二つ、キダは表情を変えなかったが、オオノはこういうときに喜びを隠すのがヘタだった。サディスティックな快感の期待に唇の端を持ち上げられて表情を崩すオオノを見ていると、これから酷い目に合わされるのは明らかで、横にいるトシロウはまっすぐ伸ばした指の先を微かに震わせている。何か、悪いわさを聞きかじってしまっていたせいで怯えているのだろうか。

隊長、あの……。

待ちきれず、オオノが自ら申し出ようとするが、その瞬間にイノウエに睨まれて言葉をつまらせる。トシロウとレイジを交互に見ながら、イノウエはじっと、飴玉でも転がすように口の中で舌を動かし、自らの企みを弄び楽しんでいた。そして、ようやくイノウエがトシロウとレイジに声をかける、その横で、餌をぶらさげられて待ての姿勢をキープさせられていた犬のように、オオノは表情を明るくする。

お前ら、腹減っただろ。

訊かれて、トシロウとレイジは返事をする。さっきから、空っぽの胃が食べ物を求めて蠕動を繰り返しぎゅうぎゅうと音を鳴らしてはばかりず、手足の力が抜けて、直立の姿勢を保つにはふらつきに耐えなければならない。

特別にな、副官たちにお前らの晩飯を獲ってきてもらおうかと思うんだ。

イノウエの言葉に、たまらずといった調子でオオノが笑い出す。キダは無表情のままうなずいているだけだった。獲ってくる、という言葉が何を意味するのか、レイジは考えてぞっとする。イノウエは、適当に林の中からとうてい食えないような草や虫でも持ってこさせ、それを晩飯だと称して新入生たちの口に押し込もうとしているのだ。

光栄に思え！

喉の奥で固い泡が弾けるような音をさせながら、イノウエが声を出して笑う。その冷たい笑い声を聞いたレイジは全身に鳥肌を立たせ、同時に激しい恥辱と怒りで顔を紅潮させで動けなくなる。オオノも愉快でたまらなそうに、よく響く甲高い笑いではしゃぎ、その声は細かく砕いた氷の粒を耳の中に押し込まれ鼓膜を引っかかかっているような不快感をもたらす。キダは追従の笑みを浮かべて、結局オオノと一緒に、トシロウとレイジの食料を確保しに林の奥へと消えていった。

優しいだろ、こんなに優しい先輩を持って幸せもんだよお前らは。

なおも同じ調子で、イノウエは笑うことを止めない。殺せるものなら殺してやりたい、赤いコ

ールタールのような感情が再び、固く粘ついてレイジの首の後を伝う。自らの無力の裏返しとしての憎悪に過ぎないと分かっているにもかかわらず、感情はあまりに正直に騒ぎ、冷海が突然沸騰して冰山を砕き溶かして飲み込むように、その理性を崩壊させていく。

しばらくして戻ってきたキダとオオノ、それぞれビニール袋をぶらさげて、一方にはカエル、一方にはネズミが入っていた。イノウエはその袋を受け取って、両方とも生きてままのそれが自らに起こっている事態を理解できずに、がさ、がさ、と蠢いている様子を満足そうに見つめる。

お前ら優しいなあ、俺が新生児だった時には、ゴキブリ食わされたヤツもいたんだぜ。

いや、すいません。その人がゴキブリを食べた後に酷い腹痛を起こして病院送りになったという噂を聞いたことがあったので、もう少し大丈夫そうなものにしました。

キダが気を付けの姿勢でイノウエの横に立ち、愛想笑いをしながら答える。

私はムカデでも食わしといたらいいのにな、思ったんですけど、キダは優しいというか、甘いから。

オオノは袋に入ったカエルとネズミを見て、やや不満そうにしている。

まあいいよ。俺も変な問題起こしたくはないからな。ゴキブリ食ったヤツが病院行ったのはホントだよ、ちなみに。山にいるゴキブリってのはちょっとデカイからな、食ったヤツはだいぶきつかっただろう。

笑って、イノウエは立ち上がり、手に持った袋を背後に隠して何やらもぞもぞ、シャッフルしている。

さあ、選べ！ 右か？ 左か？ 好きな方を選べ！

イノウエがそう言うと、オオノが小躍りして、ぱかぱかと手を叩きながらまた甲高い笑い声ではしゃぐ、耳がしびれるほど不快な声だった。トシロウとレイジは、躊躇して何も言えず、屈辱に震えている。

腹、減ってんだろ。虫や草じゃなくて良かったなあ、貴重なタンパク質がたっぷりだ！ もちろん味は保証しないぞ。どうする？ カエルなら一口だけど、ネズミはちょっと時間かかるぜ？

ぱかぱか、オオノは大きく手を叩き、ますますはしゃいで笑う笑う。トシロウは今にも崩れ落ちて泣き出しそうなくらい、青ざめて、恥ずかしさと惨めさに顔を歪めて唇をかんでいる。

早く選べっての。

ますます悪ノリするオオノが、トシロウの鼻先をつまんでねじり上げて遊び、そして肩を突いて返答を促す。

……右。

あ？

涙混じりに絞り出したトシロウの声はかすかで、他人をいたぶる喜びを堪能してますます残忍さを帯びるイノウエが、ありったけの侮蔑を込めて聞き返す。

右です！

必死で叫ぶトシロウが勢い余って同時に鼻水を出してしまい、それを見たイノウエとオオノは滑稽な姿に大喜びして笑い転げた。できるだけ無関心でいたキダも、さすがに嘔きだして笑って

いる。

おめでとう、お前が食うのはカエルだ。

イノウエが袋を差し出す、おずおずとして、トシロウはそれを受け取り、袋の中で、がさ、がさ、と飛び跳ねるカエルを見てすくみあがり、動けなくなってしまう。苦笑するイノウエ、次の瞬間にオオノと目が合って、あごで何かを指示すると、オオノはトシロウの前に進み出てくる。

食べないの？

今にもつかみかかりそうな勢いで、オオノの言葉が浴びせられる、トシロウはもう自分では何も判断できなくなって、ただ、じっと耐えている。

じゃあ、食べさせてあげる。

ほとんどひったくるように袋を奪いとり、オオノはカエルの足を右手の指でつまんで取り出す、そして、左手でトシロウのあごをわしづかみにすると、口を無理やり開かせて、その中にカエルを突っ込む。白い歯でカエルの肉を練り潰すようにして、オオノが乱暴にカエルを口の奥へとなぶり入れる、ぶちぶちという肉の裂ける音がして、内臓のような赤い粒が飛び散った。トシロウは我慢できなくなって咳き込み、何度もえずきながら、口もとを唾で濡らし、歯と歯の間からは赤と緑と灰を混ぜたような、異様な色の汁を垂らしている。咳き込んだ拍子に、ほんのわずかな唾がオオノにかかってしまう。それに反射的に怒りを顕にしたオオノは、馬鹿野郎と怒鳴りながらトシロウの顔面を殴打してしまった。ひしゃげたように顔を曲げ、カエルの肉と体液を吐き出しながら、トシロウはその場に崩れ落ち、そしてとうとう泣き出してしまう。

だっせえ。

不快そうに、イノウエが呟く。早く泣きやめと言いながらトシロウの尻を軽く蹴るが、もはや恥辱が我慢の限界に達していたトシロウは感情を制御する力を完全に失っており、そのまま泣き続けていた。

見苦しいんだよ。

無機質な冷酷さで言い捨て、イノウエはキダを呼びつけると、トシロウを木の陰に連れて行って目に触れないようにしろと命じた。

お前も、さっさと食べよ。

キダに引きずられて行くトシロウの醜態を蔑見しながら、イノウエはレイジを睨む。押し付けるように渡された袋の中で暴れるネズミ、白い毛を逆立てて、口を震わせ、ミミズのようなピンク色のシッポが袋の内側に付いた水滴を舐めるようにうねっている。細く骨ばった足の指は小さい赤ん坊のそれのようで嫌に生々しく、覚悟を決めていたレイジもさすがに尻込みさせられる。

あんたも食べないの？ 全く、今年の新入生は！

オオノは叫び声のようなため息をついて、同意を求めるようにイノウエの顔を見つめた。普段は冷静を保っていたレイジの、額に汗の粒が溜まって揺れている、その有様にイノウエは勝ち誇ったように口もとを緩めて笑う。

情けねえなあ、俺が 신입生 のときは蛾を食ったぜ。先輩に度胸を見せねえとなあとってさ、袋から出した瞬間、頭からがぶりがぶりといってやった。口の中で、ねっとりしたヘドみたいな

液体と、ざらざら粉っぽい羽が舌の上で混ざり合って、そりゃあ酷い味だった。何せ、あまりの苦味に舌がしびれて、勝手に唾液が溢れて、後から後からえずきが止まんねえ。

かつて、イノウエも同じ様な目に合わされたのだ、過去に自らが受けた理不尽さを自らに納得させ消化するために、他人も同様の目に合わせるといふ最も安易で軽蔑すべき手段を、ここで用いようとしている。だからレイジは屈するわけにはいかなかった、目の前にいる憐れな男と同じ様に、無力感に屈して、力を持つ相手に同一化することを徹底して拒絶しなければならない、人間の中に巢食う、その誘惑から自らを解放しなければならない。

また、私が食べさせてあげようか？

カボチャが裂けるように丸顔のオオノの口が開いて、乱杭歯の隙間から甲高い笑いが漏れてくる。虚々とした夜の林の黒い空気が震え、腕に鳥肌が浮いた、しかし自分でも気付かないうちに、レイジは袋の中からネズミを取り出し、その手でしっかりと握り締めていた。ネズミの体は血が通って暖かく、心臓が拍動の都度、胸を押さえるレイジの親指の腹を、ぐっ、ぐっ、とはじき返してくる。オオノに手を出させてはいけない、イノウエに屈してはいけない、しかしここで正面から戦いを挑む度胸も力もない、その自分を呪いながら、レイジは決意を込めて、深呼吸一つ。頭をユイとワタルの顔がよぎった、ユイはこの体たらく見て自分を軽蔑するだろうか、ワタルも武官コースで同じ目に合わされているのだろうか――今、自由になりたいんだ、ワタルはそう言っていた。

俺もそうだよ、ワタル。

声には出さず、口の中で小さく呟くと、レイジはびくびくと蠢いていたネズミの頭に尖った歯を突き刺して肉をえぐり、ありったけの力を込めて手のひらの中にある体をねじり裂いて、そのまま食いちぎってしまった。舌の奥まで吐き気のするような臭みが押し込まれ、ちぎられた頭からあふれる血液がぬるぬるとまとわりつきながら白い歯の上を滑っていき、唇の端に唾液とともに溜まる。興奮で息を荒くしながら、レイジはネズミの頭をイノウエの頭に見立てていた、目の前で笑うイノウエの体を締め上げて、頭に食らいつき、悲鳴を上げるイノウエの、鼻を噛み裂いて、唇を破り、耳を奥歯ですりつぶし、目玉をぐちゃぐちゃに砕いて角膜から房水を飛び散らせ、血にまみれた口からその残骸を吐き出す。ネズミの頭の肉を剥ぎとって咀嚼しながら、骨を取り出し、そのまま胸と腹を食う。今度はそれをオオノの体に見立てる、解剖医のように、両肩から胸まで、胸から腹までを一直線に裂いて、乳房を食いちぎり、腹の黄色い脂肪でぬるぬると口の周りを汚しながら、内蔵をむさぼって吐き捨てていく。勢いとどまることを知らず、ネズミの下半身を食い散らかす、鼻の粘膜を突き刺すようなアンモニア臭を放つ腸に溜まっていた糞便にまみれながら、イノウエの尻とペニスを食い、オオノの太ももからふくらはぎまで飲み込んで、骨ばった足を地面に放る。

ネズミを食い終わって、手と口の周りを黒く汚れた血でべとつかせ、レイジは眼光鋭くイノウエとオオノを捉えている。尋常でないほど攻撃的な目つきをしていたが、狂人そのものとしか言えないようなレイジの雰囲気完全に気圧された二人は何も言えずに、ほとんど伏し目がちになって様子を伺うだけだった。強烈な密度の沈黙が空気を石化させ、誰も彼もが動けないまま、激情の余韻とあえぐようなレイジの呼吸の音だけが響いている。緊張感に耐えかねて、ふっとイノ

ウエが鼻から息を吐く、すると皆が我に帰り、伺いを立てるようにちらちらとイノウエを見た。もう寝る準備をするぞ、とイノウエはレイジに背中を向けつつキダとオオノに指示を出す、二人は慌てたようにイノウエの後を追って寝袋を取り出し始める。レイジはそれでもじっと動かず、歯をがたがた言わせ、指先をひくひく痙攣させ、その三人の姿を睨みつけている、肺と心臓を焼くような怒りの炎は消えず、目眩がしそうなほど顔が熱くなり、火のような息を漏らし、文字通り釘付けの視線は、毫も動くことはない。

――腐った肉は、もうたくさんだ！

ホームで盗み出したDVDの中にあった、映画のセリフをが頭をよぎる。確か、エイゼンシュテインによる、虐げられた水兵たちの反乱を描いた話だった。

朝は曇り空、目覚めは強い不快感に迎えられた、重い液体金属が胃の中を垂れて腹を圧迫しながら押し下げていくような感覚、それでいて鋭い針のような飢えがあちこちを突き刺して、できれば横になってうなっていたいくらいだったが、そんなことはお構いなしにチームはイノウエの号令で山を目指して出発する。トシロウはカエルを食ったショックのせいや疲労のせい、ゾンビのような灰色じみた顔色をして、目は焦点定まらず、歩みも軸がぶれておぼつかない。カエルの肉と内臓が潰れる感触を思い出すのかそれともその味がこびりついているのか、時々指の腹でごしごしと音がするくらいに強く歯をこすって、しきりに唾を吐いている。そんな様子を見てるとレイジもネズミの血の感触や味や暖かさを思い出して気分が悪くなり、歯で何度も舌をしごいて同じ様に唾を吐く。

イノウエを先頭に、昨日と同じ順番で並び、五人は林を抜けて、やがて地面が少しずつ勾配を持ち始める、いよいよ、山登りが始まるのだ。マップを見つめるイノウエの、表情が次第に固くなっていく、他のチームとの位置関係を予測し、執拗なまでにそれを繰り返し修正しながら、無数のパターンをシミュレーションして、経路を選び作戦を練る。理由は簡単で、山に入ると進める経路は制限されてくるため、それだけ敵チームと遭遇する可能性が高くなるのだ。しかも高低差を利用して巧みに身を隠した敵に奇襲を受ければ、あっさりと全滅することもあり得た。あくまで優勝に固執するイノウエにしてみれば、絶対にここで失敗するわけにはいかない。キダも細心の注意で周囲を警戒し、敵の存在を示すほんの僅かな兆候ですら見落とさないように目を凝らし、オオノからも林の中での気楽さは消えて、背後から奇襲を受けたりしないようにぐるぐる首を動かしてきょろきょろしつつ何度も後ろを振り返っている。昨晚の食事のおかげでリュックは少しだけ軽くなっていたが、それ以上に飢えと疲労に苦しめられ、山道に入るとなおさら足取りは重い。上級生たちのペースに付いていくのは困難で、その場に倒れこみたいという誘惑と闘うことばかりに集中しなければならない。やがて眠りが自分を開放してくれるはずの夜が来ることばかりを考えているが、崩れた地蔵の残骸の菟塊のような苦痛の時間が体に覆いかぶさって、それはいつまでもそこにとどまってばかりいる。これから演習が本番を迎えるのは明らかだった、どのチームもそれぞれが作戦を練っており、そのいくつかは既に見当を付けて待ち伏せをしているのかもしれない。全員がペイントガンを抱え、臨戦態勢のまま、曇り空のせいでますます暗い山の中を歩いていく。

レイジくん。

前後を進むキダとオオノに聞こえないように注意しながら、トシロウが声をかけてくる。か細く震え、かすれて響かず、声だけでもひどく疲れきっているのがよく分かった。

つらいね、何で、ここまで苦しめないといけないんだろうね。

トシロウは泣き言を呟く。キダはまだしもオオノに聞こえれば横っ面の一つや二つ平手ではたき飛ばされるところだったが、トシロウはすでに心身ともに限界に来ていたし、レイジも同じ気持ちだった。

意味なんかない、もともと俺たちを苦しめることそのものが目的なんだから。

僕らを苦しめて、どうするっていうんだい。

俺たちを空っぽにするのさ。空っぽになって耐え切れなくなった俺たちが、それを埋めるため

に上級生や教官たちみたいになろうという意志を持つのを待ち構えてる。

どうのことだい？ 先輩たちみたいになるのがいけないことだって、君は思うのかい。

俺がいけないと思うのは、自分が空っぽになったときに、手軽な方法でそれを埋めることさ。その空洞を、他人で埋めてはいけない。歯を食いしばって苦痛に耐えて、自分でそれを埋めなきゃいけないんだ。他の誰かみたいになろうとすることは、完全な敗北でしかない。

その言葉の意味をつかみかねているようで、トシロウは黙って考え込んだままゆっくりと前進していたが、しばらくして、ひと言だけでもごもごと返してくる。

君ってずいぶん難しいことを考えてるんだねえ、成績は僕のほうが上位だけど。

何気なく言ったのだろうが、こんなときに成績の話を持ち出してきたのが冗談のように思えて可笑しくなりレイジはくすりと笑いを漏らす、少しだけ気分が楽になった。

曇り空は遠くから生ぬるい風を運び、湿気を帯びたその肌触りは熟しすぎた果実のようにぶよぶよとしている。今夜は雨になるかもしれない、そう思ってレイジは空をあおぐ。木々の、茂る葉々の裂け目から、重たい体を引きずる獣のように、青灰色の雲が動いている。山に入るとその地形は複雑で、無数の木々の陰、岩肌の隙間、繁茂する草々の根元、どこにでも身を隠すことはできそうだった、つまり、この演習の勝利の鍵は上手く隠れることよりも敵の動きを正確に予測することにあった。イノウエはマップのメモ機能を使って何度も敵の進路を線で描いては消し、描いては消し、待ち伏せのポイントをようやく決める。緑チームが全滅した今、近くにいると思われるのは黄色チームと赤チーム、そのポイント付近では三つほどの道が合流しており、他のチームが近くにいれば、必ず通ると思われる箇所だった。イノウエは激を飛ばしてチームを急がせる、他のチームが通る可能性が高いということは、遅れをとれば逆に待ち伏せされてしまう可能性が高いということでもあり、そのせいでトシロウとレイジは理不尽なほど早く歩くように強要される。しかし体力以上に精神的にすっかりまいっていたトシロウは徐々に歩いて行けなくなり、何度もつまづいては苦しそうにあえぎ、そこをイノウエとオオノに怒鳴られ足蹴られ、引きずられる操り人形のように、口元によだれをためながら再び歩き始めていた。一方のレイジも、トシロウのおかげで目立ちはしなかったが、イノウエが要求しているペースについて行くのは不可能で、トシロウが罵倒される度にこっそり近くの木に寄りかかって体をほんの少しでも休め、だましまし歩みを進めている。イノウエは苛立っていた、舌打ち唾吐き、特に舌打ちは数歩進む度にその口から音を漏らす。だからトシロウが遅れ始める度にその罵倒はエスカレートし、その光景には目に余るものがあつた、レイジは耐えかねて目を閉じ、早くポイントに着いてくれと願う。

目的のポイントは少し道の広がった場所だった、イノウエはその先の、やや狭まりつつあり足下も草が生えて歩きにくそうな所を奇襲地点に選ぶ。奇襲地点を見下ろせる草むらまで登り、そこで寝そべて体を隠し、黄色か赤のチームが姿を現すのを待ち構えることにした。レイジたちはリュックを下ろして腹ばいになり、いつでも奇襲を仕掛けられるようにペイントガンを握りしめる。全員がほっとしていた、次々に長短様々の息を吐いて、緊迫した雰囲気疲れした神経を解きほぐす、早いペースでの山登りには上級生たちもさすがに体力を削られており、オオノなどは

腹ばいになったまま伸びをしてさえいる。ひんやりと柔らかい雑草がぼろぼろになった体をふんわりと受け止めて、あまりの心地良さにレイジは眠気を覚えた。口には出さないが、全員が同じ気持ちのようで、黙ったまま日だまりの猫のように目を細めている。辺りの静けさに安心して、キダがごろりと体を裏返して仰向けになり、ひときわ大きく深呼吸をする。

あ。

突然、キダが無理やり切断されたような短い叫び声を上げる。驚いて全員がそっちを見る、瞬間、キダの顔面で黄色い塗料が弾けた。素早く反応して身を翻したレイジは、木の上からこちらを見下ろしてペイントガンを構えている黄色いゼッケンを付けた迷彩服と目が合った。

奇襲だ！

イノウエが叫び、飛び起きて、身を隠そうと木の陰へと走り込む。同時に木の上から何発もの弾丸が降ってきて、黄色い塗料が蛇のように這いずって飛び散った。既に被弾したキダは顔を押しさえてうずくまったままだいるが、他のメンバーは散り散りに走りまわり、からがら、黄色チームの盲滅法な射撃から逃れる。木の陰に逃れたイノウエは口汚く呪いの言葉を吐きながら、木の上に腰掛けていた黄色チームのメンバーに青い塗料を命中させてぶちまける、しかし、そのイノウエ目がけてさらに他の木の上からも黄色い弾丸が飛んで来て、何が何だか訳も分からず右往に左往、イノウエはレイジたちにも援護射撃を命じる。レイジは木の陰から弾丸を撃ち込みつつ、黄色チームが何人いるのか考えてみる、定かではないが、おそらく五人全員ではない、すでにどこかのチームと戦っていくらかメンバーが欠けているらしく、冷静になってみれば飛んでくる黄色い弾丸の数はせいぜい二人分くらいだ。そのうち、誰かの放った弾丸がもう一人の敵に命中し、バランスを崩した迷彩服が木の上から滑り落ちてきた。そしてぱったり、黄色チームの攻撃が止む、しかし敵の姿を完全に把握出来ていないため、全滅したのか、あるいは騙し討ちを狙っているのか分からず、全員がそのまま固まってしまう。しびれを切らしたイノウエが近くにいたトシロウを呼びつけ、周囲の木にまだ黄色チームがいないか確認してこいと命令する。トシロウは戸惑いながらも、黄色と青の塗料の飛び散った地面を這うようにして身をかがめ、それぞれの木々の上をちらちらと観察して歩きまわる、ところがどの木にも黄色チームはいないようで、トシロウが安全確認ができたというサインをこちらに送ってくる。イノウエはそれを見てこちらに戻って来るよう合図をするも、木の陰からは出てこようとしない。まだ安心していないのだろうか、レイジが思うほど、イノウエの顔は青ざめ、額から汗がにじんで、唇を噛みしめたままだいた。しかしそれだけにはとどまらず、トシロウがゆっくり歩いて戻ってこようとするとその方向にむけて、何とペイントガンを構えてみせる。

しまった。完全に失敗だ。

イノウエがそう言ったのを、レイジは聞き逃さなかった、そしてそこで何が起きているのかということも、レイジは見逃さなかった。一人安心して戻って来るトシロウの背後の木の陰から、ぬうっと、亡霊のように、ペイントガンの銃口が現れる。遅れて気付いたオオノが慌ててペイントガンを構えた瞬間、トシロウの後頭部に直撃した敵の弾丸が塗料を撒き散らす、黄色ではない、鮮やかな赤、曇り空にくすんだ山の中で、その明るい色はほとんできらめいてさえ見えた、トシロウの迷彩服を汚し、周囲の草を濡らし、状況を一変させてしまう。間髪入れず、今度は赤チ

ームからの奇襲攻撃だった、イノウエは悔しそうに歯ぎしりをしながら、こちらへ向かってじりじりと前進してくる敵を睨みつけ、ちらちらと姿を見せるたびにやけくそになってペイントガンを乱射する。完全に失敗だった、消耗しきったトシロウによって大幅にペースが遅れていた状況を考えれば、待ち伏せの地点に他のチームが先に到達している可能性を考慮すべきだった、にもかかわらず、イノウエは最初の計画に固執し、あげく、のんきに草むらに寝転がって、背後から来る敵には全くの無防備でいたのだ。黄色チームはそれを見越して木の上で待ち伏せ、赤チームは遠くから状況を観察していた、対して、優勝に目が眩んだイノウエが考えていたのは、とにかくたくさんの敵を仕留めることでしかない。

逃げるぞ。

近くの木に隠れているオオノとレイジに向かってイノウエが合図を送ってくる、それと同時に全員が走り出す、イノウエが実質的に敗北を認めた瞬間だった。逃げる三人を、勢い付いた赤チームが追いかけてくる。レイジは茂る草を蹴り飛ばすように大股で走り、進路にかぶさってくる枝葉をペイントガンでなぎ払う、破れ散る葉と、弾け散る赤い塗料にもみくちやにされながら、いよいよ赤チームに追い詰められていく、このまま逃げるには、どうにも限度があった。

畜生が！

それを悟り、吐き捨てたイノウエが木の陰を背にしながら突然立ち止まったかと思うと、それに気づかず追ってくる赤チームの一人がその木の横を通った瞬間、その向こう脛を思い切りペイントガンで殴りつけ、派手に転んで激痛にうめく顔面に向かって弾丸を撃ち込み、青い塗料をぶちまける。演習において直接的な暴力は禁止されていたが、おおかたイノウエは偶然当たってしまったとでも言い訳するつもりなのだろう、悪びれる様子もなく向き直り、威嚇とばかりに周囲に向かってペイントガンを乱射した。突然の反撃に面食らった赤チームの動きが止まる、めいめいが木の陰に隠れ、こちらの様子を伺っているようだった。その隙をついてイノウエが再びオオノとレイジに合図を送り、もう一度走りだした、後はもう逃げきることしか考えない、決して振り返らず、小高くなった待ち伏せポイントに戻るとそこから下へ飛び降りて、息を切らしてもなお、転げるように坂を、下る、下る。

ようやく逃げきった後、ずいぶんの時間を置いて、イノウエはその場所に戻って来ることにした。なりもふりも構うことなく逃げたので、リュックなどは放置したままになっていた、食料も予備の弾丸もないままで演習を続けるのは難しい。再び待ち伏せされている可能性もないではなかったのだが、時間的に間を空けた後では、赤チームが頂上に進むスピードを犠牲にしてまで、実際に戻るかどうか定かでない青チームの残党を仕留めたがっているとは考えられない。警戒しつつもそこに現れた三人を迎えたのは、塗料にまみれて呆然と座ったままのキダとトシロウだけだった。キダはイノウエの姿を見て、こわごわと震え怯えた声ですいませんと頭を下げていたが、当のイノウエはそれを無視してリュックを拾い上げ、オオノとレイジにもそれを命じる。イノウエは苛立っていた、棒切れでいたずらにつつかれた蜂の巣のように唸り、目に映る全てのものに憎しみのこもった睨視を浴びせて、もはや誰も声をかけられないくらいになって、それこそ、指先で触れただけでも爆発しそうだった。ふと、イノウエとトシロウの目が合う、自分に

これから起こることを察知して、トシロウは後ずさりしたが、そのためらいがちな動きでは逃げ切れるはずもない。

てめえのせいだぞ！

ほとんど絶叫だった、信じられないほど露骨なやつ当たりで、イノウエの中に溜まっていた高熱のガスのような怒りと憎悪が外皮を破って噴出し、それが勢いをつけた強烈な蹴りとなってトシロウの顔面に浴びせられる。硬いものが肉に覆われた骨にぶつかる衝突音が、寒気のするくらいはっきりとした輪郭を持って周囲に響く、トシロウはのけぞって地面に崩れ落ち、泣き喚くようなうめき声を出して、ひしゃげた鼻を手で押さえながら、溢れてくる血でその指をぬめらせて転げ回った。キダはすっかり青ざめて、うなだれ、しかしその光景から目を離せずにいる。オオノも怯えたような顔をしていたが、もともと嗜虐的な性格ゆえ、無残にも顔の半分を血で濡らしながら涙声で謝罪してのたうちまわるトシロウを見て、顔を紅潮させ、唇を濡れた舌で湿らせ、興奮したような息を鼻から漏らす。ごめんなさい、ごめんなさい、苦痛の中から搾り出されるトシロウの声が聞こえるたび、オオノは快感で震えていた。レイジは、ひたすらに歯を食いしばっていた、猛烈な怒りで喉が塞がれ、全身が心臓になったかのように疼いて、耐え難いほど熱くなっている。なぜ、自分たちがこんな理不尽な暴力に耐えなければならないのか、もはや理解不能だった。こんな横暴が許容されて、自分たちがこれに対して反撃したり抗議することが許容されない世の中など、狂気に支配されているとしか思えない。もはや秩序の維持のためでもなければ、社会文化の一部でもない、今、自分は被差別階層として存在させられているのだということ、心底理解する。それが一時的でしかないとか、大人しく年を取るのを待てば権力を握れるのだとか、そんなことは関係ない。今、自分は自由になりたいのだ。ぶらさげられた人参そのものでしかない、先延ばしにされ続ける自由など、しょせんは奴隷の慰みものだ、我慢する人間は永遠に虐げられる。今、自らを自らの手によって解放しなければならない。あらゆる手段を用いなければならない、正当な自由のためならば、あらゆる手段を肯定しよう、その覚悟のない人間は、そもそも自由に値しないのだ。何より、今、目の前で繰り広げられていることこそが、それを如実に物語っている。

行くぞ。

メンバーを二人失い、しかも他のチームからだいぶ遅れを取っている、もはや優勝の可能性はほとんどなかったが、イノウエはそれでも往生際悪く、無理矢理にでもポイントを上げようと、山頂へ直進するコースを選択した。空の曇りは濃さと厚みを増しており、黒い滝のような雲の塊が薄暮れた山際に覆いかぶさっている。湿り気に締め付けられる土が遠くまでそのにおいを吐き出しており、やがて、おそらく夜になれば、激しい雨が降ることは間違いない。が、それはイノウエにとって僥倖といえれば僥倖で、豪雨の中で他のチームが強行軍するとは考えにくく、無謀な前進を取って選択することで差を縮め、あわよくば追い抜こうとさえしている。リュックを拾い上げたレイジは、歩きはじめようとするイノウエとオオノの目を盗んで、虚無のミイラのように横たわるトシロウを抱き起こし、その顔にべったり塗りたくられた血を拭いてやる。イノウエの無分別な蹴りを食らった顔の下半分がひどく腫れて、顔の形が変わっている、ただ呆けて、宙を見ていたトシロウは、レイジと目が合った瞬間に、あふれる涙を目に溜めていた。

くやしいのか。

レイジが訊くが、トシロウは何も答えない、そもそも、何かを言おうという気力などもはやなかった。ひたすら、涙をこらえ、食いしばった歯は、擦り傷だらけの口の中から漏れてくる血で汚れて、見るに耐えないほど醜い風体をしている。

一つだけ、答えてくれ。首を振るだけでいい。

限界までいたぶられ、はずかしめられ、何もかも奪われたようになったトシロウはまさに空っぽ、ショック状態で混乱し、焦点定まらぬ視線は羽虫のように宙を飛び、まともな答えなど返ってきそうもない。だから、せめて、レイジはたった一つだけ、求める答えが欲しかった。トシロウをこのまま空っぽにしないためにも、そして自分をこのまま空っぽにしないためにも。

くやしいだろ。でも、まだ大丈夫だ。お前はもう一回立ち上げられる。だから一つだけ、俺に答えてくれ。

質問がまともに聞こえているかどうかははっきりしないトシロウの肩をぐっとつかみ、レイジがもう一度、その注意を引こうとする。急に強い力で肩をつかまれ、やや驚いたふうではあったが、確かに顔を上げ、レイジと目を合わせたトシロウの目に、微かな光がよみがえる。レイジは、その光を決して見逃さなかった。

イノウエやオオノ、あいつらみたいになりたいか？

今にも泣き出しそうな目で、トシロウはレイジを見ていた。答えを求め、レイジは強く、しかし優しさを込めて、その肩をしっかりとつかんでいる。

あいつらみたいに、になりたいのか？

イノウエが首を横に振る、強く、はっきりと、青紫に腫れ上がりヨウ素まみれのジャガイモのようになった顔を動かすのも辛いはずなのに、力を込めて、何度も何度も首を振って、かすかに残った意思のかけらを懸命に拾い集め、それをレイジの前に掲げる。

分かった。

その言葉とともに、レイジはトシロウの肩から手を放し、そしてもう一度、今度は親しみを込めて抱くように肩に手を置いて、自分を見上げているトシロウに、強く、頷きを返していた。遠

くから、もたもたするなどイノウエが苛立った様子で呼ぶ、レイジはトシロウの肩から手を放し、前に行く二人に隠れてこっそり、そばに落ちたままにされていた敵チームのペイントガンを持ち上げる。赤――そのペイントガンに装填されていた弾丸の色は、怒りに燃えるレイジを、いっそう奮い立たせてくれる。

黒い塊、増殖する怪物の硬い皮膚のように肥大化した雲が、雷の唸りを上げて、割れて砕けて裂けて散る。崩れ落ちて広がる雲の破片から、散弾のように雨礫が降り、木々の葉を、レイジたちの体を、激しい音をさせながら打った。泥沼の底に沈んだように夜の闇は濃く、昨晚聞こえていた野犬の遠吠えはどこからも響かない。手の届く範囲から先にあるものが輪郭を失うくらいに視界の悪い、ぬかるんでずるずるの山道を進む、三人は体力を蝕まれ、無言で、機械的に足を動かしていた。イノウエは、作戦の撤回などいっさい考えていない、もはや自分を見失い、ありそうもない優勝を目指して、自滅のパレードを先導している。オオノは体調を崩しているようで、息苦しそうに呼吸しながら、徐々にペースを遅らせ始めていた。その背後に立って、レイジは二人が体力と集中力を失う瞬間を待ち構える、リュックの陰に赤いペイントガンを忍ばせ、いつでも、好きなときに取り出せるように備えている。

やがて、三人のペースがばらばらになり、気持ちばかり焦るイノウエはもはや後ろを振り返らずにどんどん前へ進んで行き、ますます歩みの鈍くなるオオノはずいぶん引き離されてイノウエの姿を見失いそうになっていた。イノウエはとにかく最短で山頂に近づくため、危険なコースすら選択し、右手に急な斜面のある、細い道に入っていき、そしてそれはレイジからすれば、願ってもないチャンスでもあった。体力を温存し、かつ自分の企みを悟られぬよう、前の二人からわざと遅れるようにして距離を取り、最初の標的であるオオノの様子を観察する。しかしその足取りにはもはや確かさがなかった、闇に蝕まれぼんやりとしたオオノの像が、右へ揺れ、左へ揺れ、前にのめっては後ろへよるめき、そしてとうとう、腐ったナメクジの皮膚のようにぬかるんだ山道で歩みを滑らせて転んでしまう。足を捻挫したのか、オオノは立ち上がろうともせずうずくまって動かない。レイジは警戒心を手放さずずっとオオノを観察していたが、もはや、この時を逃す手はなかった、獣のように柔らかい動きで赤のペイントガンを引き抜くと、そのぼんやりとした手負いの獲物に向かって前進しながら引金に指をかける。何発もの弾丸を撃ち込んでいく、オオノの体で、顔面で、何度も赤の炸裂音が弾けて響いた。ゴーグルを塗料で塞がれ視界を失い、両手を振ってもがくオオノとの距離を素早く詰めながら、今度は闇に隠れて全く見えませんが、赤チームの奇襲に見せかけるため、イノウエのいる辺りに見当をつけて赤い弾丸を乱射する。何か叫び声がして、イノウエの放った青い弾丸が飛んで来るが、レイジは身を屈め、オオノを盾にしながらかそれをかわすと、その勢いを乗せたまま突進する、抱えていたペイントガンを振りかざし、オオノのあごを目がけて、ありったけの力を込めたスイングで銃床を叩き込んでやった。オオノの顔がバウンドするボールのように跳ね上がり、ゴーグルがずれて口元がのぞく、その無防備な場所へと、レイジは再びペイントガンをぶん回してもう一発。折れた歯が飛び、裂けた唇がどくどくと血を流す、しかしレイジはそれでも手を止めず、さらに加速させた重い一発を食らわせ、悲鳴を上げる暇さえ与えない。

——トシロウが食わされたカエルよりはマシだろ。

レイジはそう思いながら、歯の折れた歯肉から鮮血を垂れ流して悶えるオオノの首に腕を絡めると同時に足をかけ、そのまま首投げをかまして、急な斜面へとオオノを投げ落とした。今度こそ悲鳴をあげながらオオノは猛スピードで転がり落ち、そして太い木の根元にぶつかって止まる。激痛に苦しみながら、なぶり殺されるミミズのように、びくびくと震えてそこから動こうとはしない。事態を察したイノウエが近づいてくる音が聞こえ、そこからレイジはほとんどトンボ返りのように体を回転させてそばの斜面へと身を隠す。烈しい雨の弾幕の向こう、慎重な足取りながらも、イノウエが近づいていた、威嚇するようにペイントガンを四方に撃ちながら、いっこうに赤い弾丸が飛んでこないことを訝しがっている気配だったが、しかし確実なペースでにじり寄って来る。おそらく、イノウエはこの後に及んで、奇襲をかけてきた敵に反撃し、ポイントを稼ごうとしている、オオノもレイジも目の前から消えて、もはやまともな作戦すら立てられなくなった今、優勝どころか下位になることは免れないはずだが、イノウエは現実を受け止めていなかった。読経のように悪態を撒き散らし、惘々としてその意思はもはやしどけなく、釣り上げられていく魚のように、体を震わせ、ずるずると進行方向へと引きずられている。イノウエは空っぽだった。その空洞を埋めようと、かつて自分を辱め何もかもを抑奪した相手の影を追い求めて来た人間の絶望感と無力感を剥き出しにした骸が、空洞を囲む肉と骨をからからぎしぎし言わせながら、闇と雨に弄ばれ、こちらへとこちらへと、向かって来る。そして真上へとさしかかった瞬間、イノウエのあごを突き上げるようにしてペイントガンを構えたレイジは、その顔とゴーグルの間へありったけの塗料を流し込む勢いで何発もの弾丸をぶちまける。弾散する赤い塗料に口と鼻を塞がれ、視界を塞がれ、溺れたようにもがくイノウエは、必死でゴーグルをはずそうと慌てふためき、足はもつれ、堪えられずに地面へと尻もちをついてしまう。レイジは好機をとらえて斜面から飛び上がり、その勢いで、イノウエのあごを殴り飛ばす。地面に崩れ落ちるイノウエの体を駄目押しで叩き落すようにして体重をかけ馬乗りになると、構えたペイントガンの銃床で、何度も何度も、ゴーグルの上からイノウエの顔を殴り続けた。割れたゴーグルの破片がイノウエの肌に突き刺さり、ガラスのブラシでこすられたかのように悲惨な擦り傷で顔が埋め尽くされ、数本の歯が折れてできた口の空洞から、喉に詰まった血を咳き込みながら嘔き出して、うめき声を漏らしている。レイジもまた、冷静さを失っていた、復讐にはあまりあるほどの傷を負わせながらも、まだ、イノウエをいたぶり足りていない、ペイントガンの銃身を首にあてがい、ゆっくりとイノウエの首を締め上げていく、赤く染まった顔の、肌が紫色を帯びてくる。どこまで痛めつけていいのかわからなかった、自分にネズミを食わせ、トシロウを罵倒し理不尽な暴行を加えていたイノウエの顔が浮かんで消えず、頭に響く憎たらしい笑い声が血をたぎらせ、いっさい怒りに歯止めが効かなくなっている。このままでは殺してしまう、そのすんでのところ、イノウエが圧迫される喉から、ほとんど子どもの泣き声のような悲鳴を、かすかにもらした。そこでようやく、レイジは手を止める、その怯えた声は、トシロウが顔面を蹴られて苦しんでいた時のそれと同じ声だった。突然体から力が抜け、馬乗りになったまま、レイジは呆然とイノウエを見下ろす。イノウエは激しく咳き込み、そしてぐったりとなつて震える音を出しながら呼吸を繰り返すだけ、赤い塗料に塞がれた視界を取り戻そうとゴーグルを拭おうとすることすら試み

ない。レイジは自分の唇の震えを感じ、それをおさえようと歯を立てて噛みしめ、やおらに立ち上がる。自分の正体がバレる前に、ここから逃げなければならない、考える必要はなかった、身を翻し、闇へ紛れるように走り出す。走りながら、赤いペイントガンで自分の体を撃って、自分もやられたように偽装すると、そのペイントガンを斜面の向こうに投げ捨て、イノウエとオオノからはだいぶ距離をおいた場所にあった切り株の上に腰掛けて体を休める。

いったい、俺は何をやっているんだ？

復讐を果たしたというのに、ひどく落ち込んだ気分だった。確かに、このままやられっぱなしになるよりはずっとマシだったし、これを成し遂げたことによる違いは大きかったが、それだけにいっそう、ごまかしの効かない自分の空洞を見つめるはめになってしまった。頭が混乱して考えが定まらず、自分を恥じる気持ちすら生まれて、理由の分からない涙が目に浮かぶ。イノウエとオオノを屈服させたところで、それが何になるというのだろう。二人がトシロウとレイジを攻撃したのと、レイジが二人に反撃したのでは、全く意味合いが違うし、その反撃はレイジにとって必要だったのは間違いない、しかし、あの二人もまた、しょせん、差別と支配を受ける同類だということも間違いない。これだけ勇気を振り絞って、あの二人を屈服させたところで、根本的な解決には程遠い。そして、それは教官や教師や老人たちが相手であっても、変わることはないだろう。彼らはその制度に服従している、服従することで支配しているが、支配するためには服従しなければならないのだ。この、イノウエとオオノがそうであるのと全く同じ様に。たとえ周囲からそのような人間を駆逐しても、社会のあらゆるレベルで、そのような人間の再生産が行われている、つまり、無限増殖するゾンビと戦うようなものだ。

——この社会には、自由な人間が存在しない。

その事実への気づきが奈落のように口を開けて、レイジはその底へと落ちていく。ひどい無力感だった、そこから抜け出すためには、かつて存在した誰でもない誰かにならなければならない。しかし、その誰かとはいったい誰なのだろう。かつて存在し得なかった、完全なる自律独存の超人？ 哲学者の頭の中以外に、そんな人間が存在し得るというのだろうか。少なくとも、自分は今のところそういう人間になれそうにはなかった。考えるのを止めて目を閉じる、菩提樹の下で仏は悟りを開いたそうだが、自分はちょこんと切り株の上に座って何もできずにいる、レイジは自嘲して自分の体を打つ雨に身をさらし、その音に耳を澄ましていた。

第一条 国体を変革し又は敬老の良俗を破壊することを目的とする事項を実行したる者は十年以下の懲役又は禁錮に処す

二 前項の未遂罪は之を罰す

第二条 前条第一項の目的を以て其の目的たる事項の実行に関し協議を為したる者は七年以下の懲役又は禁錮に処す

第三条 第一条第一項の目的を以て其の目的たる事項の実行を扇動したる者は七年以下の懲役又は禁錮に処す

敬老維持法を知っているかと訊かれ、知らない、と答えたレイジに、タカオカは頷き、パソコンを操作して一枚の紙にそれをプリントアウトしてみせる。

何これ？

敬老維持法の条文さ。

聞いたことないな。

君たちのような若い人が見られるニュースなどではいっさい報道されていないが、既に、数ヶ月前に公布されている、ちなみに施行は一ヶ月後だ。

手渡された紙を受け取り、あまり見慣れない文体の条文を見つめながら、レイジは首をかしげて、ひと捻り、ふた捻り。似たような響きだと思い、歴史の授業で聞いた治安維持法を思い出す。国家を破壊し国民の安全を脅かそうとする狂った行為を犯罪として取り締まるため、日本の優れた政治家が批判に負けず英断し、施行させたのだと教えられていた。

つまり、老人に敬服せよという制度に背く行為は犯罪になるってこと？

そういうことだ。世論によれば、その制度が乱れてきており、敬老精神の喪失は国家体制の崩壊に直結するとかで、その護持は喫緊の重大事、らしい。実際には乱れるどころかますます強固になっているにもかかわらずな。

現状でも充分犯罪行為みたいな扱いだけど。もはやなりふり構わずっていうか、ここまで露骨なやり方に出るなんて。

世論は、今や年寄りばかりで作られているからな。二十一世紀に入って以来の数十年、歯止めがかからず衰退している社会にあって、人々はどこまでも神経症的になってしまっている。こんなこと、衰退と高齢化が始まった数十年前の時点では想像もできなかった。

そのころは今よりマシだったのかい？

いや、すでに社会は閉塞感に苦しんでいたが、まだ人々は余裕を残していた。きっと、その頃の人々が今の社会を見れば、狂気に取り憑かれていると思うだろう。

俺も、そう思ってるけど。

今の人々からすれば、君のほうが狂人だよ。

知ってる。

崩壊する社会では、人々の八割が狂うのさ。

残りの二割は？

そうだな、おそらく一割は疑問を持ちながらもそれを捨てて適応し、残りの一割は苦しみぬいて生きるしかないだろう。そのうち、ほんの僅かな人間は戦いを挑むかもしれないが、弾圧を受け、悲惨な最期をとげることになる。勝利することがあったとしても、それは万に一つ、歴史のうねりとその戦いが、ぴったりと息を合わせたときだ。

手に持つ紙に視線を落とし、レイジは条文を幾度もなぞりながら、もはや社会の公平さなど眼中にもない立法者と主権者たちの暴走ぶりに唇を噛む。民主主義にすら見放されている自分たちに、いったいどんな手段が保証されているというのだろうか。

なあ、爺さん。

レイジは顔を上げてタカオカを見る、ふと、この前から思いつめて来たことについて、この市井の賢人に尋ねてみようと考えた。

例えば、全く恐れを抱かずに戦いを挑むことができたとして、勝つ見込みはあるのだろうか。

見込みがないと、君は思うのかい？

何だろう、例えば独裁者みたいなのがいて、そいつと戦うのとはワケが違うだろ？ 支配的な人間を直接叩きのめしても無駄で、言ってみれば、ウィルスと戦っているようなもんなんだ。そういう意味では、女性差別や人種差別と戦うのとも違う。瀰漫したそれは非常に強い感染力で人々の意識に忍びこみ、これまで支配されていた人間が徐々に感染して、去勢され、そしてとうとう隷属的支配者としての症状を発症するんだ。そして同時に、自分自身がそれに感染していくプロセスを拒絶する戦いでもある。何より、多くの人間がそれを常識としか考えていない、だから俺がこんな物言いをすることを、理解出来ない人間がほとんどだろう。勝利することがあるとすれば、そのウィルスを根絶したときなんだ。

タカオカは何度もうなずきながら耳を傾け、ゆったりと腰掛けた椅子の上で思案して、穏やかな態度でそれに答えようとしている。そして何やら思い至ったようで、本棚から漱石の『文学論』を取り出し、しばらくばらばらめくって、手を止める。

約言するに――暗示は常に戦ふ。……新しき暗示の旧意識を去る遠ければ遠きに從って戦は劇烈なるべし。

ふと、思い出したのさ、漱石がこんなことを懸命に考えていたなど。何か、これまでと違うものを世に示そうとするとき、それが古い、常態化した意識と距離があるほど、激しい戦いになる。言ってみれば当たり前のことだが、しかし漱石は、多くの新しい意識を持った人物たちが敗北してきたと同時に、ほんの一握りであれ、迫害と非難を突き抜けて勝利を手にした人間もいると述べている。

どうやって？

それは場合によるだろう。しかしここで重要なのは、そこには必ず、勝利する人間が存在し得るということさ。

あまり救いにはならないな。

少なくとも、同じ様な仲間が歴史の中にいる、それに、彼らが戦ってきた旧意識というのは、戦いにおいてはそのウィルスと同じ性質を含んでいるわけだ。例えば、差別と戦った人間は、やはり旧意識と戦った人間だ。極端な思想を持つ人間よりも、一般の人々の中に潜む常識こそが差別の最大の元凶なのだから。女性差別にしる、人種差別にしる、それがごく当たり前の常識だった時代があるだろう。ゼロをイチにすること、それを公の議論に引きずり出すまでが真の戦いだ。

でも厄介なのは、それが特定の人間を支配者と被支配者という階層に分離しないことだ。初めは誰もが支配され、やがて誰もが支配する側に回る。だからそれを消滅させることは、必ず一つの世代の利益を消滅させてしまう。誰だって自分が割を食うのは嫌だろ？ 彼らが表向きに何て言うかは知らないが、本音は結局、それをやるなら自分が死んでからにしてくれってことだ。そうやって死んでも次の世代が老いてきて、そしてその制度は温存されてしまう。差別する側とされる側が同じ人間において入れ替わるというのは、女性差別や人種差別に比べてはるかに戦いにくい。それは他人との戦いということだけでなく、自分との戦いというものを、全ての人に強いることになる。

ふむ。私が思うに――。

言いかけたまま、タカオカはまた本棚に手をつっ込んでごそごそやり、中からフランツ・ファノンの『黒い皮膚・白い仮面』を取り出してきて、ファノンを知っているかとレイジに尋ねる。レイジは首を横に振ってそれに答えた。

一つ、鍵となる考え方があるかと思うんだ。まず、ファノンというのは黒人差別の問題について考えていたんだが、彼はこの本の中で、黒人であることを誇ろうとする黒人は、白人に劣等感を持つ黒人と同じ病気にかかっているだけだ、と述べている。つまり、目指すべきは人種としてではなく、肌の色に左右されない人間として解放されることだというわけだ。そしてもう一人、マルコムXは知っているかい？

レイジはよく知った名前を聞いて、今度は首を縦に振って答える。

知ってるよ。演説集を読んだことがある。

ほう。いったいどこでだね。今の時代、どんな本屋でも手に入らないはずだし、インターネットでも政府と関連法人による検閲を受けているはずだが。

図書館の書庫だよ。ホームに侵入して、しょっちゅうそういう本を盗み出してたのさ。

タカオカは初め目を丸くして驚き、そして愉快そうに笑う。

君は本当に、私が今まで見てきたどんな少年とも違っているな。まあ、さておいてだ、マルコムXは晩年、公民権の問題を一段階上昇させ、人権の問題としてそれを考えようとしていたんだ。つまり、人間としての普遍的な権利を基本において考えることで、それは決して万能とは言えなくても、あらゆるタイプの差別と戦えるし、そしてばらばらになっている様々な種類の差別や抑圧から共通項をくくり出し、それらを一つの普遍的な問題として考えることができるようになる。だから日本の年齢支配問題は、決してそれらから切り離された問題ではない。そしてだ、サパティスタは知っているかね。

それも知ってる。

素晴らしい。今から三十年ほど前に、メキシコの独裁政党を打倒した民主的改革運動の中心的な原動力になった集団だが、彼らが六十年以上前の蜂起以来ずっと主張してきたのは、全ての、ありとあらゆる種類の差別と抑圧を受ける人々の連帯だ。自分たちの顔を隠すマスクの裏側には、女性の顔があり、先住民族の顔があり、ゲイの顔があり、労働者の顔があり、そして若者の顔があると述べて、常に世界中の人々に、集団のみならず極小の個人に対しても、共闘を訴えていたのだ。

それは確かに、俺も理想だと思ってる。でもな、爺さん、いったいどうすればいいんだろうな。俺たちはその可能性を思い描くことができても、その夢からひと度覚めて現実を見れば、常にばらばらに切り離されて、孤独の中で、あるいは戦って、あるいは戦えずに怯えている、どうしようもなく非力な個人でしかないんだ。

私も戦えずに怯えてきた人間だ、だから偉そうなことは言えないが、しかし、まずは知ることだと思うんだ、同じ場所で戦う人間が見つけれなくても、少なくとも私たちは孤独ではないと。どこかで、必ず誰かが戦っていて、そしてそれは多かれ少なかれ、自分と同じ様な理想のために戦っているのだと。

事態は好転しないな。俺は結局、今、自由になりたいわけだし。孤独であろうがなかろうが、自由であることが最も重要なんだ。

もちろん、可能なかぎりの自由を実現することだけを考えればいい、ただどうしても、その中で戦う必要というのは出てくるし、その時に、連帯の可能性が出てくる。

そのときの問題は常に手段だよ、効果的な手段がなければ、結局考えと行動が乖離してしまう。もちろん勇気も必要だ、考えと行動の間には大きな断絶があって、それを命がけで飛び越えなければならぬ。この前の演習で、俺は上級生をぶちのめしたけど、でもこの文官学校を飛び出すほどの勇気は持てずにいる。その勇気が持てないのは、結局手段がないからなんだ。もちろん結果は偶然に左右される、だからさいころを振って見ないと何も分からないんだろうし、俺は可能性に賭けたいと思ってるけど、無謀になるつもりもない。可能なかぎりの自由の実現とは、つまり可能なかぎりの手段の発見ということなのさ。

タカオカは二、三度うなずいて、手元にまだ持っていたファノンの本を机の上に置く。

実はね、私はここでひとつ、無謀になってみようかと思ってるんだ。かねてより、思ってきたことなんだが。私はずっと、その考えと行動が乖離し続けてきた人間だ、手段を見つけられずにいたし、何より、勇気がなかった。

何か、やるつもりなのかい？

不安になってレイジは尋ねてみる、タカオカの表情は柔らかいが、いくらか、思いつめたような暗さが漂う。

そう、とても危険なことをやろうと思っている。私はもう七十を超えた、みんなからまつり上げられ、紫色のリボンで飾られて、尊師、尊師、とだれもが卑屈に頭を下げてくる、たまらなく恥ずかしいよ。多くの人間は、この世の支配者のように、老いてようやく手に入れた地位を誇っているが、ずいぶんひどい裸の王様だ。ずっと服従し続けてきたくせに、いったい彼らのどこに

、尊敬される要素があるというのか。私は、老いて死が迫ってきたことで、ようやく自分の考えと行動の間にある断絶へと命がけで飛び込む勇気を持ちつつある。

具体的に何をやるんだ？ もったいつけずに、教えてくれよ。

タカオカは笑い、目を細めてレイジを見る、一瞬だけ、孫を愛でるような老人の顔が浮かび、やがて褪せたその後で、再び盟友に語りかけるような顔と口調に戻る。そしてふらりと椅子から立ち上がって本棚の前に立つと、それに優しく触れてじっと見る。

この本たちを、その言葉たちを、世に解き放とうと思っているんだ。自分たちの臆病さと勝手な権益を守るために、ひたすらに無視して排除してきた連中に、あるいはそれよりも、これを必要としているはずの人々へ向けて、この本棚に隠し持ってきた言葉たちを暴露してやろうと思うのさ。

どうやって？

いや、そんなに大したことじゃあない。実は私はね、図書館で働く前はコンピューターの技師をやっていて、それなりに腕は良かった。だから、その知識を使って、ちょっとしたウィルスのようなものを作ったのさ。このプログラムは、これらの本たちを電子書籍化したファイルを無限にコピーしながら配布する、あらゆる場所にアップロードしたり、不特定多数のメールアドレスに向けて送信したり、ファイル共有ソフトを使っている人間のパソコンに勝手に自らを複製して保存したりするのさ。

何かすごいけど、迷惑な感じもするな。

まあ、基本的には全くの無害だし、実はもうひと工夫あって、様々なネットユーザーの情報を収集して、好みや思想を絶えず分析しながら、こういった言葉を必要としているのではないかという人間を探し出し、できるだけそういう相手に向けてファイルを届ける仕組みになっている。

ちゃんとそういうこと、配慮するんだな。

その老人の心遣いが面白くて、レイジは笑う。

いや何、私の目的は、こういう言葉たちを無視することで忘却してしまおうという世の中のやり方に抵抗することなんだ。聞く耳を持たない人間にまで押し付けてやろうとは思わん。そもそも、他人を説得するというのは、おこがましく、かつ、本当は不可能なことだ。しかし、せめて必要とする人々には、しっかり届くような世の中であって欲しい。

でも、急いだほうがいいな。もうすぐ敬老維持法が施行されるんだろ？ 実行がその後になれば、爺さんが逮捕されてしまう。

タカオカはそれに対して首を横に振ったかと思うと、顔を上げて不敵に微笑んだ。

私は、もはや身の安全を確保するつもりはない。だから、敢えて施行の日に、このウィルスをばらまいてやろうと計画しているんだ。あたかも、サパティスタが北米自由貿易協定、つまりNAFTA発効の日に蜂起したようにね。そうすることで、その脅威に対抗する姿勢を明確に示そうと思ってる。

爺さんは、逮捕されても構わないってことなのか。

そうさ。すでに準備は整えてある。

何でそこまでするんだ？ 爺さんがそんな危険を冒すメリットなんかない気もするんだけど。

ひたすらに、恥じているんだよ。何もしてこなかった自分をね。

ただ単に？ よほどひどい思いでもしたとか？

まあ、誰だってそういう制度のもとで生きていれば、苦い経験の一つや二つくらいするだろう

。

そう言って、タカオカは意味ありげに目を閉じて、唇を固く結び、さも悲痛な顔で何かを思い出しているふうだったが、それ以上は語ろうとはしなかった。

しかし、まあ残念だな。この本棚にある本は、私が逮捕されたりしたら処分されてしまうだろう。

書庫に置いたらどうだい？

書庫かね。

そうさ、もはや誰もがあそこにある本はどうせ読まれることはないと思ってるから、管理はとてまずさんだ。爺さんがこっそり入って行って、その本棚にある本を置いていっても分かりっこない。もしかしたら、俺みたいなやつがいて、そこから爺さんの本を盗み出してくれるかもしれないぜ。

タカオカの顔が明るくなる、レイジの提案に満足したようで、しきりに頷いて、本棚の本を一冊一冊眺めて笑顔を見せていた。

そりゃあいい。ぜひともそうするとしよう。君は、この街のホームによく忍びこんでいたのかい？

そうだよ。

じゃあ、そこの図書館の書庫にこっそり持って行こう。もしかしたら、君も、また忍びこみたくなるかもしれないしね。この学校の中では監視の目が厳しくて君に本を渡すことはできないが、気に入ったものがあれば目星をつけておいて、ぜひとも図書館から盗み出してくれ。

すっかり上機嫌になったタカオカは、本棚の中にあった本の一冊一冊について、あれこれと丁寧に解説していき、あれがオススメだとかこれがオススメだとか、飽きることなくレイジに話して聞かせる。レイジも楽しんでそれに耳を傾ける、今まで誰ひとりとして、こんなことを話してくれる人間に出会ったことはなくて、だから、タカオカの話を知っていることが、ただ、ただ、無性に嬉しかった。

――抽象的な心の上映スケジュール

頑丈な神経は、君の、星々のようにきらきらした暖かさに屈する
ランプは緑と呼ばれ、熱っぽい季節へと踏み込んでいくのを注意深く見つめる
風は、川の魔法を吹き払い、僕は、サーベルを叩き折ってしまった透明な氷の湖のそばで、
図太い神経に穴を開けてやった
テラスのテーブルをぐるぐる囲むダンスは、震え上がる大理石のうろたえを閉じ込める
酔いがさめて生まれ変わったみたい

変なの。どういう意味？

さあ。

朗読したトリスタン・ツァラの詩集を片手にしたままレイジが首をかしげてみせると、ユイは
こころろ笑った。うずくまった小動物にちょっかいを出す猫のように、レイジに向かって、手を
ひらひらさせている。

分からないのに、読んでるの？

そうだよ。

変なの。

意味から解放されてるっていうのは、快感であり、喜びなのさ。意味を持つって言うのは、つ
まり決まった構造の中に組み込まれてるってことだからな。意味に縛られるのは、自由じゃない
。

へえ。

これは別に俺の考えだけじゃない。ジョン・ケージっていう音楽家の言葉を借りたんだ。

どんな音楽やってる人なの。

知らない。ホームで盗もうと思ったけど、レコード屋には置いてなかったな。

たぶん変な音楽だろうね。

俺もそう思う。全く意味不明なやつだよ、きっと。

そして二人は、お互いに聴いたこともないその音楽がどんな感じなのかを想像してみる、メチ
ャクチャなメロディを口ずさんでみたり、デタラメにピアノを弾くんだとか、いや、手じゃなく
てギターをぶつけながらピアノを弾くんだとか、むしろギターで殴り合うんだとか、ピアノの上
で寿司を握って鍵盤の上に乗せることで音を鳴らしていくんだとか、黒鍵がしょうゆ皿になっ
てそれに漬けて食ったりするんだとか、そのうちどうでもよくなってきて、寿司が食べたくな
ってきたとか言って笑い転げる。八月の夕暮れ、川原の空気は、ずいぶんと生温くて柔らかい
ので、どこへ行ってもブランケットにくるまれているような感じがする。

あーあ。

ひとしきり笑い、ユイはため息をついて目を閉じる。この一ヶ月は夏休みだったが、武官コー
スのワタルだけは休みがないのでここにはおらず、ほとんど毎日二人で過ごしていた。

もうすぐ、学校に戻らないといけないんだね……。

品官学校は、やっぱり退屈な人間ばかりなのか？

うん。実際のところはね、けっこう賢そうなコもいるんだけど、一生懸命そういうの出さないようにしてる。きっと、そうやっているうちに、みんな自分がもっと賢かったことも忘れていくんだらうな。

そうだな、品官だと、賢いことは仇でしかないからな、残念だけど。

レイジはどうなの、文官学校で、上手くやってる？

できるだけ大人しくしてるよ、できるだけな。文官は賢くてもいいけど、敏感であってはいけない。賢くて、かつ、鈍感であること、それが文官コースで上手く生きていくコツだ。

大変だね、私たち。他のコたちと、全然違ってらるから。

だから、こうやっていつも二人でいるんだらうな。

二人はお互いの顔を見合わせ、その通りだというふうに、風と草木のそよめきのような声で笑っていた。しかし二人は、晴れない心を持って余すような重苦しきから逃れることはできずにいて、ときどきユイがついてしまうため息には一段暗いトーンが混じる。

夏休みって、何のためにあるんだらう。あると嬉しいけど、終りが近づく度に、すごく悲しくて、何か涙が出そうなくらいになるの。ちょっと自分でも感傷的だなんて思うんだけど、でも、自分の大事な物がゆっくりと風化して、灰みたいに、さらさらって崩れて飛んで消えていくような、そんな気がする。学校に行ってる間にすり減ってしまったものが、夏休みの間だけ回復するんだけど、それが消えてしまうたびに、それが消えることに慣れていってしまっって、結局それを完全に失って、二度と戻ることはないの。今年は、特にそう。もう、自分の中には何も残ってないような感じ、来年の夏休みなんかいらんないってくらいに。

何か昔見た映画を思い出すな。

何てやつ？

『ソナチネ』っていうんだ。死を覚悟したヤクザたちがさ、ずっと沖縄の海辺で遊んでるんだ、そんなシーンが長いこと続いて、最後は結局追いつめられて、みんな死んでしまう。最初と最後は恐ろしいヤクザの顔してるんだけど、遊んでる間はずっと無邪気な表情なんだ。

ヤクザ……もうちょっと良いのなかったの？ ヤクザじゃちょっと、私は感情移入できないじゃん。

一瞬ふくれっ面をみせてから、ユイは笑う。

ふと思い出してしまったんだよ。何ていうかさ、遊んでいる間は、彼らはヤクザではないんだ。その間だけは、誰かであることから解放されてる。もしかしたら人間というのは、遊んでいる間は誰でもないんじゃないかって思うんだ。もし、本当に純粋な遊びというのが存在するなら、そのときはもはや自分自身ですらないっていうかさ。

そしたらきっと、それを失った私は、もはや常に誰かでいなきゃいけないってことなのね。

そうかもな。

もし完全に失ったとしたら話だけだ。あるいは、それを完全に失うなんてことはないかもしれないよ。

何で？

だって、誰でもない状態のほうが自然なんだから。私たちは何も、決まった誰かである必要はないんだし。

そうだな、誰かであることから、自由でさえいられたらな。

そうして、二人はしばらく黙っている。寝転がった二人は、くっついてしまうくらいとても近くにいたが、話に夢中になっていたせいで、互いの手が触れていることさえ意識していなかった。沈黙が、そのことを突然二人に気付かせたが、しかし二人ともその手を動かさずにじっとしている。

ずっと遊んでたいな、私。

俺も、できればそうしたい。

ねえ、私たちってさ、今は誰でもないのかな。

そうだな、そんな感じだな。

誰かになったら、意味のない感情なんて消えちゃうのかな。

意味のない感情？

何ていうのかな、ノイズみたいな感情。誰かになったら、喜怒哀楽とかで分類できる感情だけで生きなきゃいけないような気がする。でも今は、そんなのだけじゃなくて、すごく無意味だけど強い感情にも満たされてるの。

あるいは、その誰かには与えられた感情しかないのかもしれないな。

そしたら、誰かになってしまったら、すごく複雑な感情で誰かを好きになったりするの、難しくなるんだろうね。

二人は、どちらからともなく手を握り合っていて、会話が途切れると、恥ずかしくなってうつむいて、その手を動かしたりする、上へ、下へ、ユイのほうへ、レイジのほうへ、でも、けっして離れないように。その手で今度は互いの頬をつついたり、二人はじゃれて、くすくす笑う、互いの鼻をつまんだり、わざとつねってみたり、髪をなでたり、手を振りほどいてみせ、でもすぐに、その手をもう一度たぐりよせたり、キスをしたり。

生きてるか？

ああ。ワタルは？

生きてるから電話してるんだよ。

俺も生きてるから電話出たんだろ。

そりゃそうだ。

だろ？

レイジは軽く笑いを漏らす、電話の向こうから、同じタイミングで、同じようなワタルの笑いが漏れてくる。それぞれのコースに進学して以来、一度も電話していなかった、だから、かかってきた電話に出た瞬間、聞こえてきたワタルの声には、懐かしさと同時にそれを突き放すような違和感もあった。が、徐々に、懐かしさのほうが強くなってきて、すぐに、そんなブランクなどなかったかのように打ち解けていく。

今日で、夏休み終了だよ、確か。

そうだよ、最悪だ。

あるだけマシだよ。

そうだけどよ。

文官コース、楽しんでる？

んなわきゃねえだろ。

やっぱり。

武官コースは楽しいのかよ。

んなわきゃないって。

だろ？

ヒドイもんだよ。来る日も来る日も、来たる日ですらも、ひたすら命令に従って、大声出して、走りまわって転げまわって、一センチのズレもないように規律正しく、常に周囲と一体になって……

俺も似たようなことやってたよ。

ああ、そうなの？ 何か文官でもそんなことやるって聞いたけど、ホントなんだ。

武官に比べればヌルいもんだけどさ、耐えらんねえよ。ひたすらくだらねえし。

僕も耐えらんない。訓練もキツイけど、下級生イビリなんか陰湿なもんだね。武官コースは表向き、国と社会を守るヒーローを育てますなんてスタンスでやってるけどさ、あんな連中、敵役よりタチが悪いよ。

ああいう上下の序列が厳格なところは、必ず弱い人間にしわ寄せがいくからな。

偉いものに媚びて弱いものにキツイ、あんな臆病もんの寄せ集め、どこがヒーローなんだ。

どこも。

かしこも、そうじゃない。

俺なんかネズミ食わされたぜ、全く冗談じゃない。

マジで？ 僕はあやうくウンコ食わされるどころだったよ、各種イモムシ盛り合わせですんだけど。

気持ちワル。

いや、合わせて五匹くらいだけさ。

盛り合わせなんて言うし、井いっばいのイモムシ、がつついたのかと思ったじゃねえか。

そりゃないよ、いくらなんでも耐えられない。でも、よくレイジは耐えたね。そんなの、絶対我慢しない性格だろ？

してないよ。

食ったんじゃないの？

食った。でも、後で散々ドツキまわしてやった。

オオノを首投げで斜面にぶん投げ落とし、イノウエを血まみれになるまでボコボコにした話をしてやると、ワタルはそれを聞きながら、電話の向こう、飢えた猿が突然大好物を大量に投げ込まれて歓喜しているかのような声で、ゲラゲラ笑い転げる。イノウエがいかにか偉そうに自信たっぷりにしていて、そしてレイジにぶちのめされた瞬間に情けない声を出していたかを、何度も再現してやり、その度にワタルは笑い転げる。

僕もやってやりたいなあ。腹の立つ連中ばかりさ、新入生たちはみんなひどいストレスを抱えてる。ホントにひどくてさ、ドロップアウトするヤツも、ほんの数人だけどいたりするよ。例えば、タクマとタクヤ、実はあいつら、武官コースに入ってたった一ヶ月くらいで退学してしまったんだ。

あいつらならそれもあり得るな、おとなしく人の言う事聞いて耐えてるようなやつらじゃない。

というかさ、退学させられたんだ。

させられた？ なんだよ、教官か上級生をナイフで刺したりでもしたのか？

逆だね。あいつら、マジで根性曲がってるトコあるだろ？ 何やったのかっていうとさ、同級生の中で弱いヤツをいじめだしたんだ。俺たちが上級生からされたのより、もっとひどいことを、気弱で体も小さい同級生にやりやがる、自分たちがイモムシ食わされたらそいつに毛虫食わして、自分たちがビンタされればそいつを拳で殴りつける、そんな具合さ。そして、そいつはとうとう耐えかねて、タクマとタクヤに殴りかかったんだ、そしたらあいつら、平気な顔で先の鋭いシャーペンを取り出して、その同級生の頬にぶすりと突き刺しやがった。みんなその瞬間は凍りついたよ、悲鳴を上げて泣き叫ぶ同級生が嗚咽をもらす度に、肉を貫通したシャーペンが、ぶらん、ぶらん、て揺れてるんだ。血が、シャーペンを伝ってぽとぽと床へ落ちるがままにさせて、そいつはそれを引き抜くこともできずに、恐怖におののいて真っ白い顔で叫びながら、今にも失神して倒れそうになってた。

ちょっと、あまりに胸クソ悪い話だな。

だろ？ 今まで自分があいつらとつるんでたなんて考えるだけで、ゾッとする。その後はさ、

慌てた教官たちがなだれ込んできてタクマとタクヤを取り押さえて、どっかに連れて行ってたよ。噂では、散々ぶん殴られてから懲罰会議にかけられて、結局、学校を追放されたらしい。

どうするつもりなんだろうな、コースを退学したやつが、まともに生きていける場所なんかないだろ。

職はもちろんないね、日本製品なんか今どき誰も買わないから工場労働もないし、道路工事も建築工事も限られてるから肉体労働もない。生活保護なんかは形骸化して、ほとんど年金にまわされてるし。

結局は犯罪者になって、そのうち警察からリンチ食らって、牢屋にぶち込まれるのは確実だろうな。

いくらか要領さえよければ、風俗業界とかにもぐりもめることもあるらしいけど。

どうだろうな、あいつらは悪事を働く才能に恵まれてるところがあるからな。

うん、あんまり言いたくないけど、たぶんあいつらは犯罪者になってしまうだろうね。

二人はしばらく沈黙の中において、ワタルはタクマとタクヤのことを考えていたが、一方のレイジは、ずっと頭に引っかかっていたことについて思い逡巡して、後ろめたさに苦しみつつも切り出すべき言葉定まらず、訪れた沈黙を盾にして、覚悟を決める時間を稼いでいる。

そうだ。

ん？

ユイとは電話したのか？

いや、してない。

そうか。

何かさ、しづらいよ、やっぱり。僕はもうユイのことはあきらめてるんだ、でも、ふんぎりつかなくて。まだ、上手いこと、自然に話できそうにない。

うん。

誰かと結婚しちゃうんだろうな、あいつ。僕たち、昔からお互いのこと知ってるだろ、だから、すごく変な感じするよな。たぶん、品官コースに進んだからには、あと三、四年のうちに結婚しちゃうんだぜ？ 僕らの知ってるユイがだよ？ 変な感じするよ、ホント。

うん。

どうした？ 何か、らしくないな。

いや、実はさ――。

いっそう沈黙が深くなった。薄い青のようだった沈黙が、青みと黒みと彩度を増して暮れ果てた夕闇のようになり、濃密さと硬さで二人を閉じ込める。

.....もしかして、ユイと？

ああ。何か、そんな感じになったんだ。

沈黙は音を立てて黒く凍りつく、手に持つ電話がひどく重たくなり、腕がしびれ、レイジは今すぐにでもそれを投げ落としたくなる。電話の向こうでも、沈黙に固まるワタルはしばらく何も言わずにいたが、やがて、短い、ため息のような、苦しそうな笑いを、その沈黙のひび割れのような音をさせて、二回、漏らして、今度は深く長く息を吐いていた。

何だよ、人のいない間に。

すまん。

いや、別に怒ってるんじゃないよ。

悪意なんか、これっぽっちもなかったんだ。

分かってる。というか、知ってたんだ。

知ってた？

知ってたってというか、正確には、こんなことになるんじゃないかっていう予感があっただけけどさ。

予感ね。俺にはほとんどなかったな。ただ、この夏休みのせいで、二人だけでいる時間があまりに長かったからっていう感じがする。

まあ、何でもいいよ。事実は事実ってことだし。でもさ、どうするんだ？ あんまりこんなこと言いたくないけど、ずっと二人でいられるわけじゃないだろ。

ああ。

何か考えがあるのか？

正直、分からないんだ。ワタルが悩んでたのと同じ様に、俺もそっから先へ進めないんだ。

社会は完全に壊れてる、だから、まともなやり方では無理だろうね。僕には、そういうものが思いつかない。

俺も思いつかないよ。現実的な問題に近づくほど、どんな強固な知識も軟化して溶けて崩れて、しまいにはどろどろになって流れて消えるのさ。そして、あるいは、勇気が持てない。

僕もそうだね、本気で覚悟してやれば、何か方法が見つかるのかもしれないけど。

両方必要だよ、度胸も手段も。どっちが欠けてもだめなんだ。

でも、どうあっても見つけないといけない。

そう思ってる、けど。

けど、だな。結局同じところをぐるぐる回ってる。あきらめるのが一番楽なんだけどな、みんながそうしてるように。

それは言いっこなしだろ。

今、自由になりたいんだってことだね。

俺、その言葉けっこう気に入ってるんだ、実は。

僕は正直に言ってるだけだよ。何の含蓄も込めてない。

だから良いんだよ、まっすぐ胸に飛び込んでくる。影響力のある言葉ってのは、意外とそんなところがあったりするんだ。

二人はまた黙っている、沈黙は白んで、グラデーションをなして、甘い赤みを帯びた色に染まりながら、くらげのように浮いたり沈んだり、やがて、ゆっくりと、遠くへ去っていく。

レイジ。

ん？

あきらめんなよ。

だせえセリフだな。

うるせえバーカ。

もう電話切るし。

僕もそうするわ。

じゃあな。

それじゃあ――。

九月の初め、夏休みあるいはアクアリウムの中の幼年期の終り、始業式、敬老維持法施行の日。まだ季節は夏なのに、空気はいやに冷たくざらざらして、早めた歩みにまとわる風が肌を傷めつけてくるような感じがする。夏休みの間、ユイと一緒にいて平和な時間を過ごしていた一方で、タカオカのことはずっと気になっていた。いつ、タカオカは逮捕されてしまうのだろうか、よりもよって法律施行の日にあんなことを実行に移せば、警察はメンツに賭けてもタカオカを捕まえに来るだろう、いくら老人尊師として崇められる年齢とはいえ、犯罪行為までは許容されない。あきらかに挑発行為であって、おそらく、タカオカは狂人として処理され、もしかすると、何らかの精神疾患として病名を貼り付けられ、精神病院にでも押し込まれ、この社会からはじき出されることだろう。そうなる前に、レイジはタカオカに会っておきたいと思い、その日の放課後、その足でまっすぐ図書館へ向かう。

図書館の中に入ると、空気が、重たいものがゆっくりと滑り落ちるように動いた。それはしばらくそこで動いた人間が誰もいない空間に特有の空気で、奥に入るレイジは全く何の気配も感じない。人に触れることがなかった図書館は、紙とホコリのにおいに守られた要塞のように重苦しい。どうやら今日は、タカオカは来ていないようだった。一日休みを取りながら、万全の体勢をもって、自らの計画を完遂しているのだろうか、レイジはそう思いながら、無駄足に安堵混じりのため息をひとつ吐いて、念のためだと思い図書館の奥にあるタカオカの部屋へと行ってみる。ドアの前に立って、レイジはふと、背後に何かの気配を感じて振り返った。誰もいない、ただ、窓から差し込んだ光で白く浮かび上がるカーテンが、戯れるようにふよふよと漂う小さなホコリを見下ろすようにして、そこにある。何でも無いその光景が、妙に、幻想的なものを感じられて、レイジはずっと動かず、白い点のようなホコリに長い時間見とれたままでいる。急に、いやな予感がしていた、鼻先を、細い糸くずでくすぐるような、かすかなにおいがしている、人のおいだ。やんわりと突き放すように部屋のドアを押す、ゆっくりと開けていく視界の向こうに見えたのは、まぎれもないタカオカの姿だった。ひっくり返したバケツから流れ落ちたペンキのような影の上で、天井に結んだロープで首を吊ってぶら下がり揺れている。頸椎が外れて伸びきった首の上で頭部はほとんど九十度に折れ曲がり、不気味に緑がかかった肌はトカゲのようで、その質感はまさに死んだ人間のものだった。

なんで――

口から出たはずの叫びは、喉が塞がって音にならない。レイジは震える足で後ずさりして、しかし上手くいかずにつまずいて崩れ落ちてしまう。なんでだ、再び叫ぼうとしたが、喉を塞ぐ塊が腫瘍のように肥大化して、今度は息すら漏れていない。タカオカの目は、まぶたの間の闇で接着したかのように閉じられて、口は自らの言葉を封殺するように突き出た舌が上唇にくっついて固まっている。もう一度、レイジは全力で叫び声を上げる、ようやく口から出たのは、むずかる子供のような、情けないニワトリの悲鳴のような、そんな音でしかなかった。

あれこれ、警察から聞かれた後に解放されたレイジはひどい無気力に襲われ、圧倒され、何をするもの苦痛で、ただ、タカオカがなぜ死んだのかを考えていた。遺書は残されていなかった、部屋は綺麗に片付けられており、自宅にあったものもほとんど処分されて、遺品と呼べるような

ものはなかったらしい。それまで生きていた人間が、今日、突然死んだ、それだけのことで、手がかりはない。逮捕されるくらいなら死んだほうがマシだったのだろうか、しかしレイジには、タカオカがそんなふうを考えていたとは思えなかった、これまで数度、会って話していた感じから言っても、常に冷静さを保っている印象で、ちょっとやそとの恐怖心で取り乱すような人物ではない。誰かが自殺に見せかけて殺したのかとも思ったが、警察はどう見ても自殺に間違いはないということをほのめかしており、その可能性もなさそうだった。

自分の部屋の窓の外を眺めながら考えていると、一匹の黒猫が横切って来て、レイジの目の前でくるりと一回転して座る。すねたような顔をしながら、黄色い目で、こちらを見つめている、腹でも減っているのやらと思い、そばにあったお菓子の食い残しを投げてやると、不満そうに鼻をふんふん鳴らし、前足で二、三度転がしてから、しゃあねえと言わんばかりに食べ始める。食べ終わるとくりんと首をねじってまたレイジを見つめるので、食い足りないのやらと思い、もう一つ投げる。黒猫は同じ様に不満顔で食べ終えて、またレイジを見る。もう一度繰り返すと、やはりふてくされた顔で見るので、なんとなく腹が立って、レイジはそのお菓子を勢い良く投げつけ、黒猫の額にぺしんと当てる。にゃあと叫んで、黒猫はしっぽを軸にしてくるりと半回転すると、怒ったように鼻をふがふが鳴らし、ひょいと塀を飛び越え、どこへ行くのやら、迷いもない動きで、まっすぐ走って消えてしまった。

何か、裏切られたような気持ちになっていた。一緒に、同じ問題について考えて戦う姿勢を示してくれたはずのタカオカが、さっさと自分の仕事だけ終えて、どこかへ逃げてしまった。後に残されたレイジは、ぽつんとして、馬鹿みたいに何もせずに、無気力なまま、まるで誰もいない荒野の上で拳を振り上げたまま固まってしまったかのように、寒々しい気分をどうにも解決できずにいる。少しずつ前に進んでいたように思えた物事が急に押し戻されたまま窒息されて、もはやここからどう動いて良いのか分からなくなりそうだった。ともあれ、とにかく、タカオカは消えた、何も残さず、跡形もなく。だから、後はもう一人で考えていくしかない。しかしどうしても、腑に落ちない感情が獣の鉤爪のように脇腹に引っかかり、レイジはとうとう顔を伏せ、その痛みをやり過ごそうとするが、いくら時間が経てもそれは和らぐことなく、ずっと、うめき声を漏らしている。

それから月日が流れても、折り合いは付けられそうになかった、レイジは、タカオカの死について誰にも語ることなく、深く掘り下げて考える気にもならず、症状の軽い持病を放置するかのよう、決して消えないそれをずっとそのままにしている。何らかの行動を起こすこともできず、周囲も自分も欺いたまま環境に適応してずるずると学校生活を送っているばかりで、自分が腐っていくような感覚に苛立ちながらも、無気力と失望の中に閉じこもっていた。

また夏が始り、新入生たちがプログラムに参加させられていた、レイジはもちろん演習に参加することはなかったが、かといって新入生に何か救いの手を差し伸べるようなこともしない。同級生たちは意欲的に参加する意志を示し、自分たちが受けた苦しみを、弱い立場の人間に押し付けてやろうと嬉々としている。憎むべき屈辱と服従の連鎖、かつて苦しめられた人間が同じ苦しみを同じ立場の人間に与える不条理、同じ人間の再生産が続いているのを目の当たりにしても、それを破壊する手段は何も見つけれない。トシロウは参加はしていなかったが、しかし去年の演習以来、どことなく陰鬱な雰囲気をもとう少年になっていしまい、レイジと話すことをどちらかといえば避けているような感じさえある。

以前ならば、死んだタカオカのことを思い出して、タカオカなら何と言うだろうかと考えてみたりもしたが、今やそんな試みすら頭がない。問いかけても問いかけても、何の、答えも手段も出てこない。このままここにいたいとも思っていない、今自由になりたいという気持ちも失っていない、だが、そう望めば望むほど、タカオカの死や、トシロウの陰鬱さや、上級生たちと同じ顔に変わっていく同級生たちや、自分自身の無気力さに叩き潰されて、より深い絶望に沈んでいくようだった。

そこから逃れようとする心性によってなのかは分からないが、今はユイとワタルのことを思い出すことが増えてしまっている。しかもそこにはいくらかのノスタルジーさえ混じっていた、現実的な壁にぶつかって苦しむ以前の、無知であるがゆえに可能性を信じていた頃のことを回想するなどというのは慰めでしかなく、ノスタルジーは最低の解決法でしかなかったが、どうしようもなく打ちのめされていたレイジは、それを冷静に判断する能力さえ失いかけていた。

教室の、窓の外、レイジの同級生たちが、迷彩服を身につけて、用意されたバスに勇み勇んで乗り込んでいく。バスは、プログラムに苦しみ抜いている新入生たちのいる場所へと向かうだろう。最悪の儀式がまた始まろうとしている、あれから一年、再び、演習が行われようとしているのだ。

遊ぼう――

再び夏休み、その初め、会いに来たユイはレイジの顔を見るなりそう言う。連れ立って、二人は馬鹿みたいに、走りまわり、転げまわり。ホームを中心として灰色の霧に覆われたような街は、八月の光の中で燃える草木の白熱の緑で蜃気楼のように揺れていた。二人はあまりに子どもっぽい遊びにうち興じて、それはオニごっこだったり、かくれんぼだったり、くつ飛ばしだったりする。棒切れで、雑草を払ったり、フェンスを叩いてリズムを刻んだり、それに合わせてデタラメな歌を作ったり。いろんな色の花びらを集めてきて、それを空に向かって投げたり、ひらひらと落ちてくる花びらの中でぐるぐる回ったり、落ちた花びら拾い集めて手のひらの上に並べたり。そんな遊びばかりせがんでくるユイに少しだけ戸惑ったが、やっているうちにレイジはだんだん我を忘れてしまい、一緒になって楽しんでいた。

すっかり遊び疲れてしまった二人は川原で寝転がる、ここには灰色の霧はかかっている、空は高く青くて、雲は柔らかくて白くて、全ての色はまぶしくて目を細めるほどに鮮明だった。

聞いた？ ワタルのこと。

呼吸を落ち着けてからずっと空を仰いでいたユイが、急に静かなトーンで切り出す。

何となく。

ユイの方は見ずに、レイジは答える。ワタルが死んでしまったということは、もうすでに耳にしていた。ただ、いったいどういう理由で殺されたのかは、よく知らない。

ひどいよね。

ああ。でも、何があったんだろう。

知らないの？

実は、詳しいことは知らないんだ。

そっか。

ユイは何度か深呼吸をする、気分をどうにか落ち着けようとしていたのだろうが、それでも声は震えていて、むしろ呼吸の度、揺らいているようでさえいる。

ワタルはね、殺されたの。

それは知ってる。

タクマとタクヤにね。

え？

ワタルを殺したのは、あの二人なの。

何でそんなことになるんだ。

ワタルはね、武官コースの現地研修に出てたの。警察官のまねごとみたいなやつで、ホームの中をパトロールしてた。そしたらね、偶然、ホームに忍びこんできたタクマとタクヤに出くわしたんだって。ワタルは、最初その二人を逃がそうとしたの。でもね、その二人は逃げなかった。代わりに、ワタルをからかって、挑発し出したらしくてね。タクマとタクヤは武官学校を退学になってたでしょ？ だから、そこで立派にやってるワタルを見るのが面白くなかったんだろうね。でも、ワタルは挑発には乗らなかった。二人がしつこくワタルを馬鹿にして、頭を叩いた

りしても、ずっと我慢してた。そのうち飽きるだろうと思って。でも、あの二人はそれを止めなかった、どんどんエスカレートして、胸ぐらをつかんだり、ビンタしたり。とうとうワタルは我慢できなくなって、反射的にタクマを突き飛ばしたの。不意を突かれてよろめいた拍子に、タクマは壁で頭を強く打つたみたい。そしたら気が短い二人はものすごく感情的になって、社会からはじき出された鬱憤を晴らすみたいに、持ってた鉄パイプで、二人がかりになって、ワタルを殴り続けたらしくって――。ようやく他の警察官たちがやってきて二人を取り押さえたとき、とっくにワタルは死んでたんだって。あの二人、ワタルが動かなくなっても殴り続けてたんだよ？

ひど過ぎるよ、そんなの。

レイジは何度かうなずく、それが何に対してのうなずきなのかはよく分からない。頭の中には、それが生の記憶だと錯覚するほどにクリアな映像として、タクマとタクヤが砂色の壁に囲まれたホームの殺風景の中、テラコッタのような夏月の下、鉄パイプを頭上に振りかざし、苦痛にあえぐワタルを面白がって、ひたすらに殴り続けている姿が浮かんでいる。抑圧あるいは排除された人間の、鬱屈とした感情のはけ口が、憎むべき敵が遠くにいたとしても、実際にはごく近い距離にいる他人に対する不条理な暴力として噴出する、それは世の習いで、至る所にありふれて、常に、身近な悲劇として体験されてしまう。

ホントに、何でこんなことになるんだろうね。

うん。

結局、卒業してからワタルには会えてなかったね。最近のワタルは、どんなこと考えてたんだろう。

どうかな。でも、あいつはずっと、このままでいいんだろうかと思ってたはずだよ。もちろん武官コースでやっていくことにも疑問を持ってたし、別に警察官になりたいわけでもなかった。でも、他に選択肢がなくて、次から次の段階へ押し出されて、そんなふうに実地研修に出てたんだろうな。だからきっと、ワタルが二人を逃がそうとしたってのはそういう理由だよ。武官学校を退学させられたタクマとタクヤにも、それが犯罪に手を染めていくようなものであっても、何か自分とは違う生き方の可能性があるってことを否定せずにいたんだ。

それなのに、ね。

タクマとタクヤにはそんなこと分かんないよ。たぶん、憐れみを受けてるとでも思ったんだろ。真っ当なコースを生きてるワタルが、自分たちを見下してるとか、そんなふうに解釈してさ。

イヤだな、そういうの。でも、疎外感が強いと、そういう考え方になるんだろうね。

そうだな、不信とか、悪意とか、そういうものだけが、ああいう人間の現実になってしまうんだろうな。

同時にため息をついて、二人はまた空を見ていた。今までワタルを含めた三人で共有していたはずの時間が、流れるほどに一人分、余計に溜まっていくような気がして、レイジもユイも、それをどうしたらいいのかよく分からない。

このままでいいのかな、私も。

俺はだめだと思ってる、でも、どうすることもできやしない。

ホントに、何も方法はないのかな。

ずっと考えてるけど、思いつかない。

考えてばかりいるから、じゃない？

あるいは、どうすることもできないから、考えることに閉じこもろうとするのかもしれない。

何かやってみるとか？

解決策は常にそこだけど、でもそれは万能薬じゃない。時には耐えて機会を伺うことも一つの手段だったりするから。

その機会はいつ来るんだろう？

いつなんだろうな。悠長に構えているには、あまりに時間がなさすぎる。

そうだね。時間がない。時間が――。

突然、ユイの目に涙があふれた。ぽろぽろと流れてくるそれに驚いたように、ユイはかばうように両手で顔を覆うが、もはや何もかも、せき止めることができずに、小さく声を漏らして泣き出してしまふ。あまりに唐突で、なぜ泣き出したのかもよく分からず、レイジはじっとユイを見つめている。大きく、ゆっくり、何度もユイは呼吸を繰り返す、どうにか自分を落ち着けようとしていた、レイジはユイが決して弱い人間でないことを知っている、だからしばらくそのまま黙って、それが収まるのを待つ。

ユイ？

ごめん。

どうかしたのか？

何か、ホントに時間がないなって思ったら、泣けてきた。

確かに、ただただ追い込まれてるだけってことの無力感ったらないよな。

うん。でも、それだけじゃない。

特別な理由でもあるの？

そう。

言えないようなこと？

言いたくないこと、でも、言うよ。

何だよ。

.....私ね、たぶん、結婚しちゃうんだ。

そう言ったユイの顔から、レイジは目を離すことができなかった、ずっと自分に言い聞かせ、覚悟を決めてきたことだったが、それでも、想像しているよりずっと早く訪れたそれに、完全に不意をつかれ、戦慄するほどのひどい無力感の奈落に突き落とされる、巨大な工場の中にひとり取り残されて泣き叫ぶ子供のように、どこまでも憐れで、どこまでも絶望的だった。

品官学校のコたちはね、今、いろんな会社とか役所とかに、研修って言う名目で手伝いに行ってるの。実際には、花婿探しなんだけどさ。私、レイジのこと考えてて全然そんな気分じゃなかった、周りのコたちが一生懸命自分を気に入ってもらおうと頑張ってる姿を見て、すごく憂鬱になってたの。私たちはすごく無力で、だから愛されるくらいしか生きる手段がなくて、そんな現実を目の当たりにするのが、すごく苦しかった。私、へそ曲がりだから、研修に行ってた県庁で、ツンとすまして、周りに無関心で、嫌われない程度に最低限のことだけやって、でも誰に

も好かれないうようにしてたの。みんな私のことをちょっとヘンなコだと思ってた、だから互いに距離を取って、私は上手く孤立することができた。それなのに、そういうところにはいろんな人がいるのね、そんな私を気にかけてくれる人がいたの。四十歳くらいの県庁の職員で、すごく優しく、孤立する私を気遣ってあれこれ世話を焼いてくれた、仕事のことでサポートしてくれたり、私の心を開かせようといういろいろ話しかけてくれたり。すごく頭が良くて、私が悩んでることとか、そういうのを察するのが上手で、だから、私も少しずつその他人に心を開いていった。それでね、その人、どうやら私と結婚したがってるらしいの。はっきりそう言われたわけじゃない、でも、その人の態度とか、あとはそういう組織は結局ムラ社会だから、出どころの分からない噂が広まって、おせっかいな人たちがそれとなく私にそれをほのめかしてくるんだよね。別に、私はその人と結婚したいなんて思ってるわけじゃないの、でも、もし、レイジとずっと一緒にいるのが無理なら、たぶん、私は――。

レイジは、もうユイの顔を見ていなかった、見ることなどできなかった、体を起こして、ほとんどにらむように、揺れて、うねり、どこかの果てへ落ちていくように流れる川の方を向いたまま、黙って、ユイの話を聞いている。

怒ってるの？

違う。

私、どうしようもなくなってるの、どうしようもなく恐いの。私のお母さん、何で死んだか知ってる？

いや、聞いたことないよ。

私のお母さん、すごく強い人だったの。そんなふうには、男に庇護されて生きるのを拒んで、学校を飛び出して、私と同じくらいの歳で私を産んで、誰にも頼らずに生きようとしてた。年齢で区分けされて支配されることも嫌って、そういう社会にも堂々と反抗して、同じ様に社会からはずれた仲間と一緒に過ごしてた。意志が強くて、カッコ良くて、美人だったって、みんな私に話してくれる、そんなお母さんだったらしいの。でもね、結局そういう性格が災いしてしまった、いつも、納得いかないことがあれば周りの男たちにも容赦なく立ち向かって、理不尽なヤツはこてんぱんにやっつけてたんだけど、そのせいで、それを快く思わない相手が増えてしまった。そしてとうとう、お母さんを嫌う数人の男たちが、お母さんをレイプして、殺してしまったらしいの。みんな差別主義者だったのね、対等でいようとするお母さんが、憎らしくてたまらなかったみたい、自分たちが年齢で差別されて、排除されてるくせに、自分たちも平気で女を差別するような連中だったの。表面では強い相手に立ち向かう姿勢を見せてるくせに、結局は身近な相手にそのはけ口を求めているんだね、タクマとタクヤみたい。強くて公正で勇気のある人間は、それあればあるほど理不尽な暴力にさらされてしまう。だから、私がそういうふうには生きようとするれば、お母さんと同じ様な目に会われるかもしれない、だからどうしようもなく恐いの、どうしようもなくなってるの。いくじなしで、無力で、最低だなんて思うけど。ねえ、レイジ、時間がないよ、どうしようもないのかな？ どうしたらいいのかな？

レイジは何も言えなかった、必死で頭の中をかき回して言葉を探しても、何も見つからない。両目を繰り抜かれて苦しむ盲人のように、暗黒に圧殺され、イバラが血管の中を埋め尽くして全

身を駆けずり回るかのように、ひどい痛みが襲う。ユイに何の言葉も返してやれないことが、絶えられないほど恥ずかしかった、いくじなしで、無力で、最低なのは自分のことだと、頭を抱え、歯を食いしばる。救いはなかった、唯一、自分を責めることだけが救いだったが、それは最低の解決に過ぎない。

身をひそめる。草はあの時より伸びて、夜露に濡れて、怪物の舌のように闇を舐めている。久しぶりに、たった一人で忍び込むホームの壁には今までになかった威圧感があって、登るのにひと苦労しそうだというレイジは思う。ワタルも、タクマもタクヤも、ユイも、みんないなくなってしまう。そしてもう一人、タカオカも。いかげんに、決着をつけなければならない、レイジはそう考えている、タカオカが死んでからいろんなことが宙吊りになってぶら下がったままのような気がする。今までずっと、どこかでタカオカを軽蔑し、恨んでいた。何もかもを投げ出して逃げてしまった、そんなふうを決めつけて、唐突で不条理なその死について自らに納得させようとしていたのだ。ただ、そうればするほどに、レイジはいろんなものを宙吊りにしたままになってしまう。だからそんなことをしている場合ではないのだ、やるべきことを先延ばしにするほど、傷は広がり、ものごとは取り返しがつかなくなっていくだろう。タカオカが残していったもの、それを忘れたことはない、ずっと取りに来るのを躊躇していたが、いつか、受け取りに来なければならないものだった。つまり、それを手に入れることで、同時に、タカオカが死んだということを受け入れ、タカオカが存在していないということ、ごく自然な、日常的な事実として置き換えるということになる。どこかで、タカオカはレイジの日常に存在していた、だからこそ軽蔑し、かつ憎んでいたのだ、そしてそれは、まだレイジがタカオカを必要だと思っていたのに、何のこともなしに消えてしまったからこそだった。

目指すは図書館、レイジはロープをはしごに変形させて、するすると壁をよじ登る、赤青緑黄紫の光が、背後で、その遠くで、何かの暗号を示そうとするかのように点滅する。その暗号は、しだいに輪郭を失って、崩れた言葉となる、色とりどりの暗号で書かれた詩、休みなく、機械的に、それを書き連ねていく。あれこれ考えたりしている暇はなかった、ほとんど飛び降りるようにして、反対側に垂らしたロープを伝ってホームの中に入ると、レイジは闇を頭からすっぽりかぶるように身を屈め、画一的で無機質な意匠の建物から建物へ、その陰にくるまって突っ走る。二年前にレイジたちが何度か忍び込んだことで、ホームの警備は厳しくなっていた、ワタルがそうだったように、武官コースの生徒たちが駆り出され、侵入者がいないかあちらこちらでパトロールを行っているのだ。さらには最近ワタルが殺されたことで、いっそうの緊張感と警戒心を持っているのは間違いない。見つければ過敏になった生徒たちに有無も言わず殴られるかもしれない、レイジは慎重に慎重を重ね、ホームの中でも警備が手薄になっていそうなところを選びながら進む、多少遠回りしてでも、見つかる危険は絶対に避けたかった。灰色の霧に覆われたホームの、街灯の光は、水性のインクで描かれた街に落ちた雫のように、ぽつぽつとにじんで揺らいで、ひどく危うい雰囲気のを漂わせる。あの街灯には、きっと集団首吊りがよく似合う、レイジはそう思いながら、建物の陰に身をひそめた。街灯のそばを歩くときは当然見つかりやすく、だから息を殺し、耳をすまし、あらゆる存在の気配が消えて張り詰めた冷気のような静けさがやってくるまで動かない。レイジはそうやって、建物から建物、街灯から街灯、幾度も幾度も、通り過ぎる警備員たちを見送ってやり過ごし、鋭い刃のように夜を裂いて、図書館へと忍び込む。

ぱりぱりと、割れる石片の、粒たちが、書庫へ続く階段の底へと落ちて行く。足音ができるだけ静寂を崩さないように、レイジは進む、足の裏で薄い膜を破らないようにでもしているかのよ

うな動きで柔かく一段一段を踏んで、闇の底へ、それを突き抜けたところにある書庫の中へと入った。タカオカが本当に学校に隠していた本をここへ移したという保証はなかったが、レイジはそれでも良かった、その場合でも、もはやタカオカについて考える手がかりはないのだと割り切ることができる。書庫が警戒されていないのは相変わらずだった、小説などは特に乱雑に放置されている、そもそも今日ではよほどの物好きでもなければ誰もそんなものを読まない。

ただ、小説が無造作に置かれていたおかげで、タカオカの遺品を見つけるのは思ったより簡単だった、ほんの数冊だけが、妙にきちんとした居ずまいで並べられていたのだ。レイジは見覚えのある一冊を手にとってみる、『私の個人主義』、タカオカが特に気に入っていた一冊で、色のあせ具合や古びたわりに損傷していない様子など、まさしくタカオカの持っていたものに間違いない。ぱらぱらとめくってみる、立ちのぼる古い紙のにおい、それと同時に、白い真新しい封筒がはらりと落ちて床を滑り、レイジのつま先に当たった。遺書だ。そう直感して拾い上げ、じっと見つめてから、レイジは封を切る、中からたった今作られたかのように白鮮やかな紙が現れ、それを広げてみると、まるで香水のように不思議に甘いインクの匂いがふくりと漂い、すぐに消える。

「我が生涯最後の友へ」

その手紙の冒頭、タカオカはレイジにそう呼びかけていた。

私はこの手紙を、私の生涯最後の友へ向けて書いている。君が本当にこれを読んでくれているかどうか、私にはもはや確認することはできない。もし、今これを読んでいるのが私の全く知らない誰かなら、すまないが、すぐに破って捨てて欲しい。

おそらく、私は君を混乱させてしまっただろう。無理もない、あんなに威勢よく社会を批判して、反撃の計画を立てて意気込んでいたのに、その計画を実行するなり自分勝手に自殺してしまうんだから。何よりもそのことについて、まずは君に詫びておく。

私はこの手紙を書くかどうか、ずっと迷っていた。こんなものを君に残すのはおこがましいような気がするからだ。唐突に死んだ私を、君は憎んでいるかもしれないし、軽蔑しているかもしれないし、笑っているかもしれない。しかし、今私の頭に浮かんでいるのは、何度か私の部屋に来てくれた君が、驚くような頭の良さで、私の言う事を貪欲に吸収してくれていたことだ。私の言葉にそこまでの価値があるかどうかは知らないが、それでも君が、まだ私から何かを学びたいと思っているのなら、君にとって少しでも有益なものを残して置こうと考えることにした。

限られた大きさのこの手紙に、いったい何を書き残そうかと考え、思い至ったのは私の恥についてだった。変に勿体つけたような知識をひけらかすよりは、私の人生を苦しめ続けた、私の後悔について書いておこう。もはや自らを取り繕うことはない、今から私は命を絶つものだから、他でもない私の人生をここに置いていくことにした。

私は一九八二年、九州のとある街に生まれた。陳腐な都市計画によって作られた、日本のどこにでもあるようなありふれた街で、同年代に建てられた住宅が立ち並んでいた。決まった部品を組み合わせたプラモデルのような、灰色の屋根、白い壁、お手頃サイズの庭、核家族。どこもかしこも同じものがそこには並んでいて、そんな風景を見ながら私は育ってきた。

私と君は主に年齢で支配される社会を批判し合う仲だったから、この手紙もそういうことを中心に書いていこう。当時は、そういった風潮もむしろ時代とともに緩んできて、体育会系の部活動や会社組織などを除けば、そこまで理不尽に支配されるということもなかった。とはいえ、中学生に上がったころから誰もがそういうことを教育されるようになる状況は存在しており、私もその例外ではなかった。誰もが上級生を恐れていたし、おいそれと自らの意見を主張できる世界ではない。我々はひたすらに劣位に置かれ、また、自らを劣った存在だと思うように洗脳されて生きていた。私は決して勇気のある少年ではなかったから、そういう状況に黙って従い、芽生えようとする自我が伸びていかないように、常に足の裏で踏みつけていなければならなかった。何かの折、上級生と関わるがあれば黙って従い、頭を下げ、適度にこびへつらう必要があったが、誰もがそれを自然のことであり、それが社会で生きる人間の自覚なのだと信じていた。私はそれがはっきりとした反抗心ではないにせよ、小さな疑問に胸の奥をくすぐられながら、そんな学校社会に適応していた。もやついた、黄土色の、絡まり合う糸くずのような疑問が肺に絡みついて、まるで呼吸の度に私を悩ませているかのようだった。

そして今で言う文官学校のような高校に入り、私は少しずつ本というものを読み始めることになる。幸い良い本に出会えた私は、後ろめたいことのように足の裏で踏みつけていた自我が、それまでの反動だとばかりに、軋むような音をさせながら伸びていくのを感じることができた。小

さく縮こまっていた疑問もやがて明確な形を手に入れ、私は内面においてのみだったが、その制度に対しての反抗心を獲得していく。そして私は誓ったのだ。自分は臆病で、そういう制度と正面から闘える人間ではない、だから、その不条理を甘んじて受け入れよう、しかし、その不条理を同じ様に他人に押し付けるような人間にだけは決してなると。無力な私の、せめてもの反抗だった。私はこんなふうに考えていた、例え過去に全ての人間が正しいと思ったことでも、今生きている私が間違っていると思えば、私は私の考えを肯定することができる、この世に生きる全ての人間に、そういうことが許されているのだと。

人並みに大学に入り、卒業した私は、やはり人並みに会社に就職して働き始めることになる。大学では、アルバイトやサークル活動など、できるだけ上下関係のあるところを避けていたおかげで束の間の開放感を味わっていた私だったが、やはり会社に就職するとそういうわけにもいかなかった。私を待っていたのは、丁稚のような下積みとしての身分と、その身の丈にあった振り舞いをする事だ。私の教育係だった男は、私の四年ほど先輩で、まさに典型的な年齢による支配制度への適応者だった。私を含めた新人たちのやることなすことを否定し、スキを見せれば罵倒する、そんな調子だ。教育係と称する彼が求めていたのは、もちろん我々の成長ではなくて、ただ単に彼に服従し、無能をさらけ出すことで彼の自尊心を満たすことではない。彼はことあるごとに、「使えないヤツめ」と吐き捨てた。私はそれに強い反感を持ち、必死になって自らの能力を向上させることでその状況を改善しようとしたが、そうするほどに彼は面白くなさそうな態度になり、私の足を引っ張り、粗探しをして、時には讒言まで撒き散らし、できるだけ私が飛び抜けようとするのを邪魔する始末だった。「使えないヤツめ」という彼の侮言を、私は何度耳にしたか知れない。それが彼の口ぐせだった。仕事を辞めようかと思うこともあったが、割と金払いのよい仕事だったのと、当時は日本経済が崩壊し始めた頃で転職が難しくなってきたこともあり、腹にいら立ちを抱えながらも、私は結局その会社に居座ってしまうことになる。その後の日本経済の末路を思えば恐れずに転職すべきだったのかもしれないが、当時の私はいつか経済が再浮上すると信じて、来るはずもないチャンスを待ち続けるだけになってしまった。

時代は少しずつ狂い始めていた。経済は眼に見えるほどはっきり衰退の兆候を示し、混乱した政治はポピュリストの支配下に置かれるようになる。将来の設計図などお構いなしに、場当たり的に多数派の支持を得た政治家が生き残るような状況下で、もはや政治的マイノリティである若者に活路はなかった。年数を追うごとに、場当たり的な政策は徐々に高齢者寄りになっていき、合わせて社会の制度や慣習までもがそれに合わせていびつに変形していったのだ。そして皆が、生き残るためにそれに適応し始める、そうしないと政治家は選挙に勝てないし、可処分所得を失う若者を相手にしても企業は利益を確保できない、若者は何よりも敬老精神という名の阿諛追従を見せなければ社会不適合者として扱われる、とうとう誰もが年寄りにおもねる社会が誕生してしまうことになったのだ。一方的に変化する社会はそこに生きる個人との間でフィードバックを繰り返してバイアスを強め、法律、制度、慣習、思想、それら全てが塗り替えられてしまった。

一方で私の仕事の方は順調で、私はがむしゃらに努力してきたおかげで実力を認められ昇進し

、とあるプロジェクトのリーダーを任されることになった。皮肉にも、社会が老人に服従することを求めるほど、活力を無くした経済はさらに弱体化し、そのおかげで競争が激化することで、余裕を失った企業は年功序列を崩していかざるを得なくなったのだ。私の教育係だった男にしても、今まで上司や先輩に取り入ることで生き残ってきたような人間だったが、そのような経済状況下ではもはや彼のようなタイプをかばう上司などいなくなり、いつのまにか、懸命に働いていた私がふと気づくと、彼はとっくに退職へと追い込まれて消えていたのだ。「ざまあ見ろ」――非常に醜いことだが、私は心の内で密かにほくそ笑んでいた。私をひたすら踏みにじり、苦しめていた人間がいなくなったのだ、私からすればそれはそれは愉快的な話だったことを察してもらいたい。会社の経営状況は悪かったが、それでも私は恵まれていた。チームの部下たちとともに、励ましあいながら成功を目指して全力を尽くす、世間の悲観をよそに、私はとても充実した日々を過ごしていたのだ。そのチームの中には、もちろん仕事のできない、要領の悪い部下もいた。しかし私は、決して罵らず、サポートとアドバイスを丁寧に行いながら、最大限に部下が成長してくれるよう努めていた。

ただし、そうは言っても、やはり状況は悪くなっていることは事実で、会社は市場でじりじりと追いつめられ、私のプロジェクトにもそれに伴って暗雲が立ち込めるようになっていった。私は絶えずチームの士気を高め、文字通り寝る間も惜しんで働いたが、徐々に疲労し、いっこうに先の見えない状況にいら立ち始めてしまう。これに失敗すればもう後がない、そういう心境だった。私は粘り強かった、今考えても、本当によく頑張っていたものだと思う、とっくに限界だというような状態なのに、まだ力を振り絞り、頭と体を動かし続けていたのだから。しかし、物事というのは、上手くいくこともあれば、全くダメになることもある。ときには、人間の努力とは全く無関係に結果が生じることすらある。私のプロジェクトも、結局上手くはいかなかった。皆が力を出し尽くし、消耗していた、だからこれは本当はチーム全体の責任のはずだった、皆が万全であれば、そんなことは起こらなかったはずなのだ。私のチームの、要領の悪い部下がやらかした小さなミスを見逃し、それがどんどん膨らんで、大失敗を招いてしまう。それは、とっくに命運尽きていたプロジェクトがとどめを刺された瞬間だった、私はその部下を責める必要などなかった、安堵してかれを抱きしめてやることすら不自然ではないくらいだったのだ。しかし私は限界まで神経をすり減らし、冷静な判断力を失っていた、混乱していたといっても良いくらいかもしれない。馬鹿みたいに感情的だった。私は失敗を詫びるその部下の顔を見るなり、「使えないヤツめ！」と大声で罵倒してしまったのだ。ショックを受けて青ざめた顔をしてうつむいていたその部下は気づかなかっただろうが、その瞬間、私は自分自身の口から出たその言葉に驚愕し、彼がそうである以上にショックを受け、青ざめてしまった。慌てて、私は彼に退出を命じた、とにかく、急いで一人きりになる必要があったのだ。その言葉を吐いてしまったとき、私は自らの手で、自らを破壊してしまっていた。もはや、まともに他人に見せられるような有様をしていなかっただろう。青白い顔で机に突っ伏し、息を荒らげて、冷や汗をかき、がたがたと震えていた。私は、自ら招いた恥辱に耐えかねて、涙すら流しそうになっていた。私は、知らず知らずのうちに、自分が軽蔑していたあの男と、全く同じ言葉を漏らしてしまったのだ。それは、私が今まで守り通してきたものを粉々にしてしまう行為だった。もはや、私は私ではなかった

、神経を限界まですり減らしていたとはいえ、私はその衝動に抵抗できず、あの男に同化してしまっていたのだ。それは、完全なる敗北であり、私が地獄に墮ちることが決定した瞬間だったと言ってもいい。

辞表を出すタイミングを計るまでもなく、会社は潰れてしまった。数年経ってから聞いた話だが、その後、あの部下は自殺してしまっただけで、彼は様々な人生の重荷を背負って追い詰められていったのだろうが、私のひと言もあるいはその重荷の一つだったかもしれない。一方の私は、ある程度の貯金は持っていたのですぐに就職先を探すこともなく、これといった動機付けがあるわけでもないくせに、本を書いてみることを思い立った。ありあまる時間を使って、私はまさに手遊びという調子で長年たまっていた思いを吐き出し数編の小説を完成させた、しかし、私はすぐに頭を抱えてしまうことになる。それらを書いている間、私はずっと、自分の言葉が誰かに書かされているものであるという感覚を味わっていた。同時にあの男の顔がちらついてしかたがない、私は、私の全ての言葉が借り物であるということに苦しんでしまうことになるのだ。同時に、世の中にあふれている言葉のほとんどが、似たようなものだと思っていた。たとえマイノリティとして発する言葉であっても、それはどこかで類型化されており、反社会的に訴えられた言葉すらも、それがどのように社会に受け取られ、どのように消化吸収されていくのか、パターンができてしまっている。全ての言葉が、それに対する社会の反応が、予定調和でしかない。皆がそういう言葉を話しているのだ。完全に個人的な、予測不可能な言葉。そういう言葉が、私や、私の周囲にはなかった。ついに私は頭にきて、本を書くのも止めてしまう。

失望して腑抜けた私が最後に始めたのは、そういう個人的で予測不可能な言葉を収集することだった。思い当たる本をかき集め、こっそりと本棚に並べていくことにしたのだ。折しも、時代はそういう本を少しずつ隅へ追いやり、忘れ去ろうとし始めたころだった。私は静かに学校の図書室で司書をしながら、ずっと機会を伺っていた。罪滅しと、雪辱の機会を。それが私が敬老維持法の施行日にあんなことをした理由だ。私は、私が求めていた言葉を、世に解き放ちたかった。そして同時に、私は自らに罰を与えたかった。闘えなかったこと、そして敗北したこと、それをひたすらに恥じる気持ち、私の中から消えることはなかったのだ。もちろん、私は生真面目すぎたのだと思う。まるでドン・キホーテのようだ、自らの信じるものに取り憑かれ、社会の条理を度外視して、それによって行動してしまうのだから。しかし、そこには私のように愚かな人間も生まれるが、歴史上の革命家たちのように偉大な人間も生まれてくる。私は中途半端な人物ゆえに犬死にしたが、もっと強い信念と才能を持っていたならば、ずっと求めてきたような言葉を持つことも可能だっただろう。

とはいえ、私は、私を救う方法がもう一つあったのだろうと、命を絶つ直前になって思う。それは、赦すことだ。私を苦しめた相手をではなく、自分自身を赦すということ。闘えず、敗北した、自分を赦すということだ。私には、ずっとそれができなかった。できなかったからこそ、私はあの男に同一化し、「使えないヤツめ」というあの汚い言葉を、憐れな部下に向けて放ってしまった。私が私を赦せない限り、あの男は私の中に住み続ける。自分を赦せなければ、自分を苦しめた相手に同一化しない限り痛みをごまかすことはできないからだ。私の心は、それほどま

では強くなかった。私は最後の最後まで、私を赦すことはできなかった。だから、私は今から私自身に罰を与えることにしよう。深刻になる必要はない、愚かな男が喜劇を演じているのだと思って、笑ってくればそれで良い。

君は、私が今までに見たどんな少年よりも、強靱で気高い精神の持ち主だった。あるいは君のような人間なら、自分を赦し、かつ自分の言葉を獲得できるのかもしれない。

勝手なことばかり言って、本当にすまない。そしてさようなら。

我が生涯最後にして、最高の友へ。

起き上がり、タカオカが残してくれた本と遺書をバッグに詰め込んで書庫を出ると、レイジは足早に階段を駆け上がる。図書館の外では、重たい闇がうねり、荒波のように打ちつけていた。その闇を、ぱらつく小糠雨が引っかいて、その傷跡に微かに漏れてくる街灯の光が入り込んで翡翠色にちらちらと輝き、そこを走るレイジは目を細めて突き抜けていく。建物の陰から陰へ、陰また陰へ、感覚は異常に冴えて、遠くを見まわる警備員たちの、顔貌、話し声のみならず、肌の質感まで見え、息遣いまで聞こえてくるよう。一步一步と足を運ぶたび、レイジだけに分かるような夜の軋みが、耳のあたりで響いている。その夜は、ゆっくりと黒い薄皮をはがしていくように、滲む青の中へ明け始めていた。タカオカの遺書を何度か読み返したせいで、思いのほか長い時間を費やしてしまったのだ。まずいと思いながら、レイジはできる限りに速度を上げて走る。灰色の霧の向こう、ねじけたような視界の中に、せり出すような存在感の壁がようやく現れると、その前で立ち止まりじっくりと周囲を伺う。壁をよじ登る間はどうしても目立つし無防備になる、だから、最大限の慎重さで、警備員がやってくる心配がないかどうかを見極めなければいけない。遠くに聞こえる二人組の警備員の気配をじっと闇にくるまりながらやり過ごすと、轟音に等しいほど耳を圧迫する静寂が訪れた、ホームから無事脱出するチャンスがきたのだ、そして、これを逃せばよいよ身の危険にさらされることも間違いなかった。

ロープを投げる、一度目は上手く引っかからず、慌てて先端の鉤を手元に手繰り寄せる。少し気持ちが焦っており、それだけでなくタカオカの遺書のことなどがまだ頭に残って、上手く集中出来ていない。物音に気づいた警備員がいないかどうか一度動きを止めて確認してから、レイジはもう一度ロープを投げる。今度こそしっかり壁の上端を捕まえたロープに素早く足をかけ、焦りすぎて揺れないようにペースを保ちながら壁を登りきった。ホームの外、街の景色、遠くに見える光、赤青緑黄紫、薄明の、燃えるような、濃藍の洪水に飲まれて、今にも消えそうになっている。甘くぬめっていた夜の風は、凝縮されて固くなり、冷気を帯びた礫のように肌を叩く。引き上げたロープを素早く壁の外側に垂らし、勢い良くレイジはその下へと降りていく、もはや、地面に足をつけてしまえば安全なはずだった、どうしても焦る気持ちは抑えられず、多少の物音などさせてでも、早く逃げることを優先してしまう。

壁の外に立ち、引っ掛けたロープを取り外して回収する。完全に安堵していた、これが二年前ならば、確実に安全は確保できたはずなのだ。しかし、レイジはそこではじめて、足早に駆け寄ってくる気配に気付いた。しまったと思ったときにはすでに遅い、以前より警備が強化されていたのはホームの中のことだけではなく、周辺にもまたパトロールの人員が配備されていたというのは想像に難くない。舌打ちして、レイジは自らの不注意を悔やんだが、それはしょせん甲斐のないことだった。

動くな！

三人、そこに表れた警備員たちがレイジを取り囲む、みんな、レイジと同じくらいの歳で、武官コースの生徒たちであることは間違いなかった。緊張に表情を固くして、力の入りすぎた様子で警棒を頭の上に振りかざし、威嚇するように構えつつにじり寄ってくる。ひどく怯えた気配すらあり、ワタルのように殺される可能性を想像しているのかもしれない。いずれにせよ、へたに抵抗するのは得策ではなかった、恐怖で冷静な判断力を失った生徒たちに襲われれば、そのまま

殴り殺される危険性があるからだ。レイジは特に何か言われる前に両手を上げて膝を地面に付き、抗戦の意志がないことを示す。生徒たちは恐る恐る近寄ってきて、リーダー格らしい一人が指示を出すと、残りの二人がレイジの腕を押さえた。リーダー格の生徒は、じっと、レイジを見下ろしている、職務を果たして勝ち誇るような表情の裏、怯えと迷いが、呼吸のようなリズムで浮かんだり消えたりしている。それはレイジの腕を押さえる二人にしても同じことだった。この三人にも、ワタルと同じ様な迷いがあるのだろうか、あるいは、すでに去勢され、自分を見失い、イノウエのようになりつつあるのだろうか。レイジは妙に冷静になって、切れ味鋭い眼光で生徒たちを観察しながら考える。タカオカが求めていた言葉、そしてそれは自分が求めてきた言葉でもある、そういう言葉を獲得したとき、自分だけでなく、この三人のような人間たちも解放し得るのだろうか。ワタルが求めていたように、今、そこに、自由を実現させることができるのだろうか。分からない、それは無理かもしれないし、結局、それぞれ、個人個人の問題に過ぎないだろう。同じ境遇にありながら、自分とこの三人は分断されているし、その三人もまた、それぞれ分断されているのだ。ワタルのような、イノウエのような、あるいは自分のような、思いを心に秘めて呼吸を繰り返し、不可思議な、多面体の水晶のような沈黙の中で佇んでいる。

ここで何をしている？ お前は何者だ？

緊張を隠し切れずに震えた声で、リーダー格の生徒が尋ねてくる。自分を解剖し、説明する言葉、それは彼らのための、彼らが求めるものでしかない。自分が何者か？ それを、語らされるわけにはいかないのだ。それは自分自身について語る言葉のようでいて、全く、自分自身からは断絶している。語れば語るほど、そのとき人は、自らの自由を手放していけよう。その誰かとは、自分自身ではなく、彼らの手のひらに収まる、彼らが用意した、彼らのための誰かではない。それは、タカオカや自分が求めている、自分が手にしてきた本の言葉とは違うものだ。自分を語り得る言葉、個人的で予測不可能な異物。腕を押さえる二人の生徒たちは震えており、その手に力はこもっていない、スキをついて振りほどき、正面のリーダー格の生徒を突き飛ばせば、きっと逃げることはできるはずだった。

震え、軋んでいた夜が、いよいよ明けようとしている。灰色の街を食い破るように現れた太陽の、凶暴な光が赤く輝いて世界を八つ裂きにしていく、雲はひび割れ、凍っていた空が溶け始め、今にも崩れ落ちてきそうになっていた。赤い光は、影に沈んだ生徒たちを背後から撃ち抜いてレイジの目に届き、まぶたの裏を焼く。血が沸騰して体を駆け巡り、自分が溶けていくような気がする、そして周囲の、世界の、ありとあらゆるものが溶けていくような気がする、三人の生徒たちも、この荒地も、ホームも、街も、全てが赤い光の中で煮えたぎり、溶けていけよう。

お前は何者だ？

もう一度、溶けた世界の赤い流れの中から質問が浴びせられる。赤、もはやその色だけが、この世界の全てだった。

――それは、俺の言葉ではない、絶対に、お前らの求める言葉をお前らにくれてやるつもりはない。俺は、俺だけのための言葉を求めるだろう、それが可能か不可能かということは関係ない。そして、やがて獲得されるその言葉は、俺と、俺のような誰かのために発せられるだろう。

レイジはゆっくりと、声の聞こえてきたところへ向けて顔を上げる。もはや、ここでひざまずいている時間はない、やるべきことはただ一つ、走りだすことだけだ。だから、レイジは腕に力を込めながら、ようやく、閉ざされていた口を開くと、たったひと言だけ言葉を返す。

ノーコメント。